門真市埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集

FUGENJI

普賢寺古墳

門真市石原東・幸福北土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

２０００年６月

門真市教育委員会

盾持人埴輪

序　文

平成11年10月、市内古川遺跡において、弥生時代前期末から中期初頭の方形周溝墓が10基も発掘されるという、画期的な発見がありました。

それから1年半後の平成12年2月、今度は普賢寺遺跡で、土地区画整理事業に伴う発掘調査があり、埴輪を伴う古墳(普賢寺古墳)が発見されました。古墳の発見は門真市では初めてのことで、埴輪も大阪府では出土例の少ない盾持人埴輪をはじめ、多くの埴輪が出土し、多大な成果をあげることができました。

門真市域は、地盤が低いため、かつては至るところに湿地や池が広がっており、このようなところに古墳が築かれていたとは全く予期しておりませんでした。門真市の古墳時代を代表する遺跡に「伝茨田堤」がありますが、「普賢寺古墳」の発見により、新たな1ページを加えることとなり、門真の古墳時代が少し具体性を帯びてきたように思います。

今後は、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の皆様をはじめ、多くの方に理解され親しみをもたれるよう、保存・活用されることが望まれます。本書がその役割の一端を担えれば幸いに存じます。

最後に、このたびの発掘調査に際し、深いご理解と多大な協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成12年6月

門真市教育委員会

教育長　中谷　決

例　言

1. 本書は、門真市石原東・幸福北土地区画整理事業に伴い、門真市石原東・幸福北土地区画整理組合より依頼を受けた門真市教育委員会が門真市幸福町 432－1 で発掘調査を実施した、普賢寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査面積は 489 ㎡であり、調査費用は全額門真市石原東・幸福北土地区画整理組合が負担した。
3. 本調査にかかる文化財保護法の規定に基づく通知書等は、次のとおり提出済みである。
   ○ 法 57 条の 2 にかかる届出書　平成 11 年 4 月 6 日付け 門教史第 5 号
   ○ 法 98 条の 2 にかかる通知書　平成 12 年 2 月 15 日付け 門教史第 5 号
4. 現地調査は、平成 12 年 2 月 7 日に着手し、平成 12 年 3 月 10 日まで、実働 24 日で終了した。
   発掘調査は、門真市教育委員会市史編さん課技術職員宇治原靖泰が担当し、松田朝由(奈良大学大学院文学研究科博士前期課程)　船築紀子(奈良大学文化財学科 2 回生)　白井俊輔(奈良大学文化財学科 2 回生)　清水道明(奈良大学文化財学科2回生)　山部聡美(奈良大学文化財学科2回生)　矢田知子の参加があった。
5. 遺物整理・報告書作成作業は平成 12 年 6 月 30 日まで実施した。
   出土遺物の整理・報告書の作成は宇治原靖泰　松田朝由　船築紀子を中心に、白井俊輔　清水道明　山部聡美　矢田知子　真弓庸子の参加があった。
6. 現地調査及び遺物の写真撮影は宇治原靖泰、トレースは真弓庸子が行った。
7. 発掘調査業務は、東海アナース株式会社に委託した。
8. 調査の過程で、次の方々から貴重なご教示を賜った。記して感謝の意を申し上げる。
   水野正好(奈良大学)　西山要一(奈良大学)　服部文章(大阪府教育委員会)　山上弘(大阪府教育委員会)　横田明(大阪府教育委員会)　吉村健(大阪府教育委員会)　福永信雄(東大阪市教育委員会)　松田順一郎(財団法人　東大阪市文化財協会)　中西克宏(財団法人　東大阪市文化財協会)　狭川真一(財団法人　元興寺文化財研究所)　角南聡一郎(財団法人　元興寺文化財研究所)　林田善也(守口市教育委員会)
9. 調査に際して、門真市石原東・幸福北土地区画整理組合、門真市市街地整備課、古川橋霊園管理組合の方々より深甚のご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる。
10. 本調査にかかわる遺物・写真・カラースライド・実測図等は門真市教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

凡　例

1. 遺構実測図・本文中の標高はすべて T.P.(T.P.±0m＝東京湾中等潮位を基準とする。)＋で標記した。
2. 埴輪・土師器・瓦質土器・陶磁器の断面は原則として白抜き、須恵器は黒塗りで表した。
3. 遺物実測図の番号と写真図版の番号は対応する。
4. 執筆分担は文末に記した。

本 文 目 次

序文
例言　凡例
第1章　調査に至る経過……1
第2章　位置と環境……2
第3章　調査の概要……5
　第1節　調査区の設定……5
　第2節　基本層序……5
　第3節　調査日誌抄録……6
第4章　普賢寺古墳の調査……6
　第1節　SD01(周濠)……6
　第2節　その他の遺構……12
　第3節　遺物出土状況……17
　第4節　SD01(周濠)内出土遺物……18
　(1)　円筒埴輪……19
　(2)　朝顔形埴輪……29
　(3)　形象埴輪……29
　(4)　須恵器・土師器……34
　(5)　樹木・木製品……38
　第5節　周濠以外から出土した遺物……39
　(1)　円筒埴輪……39
　(2)　朝顔形埴輪・須恵器……40
第5章　古墳時代以降の遺構と遺物……40
　第1節　遺構……40
　第2節　遺物……40
第6章　調査のまとめ……46
　(1)　普賢寺古墳の墳丘規模と墳形……46
　(2)　周濠に付設する陸橋について……48
　(3)　遺物出土状況からみた円筒埴輪列残存の可能性について……49
　(4)　人物埴輪について……49
　(5)　円筒埴輪について……52
　(6)　普賢寺古墳の位置付け……53
第7章　結語……55

挿 図 目 次

図 1　調査位置図……1
図 2　門真市の位置……2
図 3　河内湾Ⅰの時代(約 7000～6000 年前)……2
図 4　河内湾Ⅱの時代(約 5000～4000 年前)……2
図 5　河内潟の時代(約 3000～2000 年前)……3
図 6　周辺の遺跡分布図……4
図 7　調査区配置図……5
図 8　基本層序柱状図……6
図 9　調査区全体図(S＝1/150)……7～8
図 10 調査区地形実測図(S＝1/150)……9～10
図 11 SD01(周濠)平面図(S＝1/200)・断面図(S＝1/40)……11
図 12 SD02 平面図 (S＝1/80)・断面図(S＝1/40)……13
図 13 SD03 平面図 (S=1/120)・断面図(S＝1/40)……13
図 14 SD04 平面図 (S＝1/80)・断面図(S＝1/40)……13
図 15 周濠内遺物出土状況図 1 (S=1/80)……15～16
図 16 周濠内遺物出土状況図 2 (S=1/100)……17
図 17 円筒埴輪部分名称図……18
図 18 周濠内の円筒埴輪 (1)……21
図 19 周濠内の円筒埴輪 (2)……22
図 20 周濠内の円筒埴輪 (3)……23
図 21 周濠内の円筒埴輪 (4)……24
図 22 周濠内の円筒埴輪 (5)……25
図 23 周濠内の円筒埴輪 (6)……26
図 24 周濠内の円筒埴輪 (7)……27
図 25 周濠内の円筒埴輪 (8)……28
図 26 周濠内の朝顔形埴輪……28
図 27 形象埴輪 1 (人物)……30
図 28 形象埴輪 2……31
図 29 周濠内の須恵器・土師器……32
図 30 周濠内の樹木・木製品 (1)……33
図 31 周濠内の樹木・木製品 (2)……34
図 32 周濠内の樹木・木製品 (3)……35
図 33 円筒埴輪 (1)……36
図 34 円筒埴輪 (2)……37
図 35 円筒埴輪 (3)……38

図 36　朝顔形埴輪・須恵器……39
図 37　古代以降の出土遺物……41
図 38　昭和 36 年撮影航空写真……46
図 39　普賢寺古墳復元平面図……47
図 40　盾持人埴輪復元図……50

表 目 次

表 1　周濠内出土円筒埴輪観察表 1……42
表 2　周濠内出土円筒埴輪観察表 2……43
表 3　周濠内出土朝顔形埴輪……43
表 4　周濠内出土須恵器・土師器観察表……43
表 5　周濠内出土樹木・木製品観察表……43
表 6　周濠以外から出土した円筒埴輪観察表 1……44
表 7　周濠以外から出土した円筒埴輪観察表 2……45

図 版 目 次

図版 1　周濠検出状況
図版 2　遺物出土状況全景
図版 3　完掘状況・墳丘現状
図版 4　土層断面
図版 5　遺物出土状況(1)
図版 6　遺物出土状況(2)
図版 7　人物埴輪(盾持人と盾)
図版 8　蓋形埴輪・朝顔形埴輪
図版 9　円筒埴輪(1)
図版 10 円筒埴輪(2)
図版 11 円筒埴輪(3)
図版 12 円筒埴輪(4)
図版 13 円筒埴輪(5)
図版 14 円筒埴輪(6)
図版 15 円筒埴輪(7)
図版 16 円筒埴輪(8)・その他の遺物(1)
図版 17 その他の遺物(2)
図版 18 周濠内の樹木・木製品(1)
図版 19 周濠内の樹木・木製品(2)

第1章　調査に至る経過

平成11年4月16日、門真市石原東・幸福北土地区画整理組合より、埋蔵文化財発掘の届出が提出されたため、原因者と協議を行い、試掘調査を実施した。

試掘調査では、若干の埴輪片は出土したものの、遺構は確認できず、また試掘調査が可能な場所が限定されたため、発掘調査を実施するに足る資料を得られなかった。8月に再度試掘調査を行ったところ、遺構の存在が確認され、遺構から埴輪の破片が出土したため、発掘調査を実施することとなった。

今回の調査対象地は、一部が古川橋霊園の東と北側に接する状況にあった。同霊園は周囲より地盤が高く、試掘調査では埴輪片が出土したことなどから、古墳の墳丘になる可能性があると予測をし、発掘調査の範囲については、できるだけ同霊園に沿うように設定した。

平成12年1月22日、門真市石原東・幸福北土地区画整理組合と門真市教育委員会が発掘調査の覚書を交わし、古川橋霊園に接する489㎡が調査対象となった。平成12年2月7日から同年3月10日まで発掘調査を実施した。

調査は、地表より約100cmを機械掘削、以後、最大200cmまで人力で掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

(宇治原)

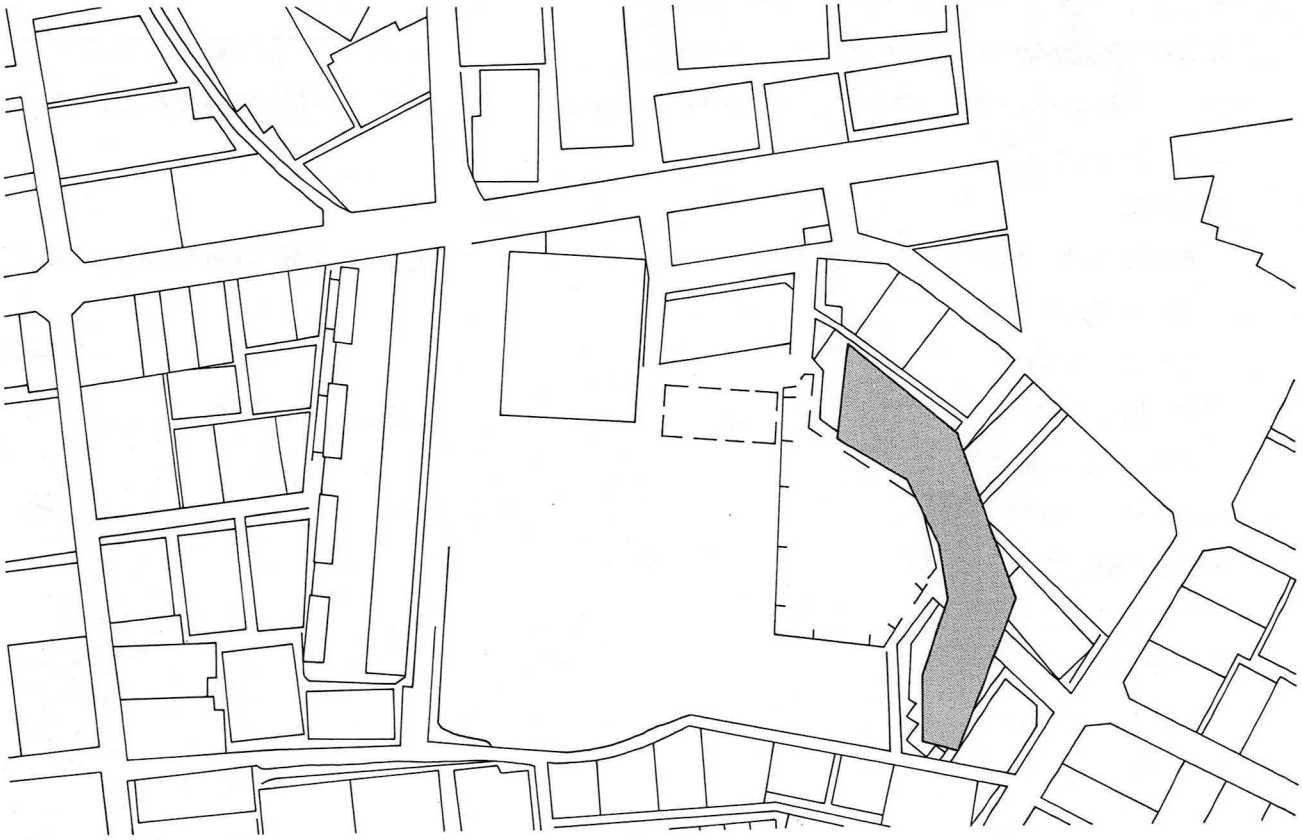


図1　調査位置図

第2章　位置と環境

大阪府の東北部に位置する門真市は、面積 12.28 ㎢、人口約 14 万人で、守口市・寝屋川市・大東市・大阪市鶴見区に接し、海抜 0～3m 程度の平坦地で占められている。

門真市は中世以来農村として発展した地域で、市制施行した昭和 38 年頃までは、名産の蓮根の栽培が至るところで見られる水郷地帯であった。しかし大阪市に近いことから、大正 11 年(1922)の大同電力大阪変電所建設を契機に、松下電器産業が昭和 8 年(1933)、天辻鋼球製作所が昭和 14 年(1939)に進出するなど製造業が発達しているが、交通が便利なため流通業も盛んである。

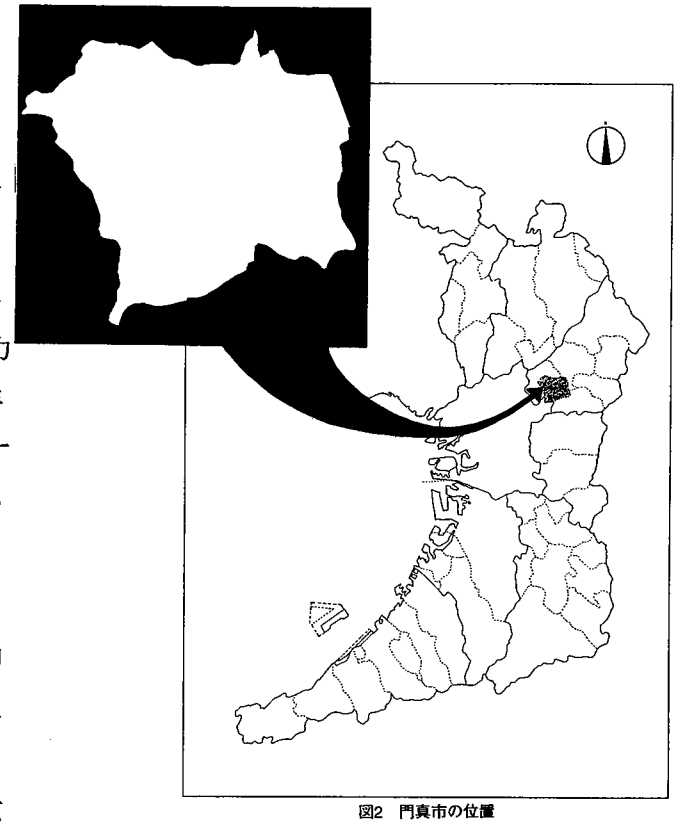


図2　門真市の位置

旧石器時代

市域において旧石器時代の資料は現在のところ知られていない。全域が厚い沖積層に覆われているためである。大東市深野南のボーリングデータは、ウルム氷期最盛期の河内平野深野地域には、湿地が広がり、気候は現在より寒冷なことを示しており(梶山・市原 1972)、門真市域もほぼ同様の環境であったと考えることができる。

縄文時代

縄文時代前期(約 7000～6000 年前)になると状況は一変する。「縄文海進」により急激に海面が上昇し、「河内湾」が出現したと考えられている。河内湾は、門真市域はもとより、北は高槻市、南は八尾市、東は生駒山麓に達していたようである(梶山・市原 1985)(図 3)。

約 5000～4000 年前になると沿岸砂州が発達し、門真市域にも「水走沿岸州」が延び始め、やがて一部が離水(陸化)を始めていた

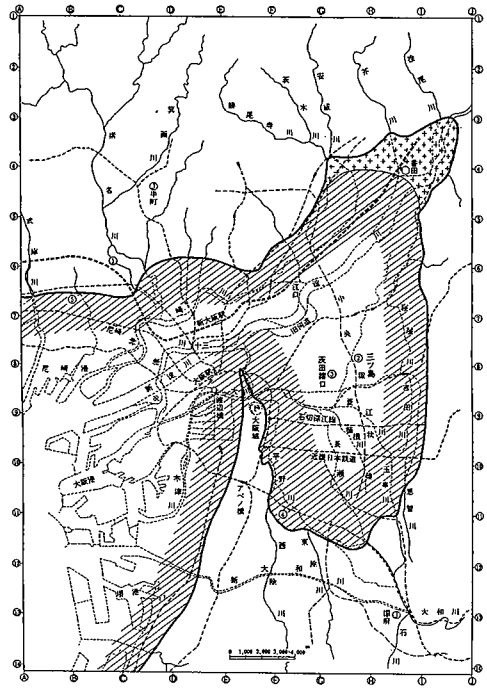


図3　河内湾Ⅰの時代（約7000～6000年前）梶山・市原1985より

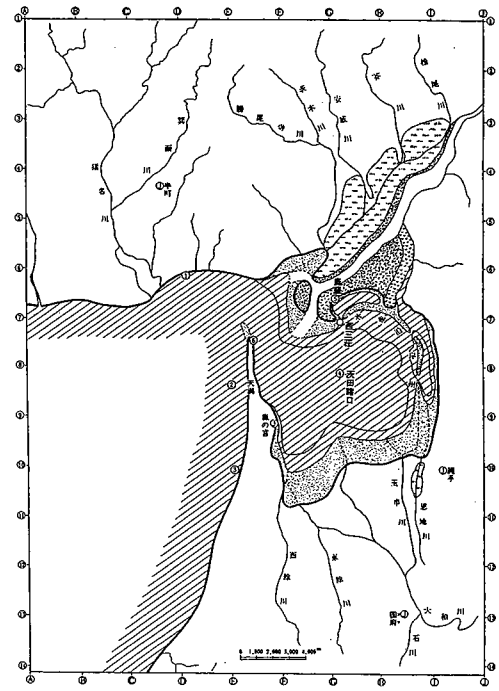


図4　河内湾Ⅱの時代（約5000～4000年前）梶山・市原1985より

と考えられる(梶山・市原 1985)(図4)。

西三荘・八雲東遺跡では、縄文時代後期(約3500年前)の北白川上層式Ⅲ期の深鉢と浅鉢が出土したが、当時は定住生活が始まっていたというより、乾期に離水するわずかな陸地で、魚・貝・水鳥などを獲る期節的な生活をしていたのではないかと考えられている(宇治原・植田 1993)。

弥生時代

次に市域に生活の痕跡が認められるのは、弥生時代前期(約2300年前)になる。

この頃の市域の状況は、河内湾の陸化がさらに進んで、汽水の「河内潟」となっていた(梶山・市原 1985)(図5)。水走沿岸州は離水が進み、細長く延びた砂州上に集落が形成されていたと考えられる。

市域において周知されている遺跡は、西三荘・普賢寺・古川・大和田遺跡が主なものである。

西三荘遺跡は、中期前半から後期の土器が出土し、土器の量は市内の遺跡で最も多い。

普賢寺遺跡は、前期後半から中期の遺跡で、昭和60年の調査で弥生前期後半の壷が遺構に伴って発掘されている(宇治原 1990)。また、昭和年59年の調査では弥生中期の土器とともに石包丁が出土している(福田 1984)。古川遺跡は、前期後半から後期の遺跡で、弥生時代全期間継続するのは市域ではここだけである。また、前期の壷は、明らかに生駒西麓産であり、中期段階でも他地域産の土器が認められる。

大和田遺跡は、昭和38年に銅鐸三個が京阪電車大和田駅改修工事中に、地下2mの砂の中より発見されたことで有名である。銅鐸は、いずれも弥生時代中期に鋳造された小型で扁平なつくりのもので、四区袈裟襷文と無文のものがある。

三ツ島遺跡では、昭和37年に弥生時代後期の土器とともに、くり舟が製作途中の状態で発掘されている(上田ほか 1963)。

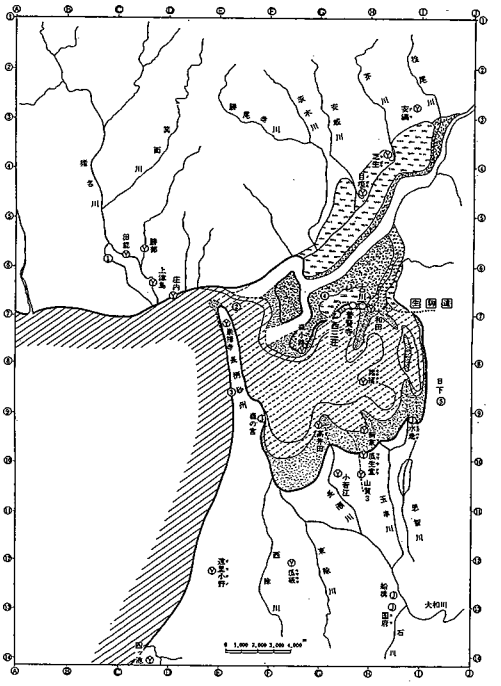


図5 河内潟の時代（約3000～2000年前）梶山・市原1985より

古墳時代

古墳時代の河内は、古墳が多く造られた地域であったが、門真市域はこれまで古墳が確認されておらず、今回の普賢寺遺跡の調査で、初めて6世紀初頭の埴輪を伴う古墳が発見され、古墳の空白地域は埋まった。

また、市域には記紀の記録に残るわが国最古の堤防工事で築かれた「茨田堤」と伝えられる堤防の遺構が唯一、宮野町・常称寺町に残り、一部が大阪府指定の史跡になっている。

古代

市域の奈良・平安時代の遺跡は、西三荘・橋波口・本町・普賢寺・古川・宮野遺跡で資料が出土しているが、出土量は少ない。

主な遺構は、橋波口遺跡の須恵器の甕を棺に転用した奈良時代の墓と、曲物を井筒にした奈良から平安時代の井戸であるが、ここからは平安時代の祭祀用とみられる大量の土器・桃核等(宇治原 1992)が出土し、斎宮茨田真手御宿所が堂山町黄梅寺付近にあったという伝承とあいまって、斎宮群行と関連がないものか注目されるところである。

(宇治原)

【引用・参考文献】

上田宏範 1963「門真市三ツ島遺跡発掘調査概報」『大阪市立博物館報』2　大阪市立博物館

宇治原靖泰 1990「普賢寺遺跡発掘調査概要」1　門真市教育委員会

宇治原靖泰 1991「普賢寺遺跡発掘調査概要」2　門真市教育委員会

宇治原靖泰 1992「門真市橋波口遺跡発掘調査概要」　門真市教育委員会

宇治原靖泰・植田正幸 1993「西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要」　門真市教育委員会・守口市教育委員会

梶山彦太郎・市原実 1972「大阪平野の発達史」『地質学論集』7

梶山彦太郎・市原実 1985 『続大阪平野発達史』古文物学研究会

福田英人 1984 『普賢寺遺跡発掘調査現地説明会パンフレット』大阪府教育委員会

三木文雄 1977「終末期の扁平小形銅鐸に就いて」　『國學院雑誌』78－9 國學院大學

図6　周辺の遺跡分布図

第3章　調査の概要

第1節　調査区の設定

調査では、調査区を３つに分け、調査区北側から南側に向かって第Ⅰ～第Ⅲ調査区とし、下水管の掘削溝で区分した。また、各調査区の壁面は基準地点において設定したアルファベット番号によって呼称することとした。具体的には調査区北端の地点をＡ地点とする。そこから東に延び、下水管との接触点の内、南側の地点をＢ地点とする。一方、Ａ地点から南西側(墓側)に延びた調査区はしばらくして南東側に屈曲するが、その屈曲地点をＨ地点とする。そして、Ｈ地点から南東に延びて、下水管と接触する地点の内、南側の地点をＧ地点とする。以上、このＡ、Ｂ、Ｇ、Ｈで囲まれた範囲が第Ⅰ調査区である。壁面の呼称は、例えば第Ⅰ調査区北壁を第Ⅰ調査区ＡＢ壁とする。

次に第Ⅱ調査区であるが、Ｂ地点から南へ延びて、調査区は屈曲し今度は南西側へ延びていく。そして、しばらくして下水管と接触することになるが、その接触する下水管の北側の地点をＣ地点とする。一方、Ｇ地点からはそのまま南に延び、下水管と接触する。その北側との接触点をＦ地点とする。このＢ、Ｃ、Ｆ、Ｇで囲まれた範囲が第Ⅱ調査区である。

第Ⅲ調査区は、先のＣ地点から南西に延び、調査区南端部において屈曲し、北西部に延びる。この屈曲地点をＤ地点とする。またＦ地点から、南西に延び、調査区の南端で南東に屈曲する地点をＥ地点とする。このＣ、Ｄ、Ｅ、Ｆで囲まれた範囲が第Ⅲ調査区である。　(松田)

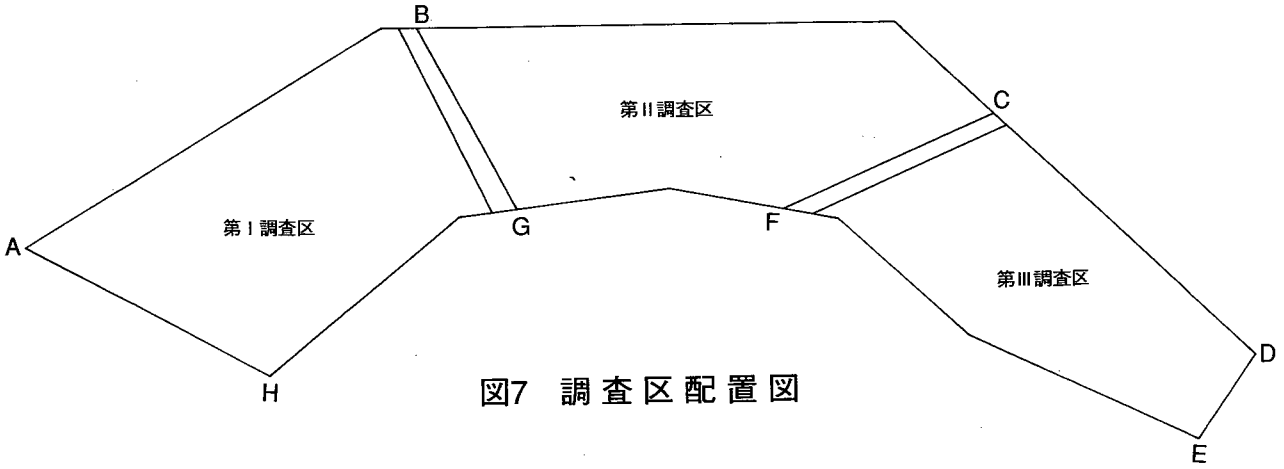


図7　調査区配置図

第２節　基本層序

調査では現地表面から80cm余りを機械掘削し、以後は人力で包含層を約20cm掘り下げた。基本層序は、上から現代盛土、近現代耕土・床土、第１層：暗褐色粘質土(Hue10YR 3/3 マンガンを多く含む)、第２層：黒褐色粘質土(Hue10YR 3/1)、第３層：暗褐色シルト(Hue10YR 3/3)である。

第Ⅰ調査区では第１層、第２層ともに埴輪を含んだ包含層である。また、両層とも古代・中世の遺物を含んでおり、どちらも中世以降の堆積と思われる。古墳の周濠は第３層から認められ、その上面が古墳時代の遺構面となる。

第Ⅲ調査区では基本層序にほぼ当てはまる堆積をしているが、第Ⅰ調査区と比較して若干、堆積、土質、土色に違いが認められる。具体的には現代盛土、近現代耕土・床土までは同様であるが、第３層の古墳時代遺構面に至るまで、３層の堆積が認められる。上から、灰オリーブ質粘質土(Hue5Y 6/2)、暗灰黄色粘質土

(Hue2.5Y 5/2)、灰色砂混じり粘土(Hue5Y 4/1)である。

第Ⅰ調査区の南東側には第2層上面から中世以降の落ち込みが認められ、それが第Ⅰ調査区の南北を横断している。また、落ち込みは第1層上面においても若干東側にずれて認められ、近現代のものである。一方、第Ⅲ調査区においても落ち込みが古墳時代遺構面から1層上で認められるが、それは調査区南端から北端にかけて縦断しており、第Ⅰ調査区の落ち込みに平行している。このことから第Ⅲ調査区で認められるそれは第Ⅰ調査区のものと同一の遺構であると考えられる。また、近現代においても第Ⅰ調査区と同様に、中世の落ち込みに重なった形で、若干、内側から落ち込みが認められる。

第Ⅱ調査区は、こうした第Ⅰ・Ⅲ調査区の落ち込みの内部に相当する。そのため、他の調査区と比較して第3層は約0.3m低くなっており、その上の層は落ち込み内の堆積土である黒色粘土(Hue7.5Y 2/1)である。　(松田)

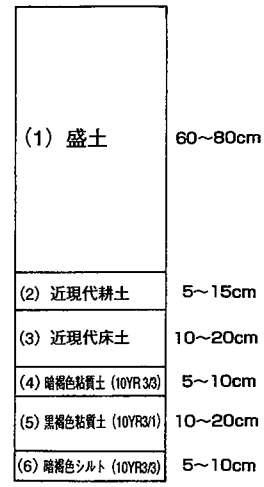


図8　基本層序柱状図

第3節 調査日誌抄録

平成12年 2月 7日(月)　くもり　調査区の機械掘削開始。
2月14日(月)　くもり　第Ⅰ調査区で古墳の周濠確認。
2月23日(水)　はれ　人物埴輪出土。
2月24日(木)　くもり　周濠を掘削する。
3月 2日(木)　はれ　遺物出土状況の全体撮影。
3月 3日(金)　はれ　完掘状況の全体撮影。現地調査終了。
3月 8日(水)　はれ　墳丘測量。
3月10日(金)　はれ　現地調査終了。　(松田)

第4章　普賢寺古墳の調査

第1節　SD01(周濠)

調査区の南側に沿って円形状に検出された。周濠の落ち込みは第Ⅰ調査区で第3層上面から認められる。周濠から推定する墳丘の形状は、円墳であり、法量は墳丘裾部までで径約29mと推測される。

周濠の状況としては、第Ⅰ調査区のGH壁から第Ⅲ調査区EF壁にかけて孤をなしてまわり、途中、第Ⅱ調査区FG壁の中間付近と、第Ⅲ調査区EF壁の北端から約3m南の地点で、陸橋(前者を陸橋1、後者を陸橋2とする)となって閉じている。

周濠の幅は陸橋1付近で両肩が認められ、上幅約4m、下幅約3mを測り、深さは第Ⅰ調査区の周濠で約0.6mを測る。

周濠の傾斜角度は、周濠の外側で、第Ⅰ調査区が約30°であるのに対して、第Ⅱ・Ⅲ調査区では約50~70°を測り急斜面を呈している。墳丘側では、第Ⅱ調査区の陸橋1の近くで約40°であり、第Ⅱ調査区では墳丘側の方が外側に比べてゆるやかとなっている。周濠の傾斜面は全体的にほぼ直線的であり、周濠の断面形は逆台形を呈している。なお、周濠底の比高差は約0.4mであり、検出された部分ではほぼ水平となっ

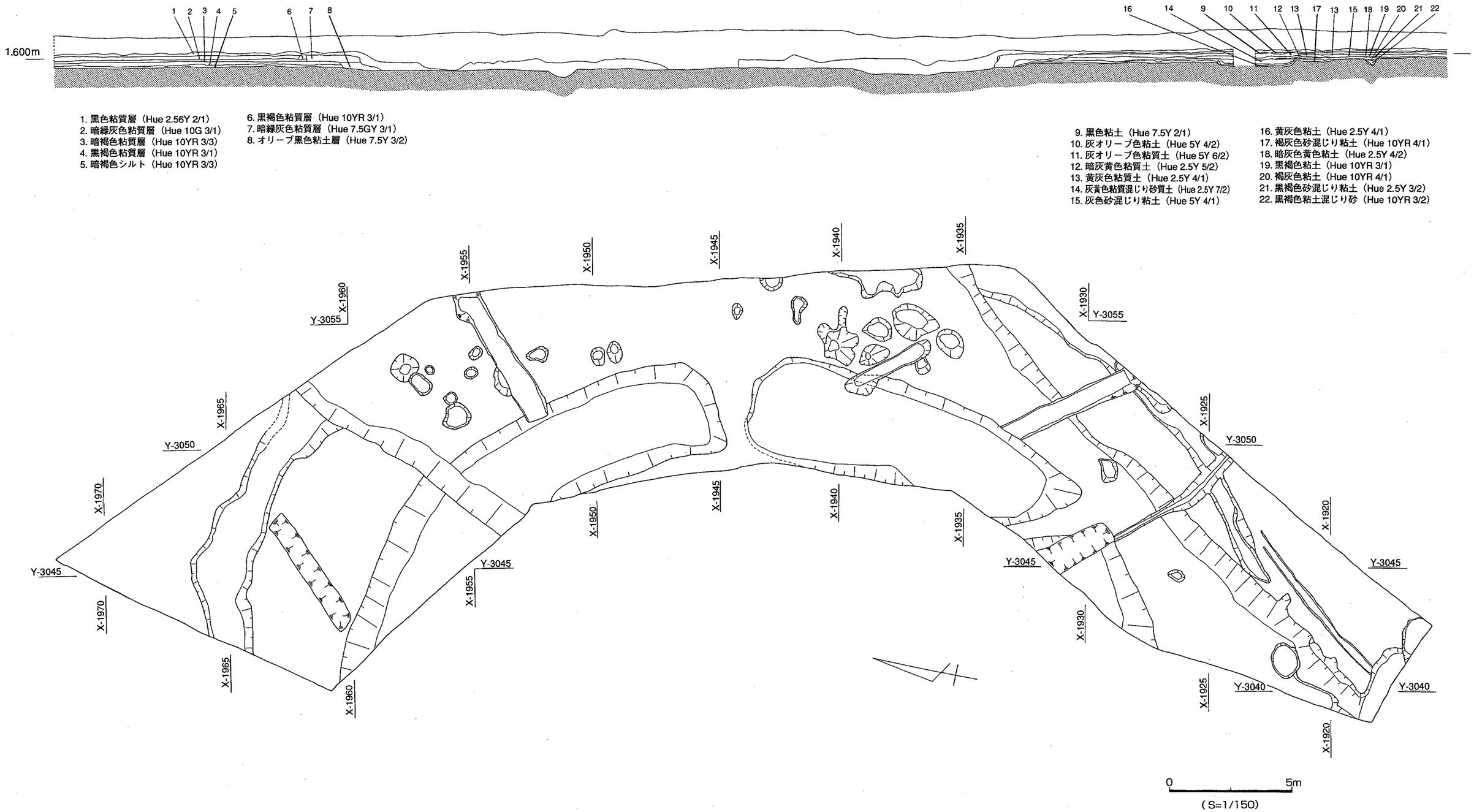

1.600m
1. 黒色粘質層（Hue 2.56Y 2/1）
2. 暗緑灰色粘質層（Hue 10G 3/1）
3. 暗褐色粘質層（Hue 10YR 3/3）
4. 黒褐色粘質層（Hue 10YR 3/1）
5. 暗褐色シルト（Hue 10YR 3/3）
6. 黒褐色粘質層（Hue 10YR 3/1）
7. 暗緑灰色粘質層（Hue 7.5GY 3/1）
8. オリーブ黒色粘土層（Hue 7.5Y 3/2）
9. 黒色粘土（Hue 7.5Y 2/1）
10. 灰オリーブ色粘土（Hue 5Y 4/2）
11. 灰オリーブ色粘質土（Hue 5Y 6/2）
12. 暗灰黄色粘質土（Hue 2.5Y 5/2）
13. 黄灰色粘質土（Hue 2.5Y 4/1）
14. 灰黄色粘質混じり砂質土（Hue 2.5Y 7/2）
15. 灰色砂混じり粘土（Hue 5Y 4/1）
16. 黄灰色粘土（Hue 2.5Y 4/1）
17. 褐灰色砂混じり粘土（Hue 10YR 4/1）
18. 暗灰色黄色粘土（Hue 2.5Y 4/2）
19. 黒褐色粘土（Hue 10YR 3/1）
20. 褐灰色粘土（Hue 10YR 4/1）
21. 黒褐色砂混じり粘土（Hue 2.5Y 3/2）
22. 黒褐色粘土混じり砂（Hue 10YR 3/2）
X-1960
Y-3055
X-1955
X-1950
X-1945
X-1940
X-1935
X-1930
Y-3055
X-1965
Y-3050
X-1925
Y-3050
X-1970
X-1920
Y-3045
Y-3045
X-1970
X-1955
X-1950
X-1945
X-1940
X-1935
Y-3045
X-1930
Y-3045
X-1965
X-1960
X-1925
Y-3040
Y-3040
X-1920
0
5m
(S=1/150)

図9 調査区全体図

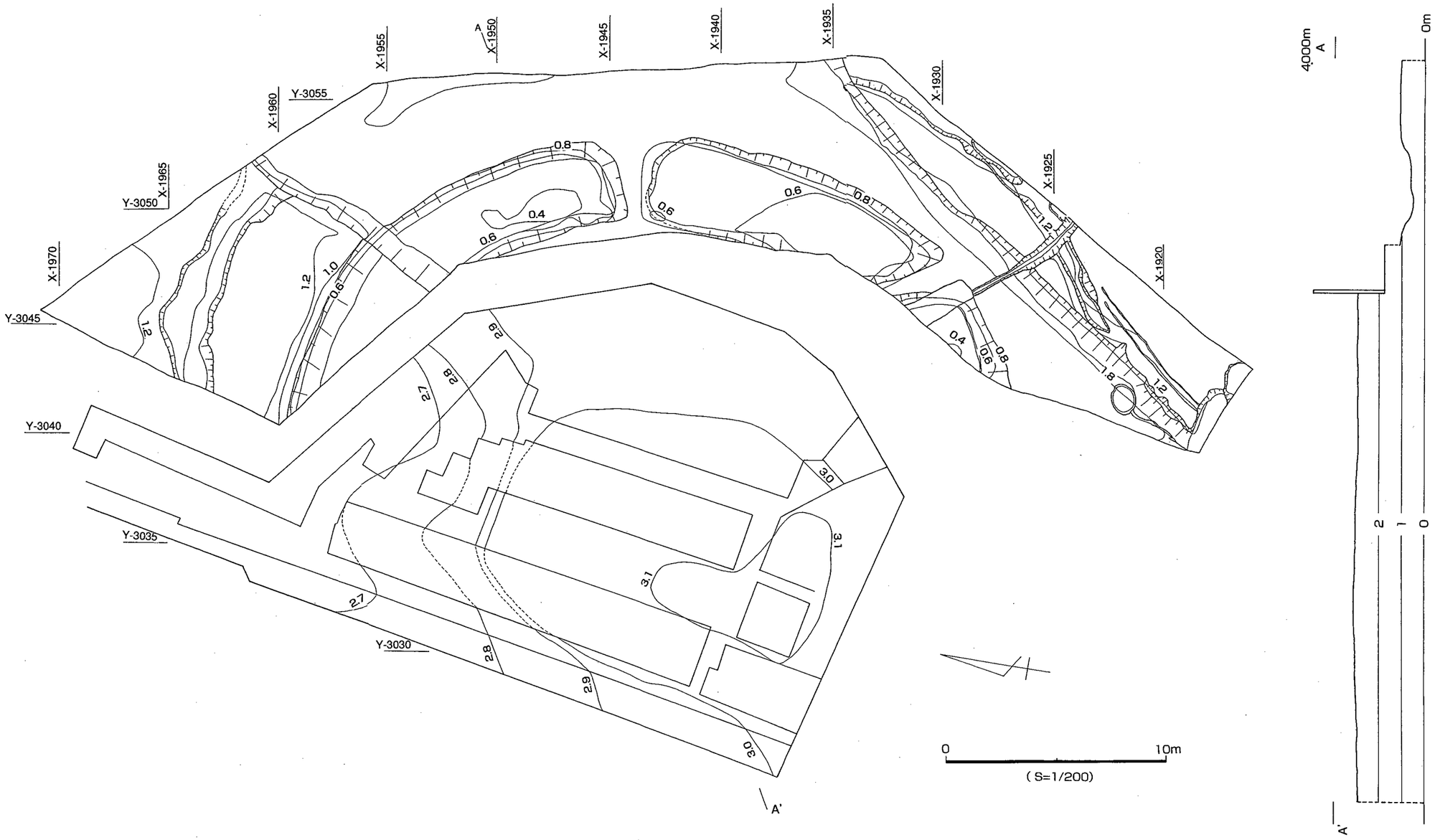


図10　調査区地形実測図

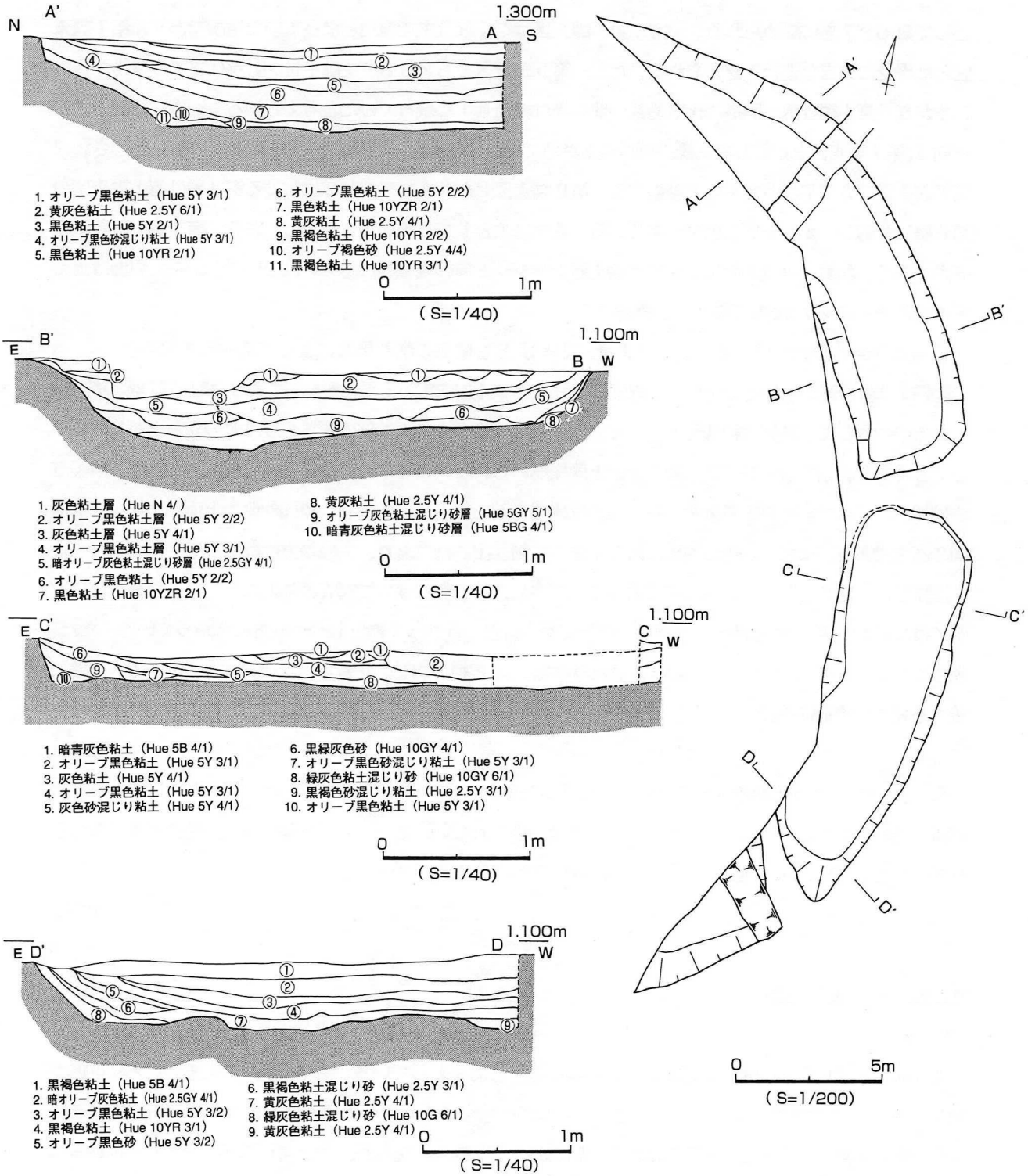


図11　SD01（周濠）平面図・断面図

ている。

次に周濠の構造、堆積状況について触れる。周濠の構造は、周濠底のベースが全ての場所で砂質土であり、墳丘裾に貼り石、葺石が認められないことから、地山面を掘りくぼめただけの簡単なものであると考えられる。周濠の堆積状況は、第Ⅰ調査区セクションベルト１で第１層から第５層までは中世以降現在に至るまでの遺物が混在しており、長期間にわたって周濠は完全に埋没せず凹みとして残っていた可能性が考えられる。次に第５層の炭交じりの黒色粘土層から下層は純粋な古墳時代の堆積層であり、比較的残りのいい遺物は主

として第６・７層に認められる。一方、第Ⅱ調査区はごく最近まで湿地となっていた場所であり、第Ⅰ調査区とは層位に相当な違いが認められる。ただ、第Ⅱ調査区でも第３層までは中世から現代までの遺物が含まれており、第Ⅰ調査区と同様に比較的長い間周濠は埋没せずに残っていたと考えられる。一方、周濠の埋没時期は、第Ⅰ調査区と比較して周濠の傾斜角度が急で、それが周濠の埋没時期の差を示していると予想され、第Ⅱ調査区の方が早かったものと理解する。第Ⅱ調査区セクションベルト２における第４層は第Ⅰ調査区の第６層に対応し、オリーブ黒色粘土層である。遺物は主としてこの層から出土しており、床面からは若干の高さがある。なお、堆積土のほとんどは粘土層で、シルト等の堆積層は認められないことから、周濠はたえず水が溜まっていた状態であったと推測する。

陸橋は今回の調査では２ヶ所認められた。２ヶ所とも地山の削り出しによって造られている。

陸橋１は墳丘側から外側に向かって内反しつつ大きく外方に広がる平面形をしており、墳丘側の幅が約 1m であるのに対して、外側は約 4m となっている。また、陸橋１の両端部の傾斜角度は他の立ち上がりの場所と同じであり、貼り石・葺石等も他の場所と同様認められないことから、陸橋に限って特別な掘削、構築方法は採られていないものと考えられる。標高は陸橋上面で約 0.9m であり、陸橋外側の上面と比較してほぼ同じ高さである。なお、陸橋は周濠に対して垂直に削り出されており、主軸の方位はＮ－75°－Ｅである。

陸橋２は、現状として一部試掘坑によって掘削され、墳丘側は途中で調査区外となっているため全容は定かではないが、平面形は陸橋１と同様、墳丘側から外側に向かって内反しつつ外方に広がっている。ただ、陸橋１に比べて内反の度合いは小さく、かつ全体的に小規模である。法量は墳丘側の幅 0.7m(調査区の壁に接する場所)、外側の幅 2m を測る。主軸はＮ－157°－Ｅを指向し、陸橋１と同様、周濠に対して直交関係にある。

なお、陸橋１と２の距離は約 14m であり、同じ間隔でこの施設があるのならば、第Ⅰ調査区でもう一つ陸橋が認められることになる。しかし、実際には認められない。このことから陸橋は規則的に周濠に設けられていたものではなく、必要な場所だけに設けられていたようである。

(松田)

第2節　その他の遺構

SD02

第Ⅰ調査区 AH 壁の中間から認められ、周濠に並行してまわっている。溝内、溝岸の至るところに凹凸が認められ、ジグザグ状にくねりながら約 10m 延びた地点で中世以降の落ち込みによって切られている。周濠からの距離は 4.6m で、溝底の比高は東側に比べて西側が約 5cm 低くなっているが、ほとんど高低差はない。

法量は上幅 1.2m~1.6m、下幅 1.0～1.4m、深さ 0.15～0.2m で、ほとんど痕跡的に残存している状態である。また、堆積状況としては上位に黒褐色粘土、下位に黄灰色シルトが認められ、その下部は地山である。なお、遺構面は周濠の落ち込みと同様、第３層上面から認められる。

この溝の掘削時期は、中世遺構の落ち込みによって切られていることから、その落ち込みよりは古く位置付けられる。また、遺構の立地する面は周濠と同じ面であることから、古墳との関係が注目されるが、遺構面が古墳時代以降の開墾によって削平されている可能性も否定できないため、同時期であると断定はできない。しかし、この溝が周濠に対して並行してまわっていることから、周濠、もしくは墳丘との間には何らか

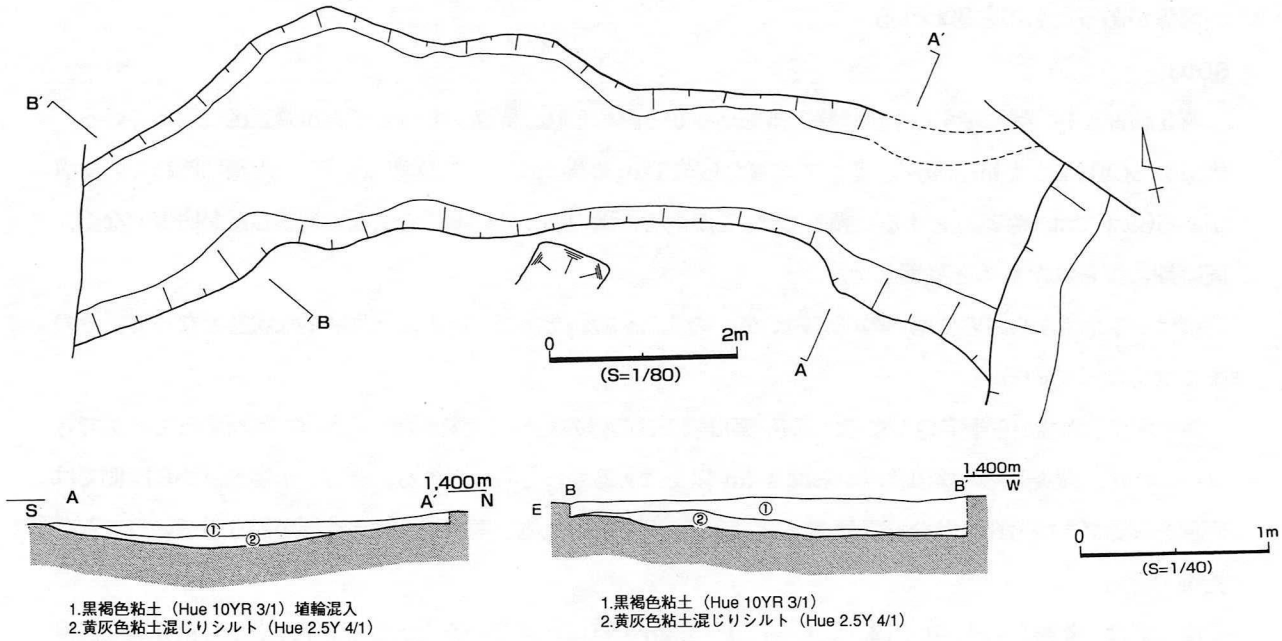


図12　SD02　平面図・断面図

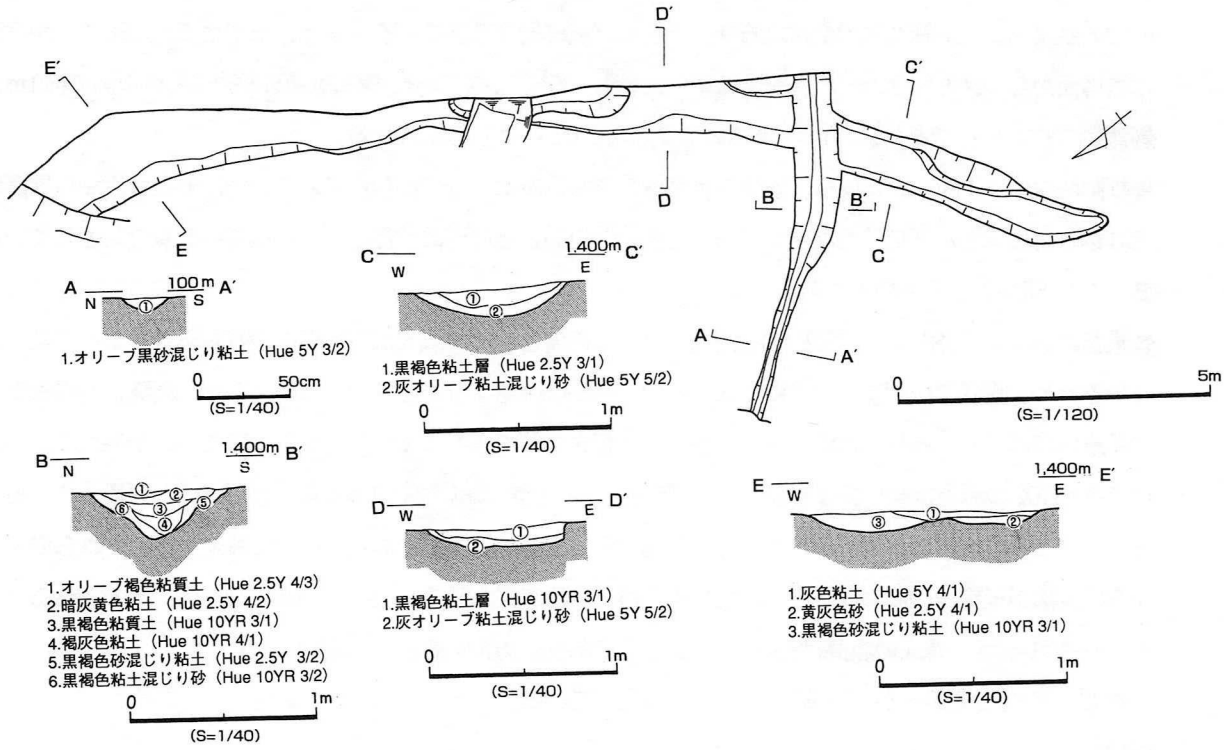


図13　SD03　平面図・断面図

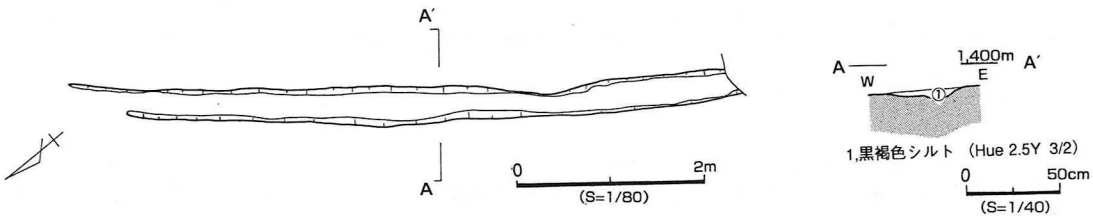


図14　SD04　平面図・断面図

の関係があったものと思われる。

SD03

第Ⅱ調査区 BC 壁に接する中世以降の落ち込みから認められ、周濠に並行して第Ⅲ調査区に至っている。周濠からの距離は 4.4m である。そして北端から約 12m の場所には、この溝に直交し、周濠に流れていく溝がある(以下では十字地点とする)。調査では、この両者の溝の切り合い関係を断面で観察したが明瞭でなく、同時期に掘られたものと判断した。

溝は十字地点からさらに南へのびていくが、約 4.5m 続いた後で、ほとんど痕跡的な状態となって、そのままなくなっている。

溝の幅は、北端から十字地点までは第Ⅱ・第Ⅲ調査区の壁のために両肩が認められず、判断することができない。ただ、調査区内の検出状況からは 1.4m 以上はあるものと考えられる。一方、十字地点から南側では両肩を確認でき幅 0.6m となっており、十字地点を境として北側と南側では大きく幅が異なっていることが指摘できる。

溝の底は、北端から十字地点までで標高 1.1～1.3m でほぼ水平である。また、十字地点から第Ⅱ調査区側へ約 2.7m の場所ではさらに深く掘削されており、底は標高約 1m である。一方、遺構面からの深さは浅い所で約 0.05m、深い所で約 0.2m であり、ほとんど痕跡的な残りである。また、十字地点の周濠に向かう溝は遺構面からの深さ約0.2mで、直交する溝と比較して深くなっている。標高は第Ⅲ調査区CD壁側で約 1m、周濠側で約 0.9m であり、水は周濠の方に流れていたものと考えられる。

掘削時期は、①SD02 と同様、溝は中世遺構の落ち込みによって切られており、特に十字地点から周濠に流れ込む溝はほとんど痕跡的な残りであること、②SD02 と周濠に並行してまわっている点で共通していることから SD02 と同時期である。

最後に SD02 と SD03 の関係に注目する。まず、両溝ともその端部は中世以降の落ち込みによって切られているため、現状では両溝が一つにつながるかどうかは確認することはできない。ただ、両溝とも周濠からの距離はほぼ同じであり、周濠に並行するように弧をなしてまわっている。また、SD03 の十字地点から南側ではSD02の幅とは全く異なるものの、十字地点から北側においては1.4m 以上と SD02 と似通っている。さらに、これらの溝の落ち込みが認められる遺構面は標高約 1.5mであり、両溝で共通する。これらの理由から、両溝が元来一つにつながっていた可能性は十分に考えられる。仮に一つの溝ならば、水の流れる方向が注目されるが、溝底の標高は両溝でほぼ同じであり、方向の確認は困難である。

なお、溝の北端部分からは盾形埴輪片が出土している。

SD04

SD03 に沿うように、ＳD03 の南端付近から確認でき、第Ⅲ調査区の南側にかけて延びており、ＳX02 によって切られている。全体的に、ほぼ痕跡的な状態で残存している。

法量は検出された部分で全長約 7m、上幅 0.34m、下幅 0.22m、深さ 0.05m である。

出土遺物は認められなかった。

SX01

第Ⅲ調査区東南隅において検出した。東側、南側は調査区の壁の外側となっており、全体の形状は確認できない。平面形は長径 1.4m 以上、短径 0.8m 以上、深さ約 0.2m の不整円形を呈する。堆積土は上から暗灰黄色粘土、黄灰色粘土混じりの砂質土である。

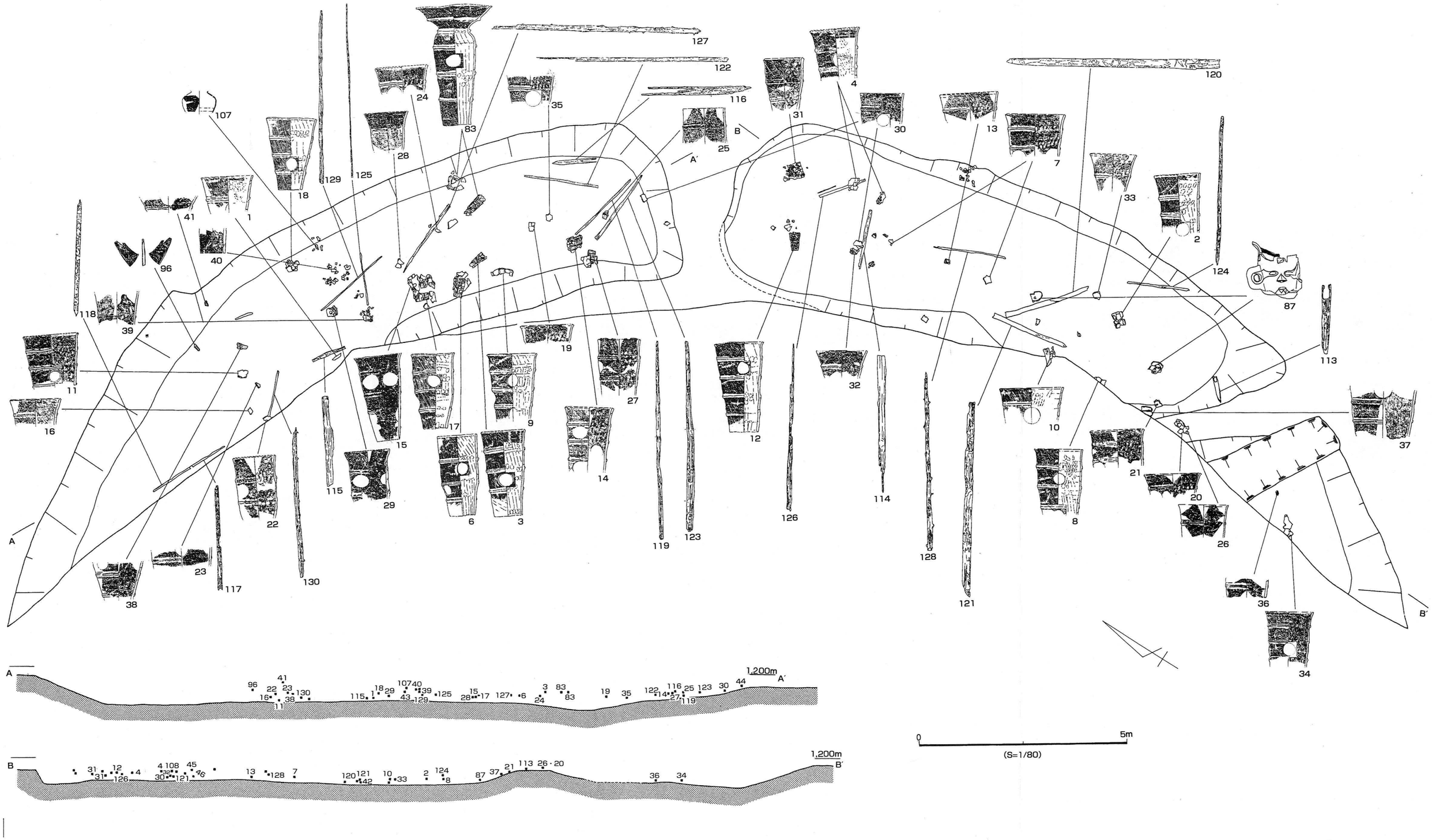


図15　周濠内遺物出土状況図 1

この遺構の上面は平面では確認出来なかったものの、壁面の観察からは、盛土状の高まりが認められ、灰黄褐色粘質土となっている。このことから、当遺構は穴を掘り、その上に盛土したものであるが、その性格については不明である。

SX02

SX01の西側に位置し、その東端はSX01によって切られている。

法量は現状で長径1.8m以上、短径1m以上、深さ約0.14mである。

SX01同様性格については不明であるが、SX01との相違点としては、遺構の上面には断面で観察する限り、盛土状の高まりが確認出来ないことである。

土坑

第Ⅱ調査区及び、第Ⅲ調査区において総計25の土坑が検出された。それらは全て中世以降の落ち込みの内部である。形は円形のものから不整形のものまで様々あり、また、規模、深さ等も様々である。土坑の埋土は、全てこれらのある地山の上に堆積していた土(黒色粘土)であり、人為的な遺構とするよりは自然に形成された凹みである可能性が強い。このことから、出土した埴輪、中世土器等は土坑内に納められたものとするよりはむしろ、堆積土に含まれていたものと考えられる。

(松田)

第3節 遺物出土状況

周濠内においては、比較的残りの良い遺物は出土状況を記録し番号をつけて取り上げた。一方、小片等の遺物は、出土した調査区を記録し、また、周濠以外から出土した遺物は、出土した調査区及び層位、遺構を記録し、取り上げた。

周濠内の出土遺物

周濠内からは円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、蓋形埴輪、須恵器、樹木・木製品等が出土している。

埴輪は、出土状況を記録したものでは人物埴輪1点、蓋形埴輪2点、朝顔形埴輪1点、円筒埴輪46点が出土している。

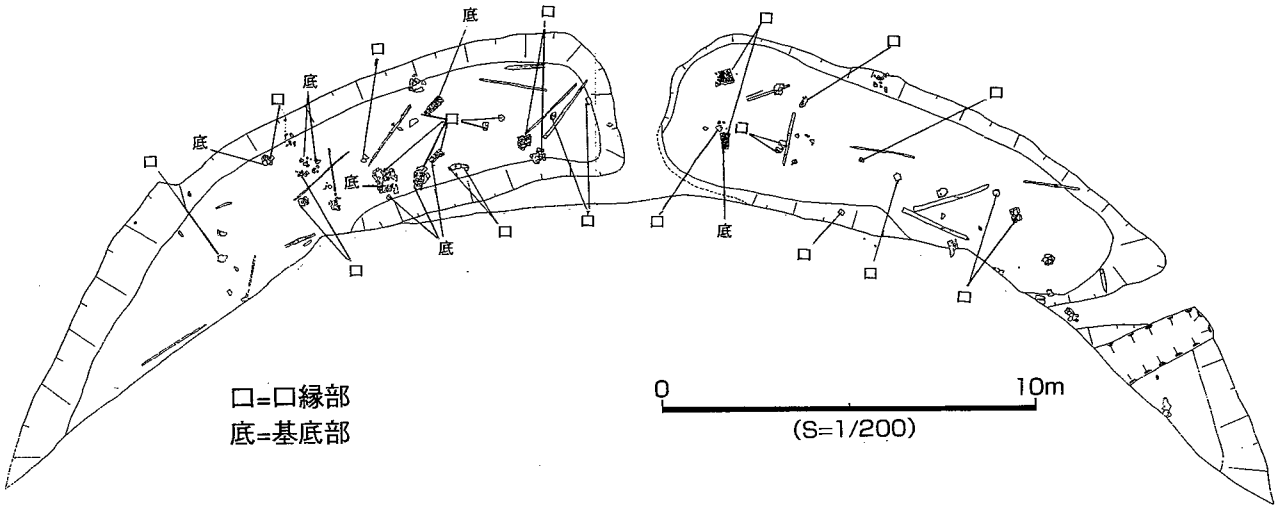


図16 周濠内遺物出土状況図2

人物埴輪は顔の部分が陸橋 2 の北側周濠内、後頭部が顔の出土した位置から北へ約 3m 離れた周濠内中央から出土した。顔は顔面が上となり、頭を北側に向けた状態で検出され、後頭部は外面が上になった状態で、顔面と同様、頭部を北側に向けた状態で出土している。また、それ以外に人物埴輪は SD03 の上層から左目の部分等が数点出土しており、周濠内のものと接合する。このように、人物埴輪は破片が広く散らばっている。なお、この SD03 の上層からは、出土した左目の部分に伴なって盾形埴輪片も出土しており、この人物埴輪が盾持ち人であった可能性を示唆するものであるが、このことについては後で再び触れる(第 6 章　調査のまとめ)。

蓋形埴輪は第 I 調査区中央付近の周濠内において上層から 1 点、下層から 1 点が出土している。また、その他に破片で 5 点、周濠内から出土している。

朝顔形埴輪は第 I ・II 調査区 BG ライン南側付近から出土した。出土状況は口縁部分と胴部が分離した状態で、口縁部分は周濠外側斜面から、胴部は底部を周濠外側に向けて出土した。完形である。この他、破片で数点出土している。

円筒埴輪は完形に復元できるものが 6 点出土しているが、18 以外は周濠の墳丘側に片寄って検出された。すべてが口縁部を周濠外側、底部を墳丘側に向けており、墳丘から完形のままで転落したことが推測される。一方、その他の資料では口縁部分を含む上部が多く出土しており、25 個体を数える。これらの資料も全体的に周濠の墳丘側に片寄って検出されており、墳丘あるいは墳丘裾部に立てられていた円筒埴輪の上部のみが欠損し、周濠内に落ちこんだものと思われる。

樹木及び木製品は全て周濠内から出土している。総数は 21 点である。その内、人為的に加工をした可能性が認められるものは 3 点ある。出土状況は 113 が周濠の傾斜面から出土している他はすべて底面から検出された。また、分布状況は周濠の調査区域内にまんべんなく認められ、一箇所に集中していることはない。

(松田)

第4節 SD01(周濠)内出土遺物

出土遺物の紹介を行うにあたり、円筒埴輪の部分名称について確認しておく。今回の調査では口縁部を含む円筒埴輪片が、出土状況を記録した 46 点中 31 点に認められる。その内、底部を含む例はわずか 7 点であり、ほとんどは底部を欠損している資料である。このような状況を考慮して、本来であれば底部から上部にかけて各段を 1 段、2 段と呼称するところを、今回は逆に上部から底部にかけて呼称する。

まず、口縁部から最初のタガまでを第 1 段とし、順次、第 2 段、第 3 段と呼称する。一方、タガの

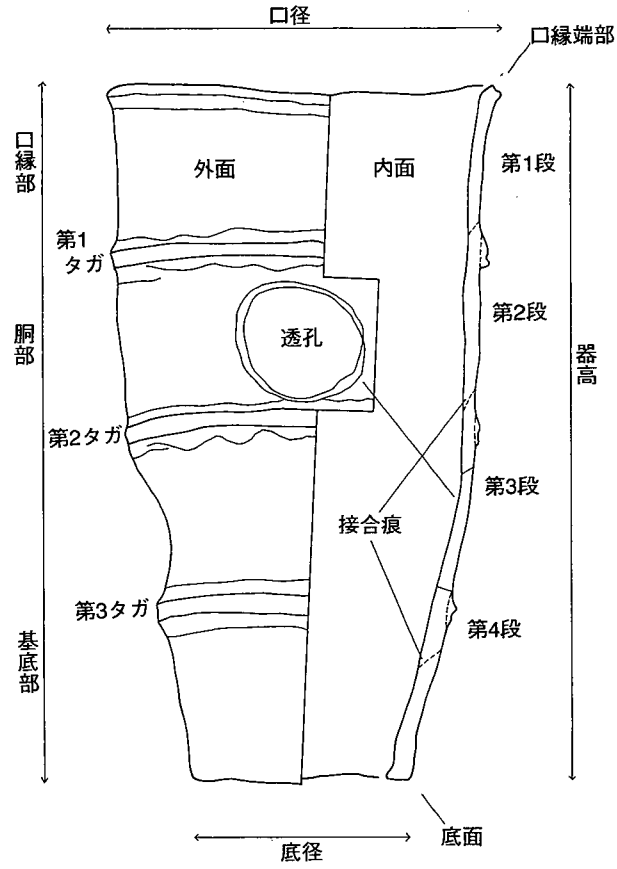


図17　円筒埴輪部分名称図

名称は、上から第1タガ、第2タガと呼称する。口縁部は埴輪上端から第1タガまでの間とし、底部は一番下のタガから埴輪下端の間とする。

(1)円筒埴輪

調査時に周濠内から46個体の円筒埴輪が出土している。このうち完形に復元できるものが6点、3段以上復元できるものが9点あるが、底部の出土は少なく、口縁部の出土が目立つ。そこで完形の円筒埴輪を中心に、その概要を法量/形態、外面調整、内面調整、タガ、透し、焼成、ヘラ記号、赤色顔料、口縁部/底部の形状や調整に分けて記述を行う。

法量/形態

全体として底部より口縁部に向かって開き気味のものが多数を占めるが、底部よりやや大きく外傾して口縁部になるもの(18)もある。全て小型の円筒埴輪で、時期は川西編年のV期に相当するものである。

口縁部径が確認できるものは33点あり、20.0～29.4cmと大きさにはばらつきがあるが、そのうち20～22cmに収まるものが13点あり、全体の40%を占める。

6個体の器高の値は34.9～44.4cmで18が34.9と小型であるのと、12が44.4cmとやや大型である他は、平均していて約40cmである。

タガの数は、3、6、15、17、18は3つで、4段の円筒埴輪であるが、12は突帯は4つで、5段の円筒埴輪である。また、9、14、34はその形態から3+αの突帯の存在が考えられ、5段の円筒埴輪である可能性が高い。

透しは、4段の円筒埴輪は2段目と3段目に、5段の円筒埴輪は2段目と4段目に、また9、14は2・3・4段目に、円形の透しが対方向で約90度に交差するように穿たれている。

底部径が確認できるものは7点あり、その径は11.0～13.5cmの間に収まり、大きさのばらつきはない。

外面調整

確認できたすべての個体にハケによる調整が施されているが、一次調整のみで、二次調整は施していない。調整を類別した場合、次の3タイプ4種類が確認できる。

Ⅰ:向かって右から左方向へ斜めハケを施す

a.　底部から口縁部まで連続する斜めハケを施す(7、11、14、15、17、21、22、27、31、34)

b.　断続的な斜めハケを施す(8、9、12、18)

Ⅱ:縦ハケ・斜めハケ両方を施す(2～4、6)

Ⅲ:不定方向の斜めハケを施す(29)

Ⅰaは10点あり、2段以上復元できる円筒埴輪の53%を占める。Ⅱのタイプでは、縦ハケは2段目・3段目に施し、1段目には横ハケを施す。Ⅲのタイプでは1段目のみに不定方向の斜めハケが見られ、2段目・3段目には斜めハケを施す。

ハケの条線の間隔は4～12条／cmと幅があり、複数の工具の存在が考えられる。

内面調整

内面の最終段階として、ほとんどは指ナデを縦方向に施し、タガと接合痕に沿って指押さえを施す。またこれらの調整に加えて、タガに沿ってナデを施すもの(3、9)がある。

タガ

タガの形態とてM字形、台形(2～4、6)、低い台形(22、27)、丸形(15、29)、三角形(15)がある。このうち

M字形は11点あり、2段目以上復元できる円筒埴輪の58%を占める。また、15については丸形と三角形の両方の形態が見られる。

タガ係数(タガの高さ÷タガ貼付部の幅×100)が40を越えるものは3のみであり、18〜22の間収まるものが9点で、47%を占める。個体によって若干の差はあるが、全体としてはタガの突出度は低い。

タガに施される技法は、粘土紐を横ナデによって器壁に密着させ、その後横ナデによってタガの形を整形する伝統的な突帯貼付技法を施すものと、断続ナデ技法でタガを貼付し、その上に二次調整として横ナデを加える「断続ナデ技法 A」(鐘方正樹・中島和彦・安井宣也 1992「菅原東埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵埋蔵文化財センター紀要』)を施すもの(8、9、11、17、18、31)、これらの技法には属さず、非常に雑な突帯の貼付を施すもの(15、29)がある。

透し

一次調整及び、タガの貼り付け部を切って穿たれている。径5〜7cm前後の大きさである。正円、楕円形の両方が存在しており、一個体中に正円と楕円形の両方は存在しない。全体として正円のものが多い。このうち楕円形は、縦長(4、6、9、12、34)と、横長(3、14、29)のタイプがある。

焼成

黒斑を有する個体はなく、窖窯により焼成されていると考えられる。どの個体も良く焼成されており、内外面及び断面も同色を呈している。図化できないものの中に須恵質のものが含まれるが、ここで挙げたものはすべて土師質のものである。還元焔焼成されていて灰色のもの(2〜4、6、7、14、17、27、31)がある。また、(8、9、11、15)は他の円筒埴輪とは異なり、硬質に焼成されている。

ヘラ記号

ヘラ記号が確認できるものは(6、30)の2点である。いずれも1段目に左から右へ、右上がりの直線で記されている。

赤色顔料

赤色顔料が付着しているものが(30、31、35)の3点があり、いずれも還元焔焼成された個体に塗布されている。赤色(Hue7.5YR4/6)はベンガラ、朱のいずれかによるものと考えられる。現状では埴輪全体に顔料が施されていたかどうか判断はつかない。

口縁部/底部の形状や調整

口縁部の形状は、大きく分けて口縁部が外反するタイプが圧倒的で、2段以上復元できる円筒埴輪の89%を占める。例外として、直立するタイプ(3、6)と、内曲するタイプ(29)がある。

調整は、すべての例において口縁に横ナデを施している。また口縁内面に横ハケを施した後、口縁に横ナデを施す例(2〜4、6)がある。

底部の形状や調整には次の2つのタイプがある。

Ⅰ:底部内面に指押さえ。外面は底部付近のハケが消えている(3、6、12、15、40)

Ⅱ:底部内面に指押さえ。外面は底部から斜めハケが施されている(17、18)

Ⅰは外面調整を施した後、内面を親指による指押さえ、外面を板状工具で押圧するという典型的な底部調整である。ⅡはⅠとは反対に底部調整が行なわれた後で外面調整を施している。

(船築)

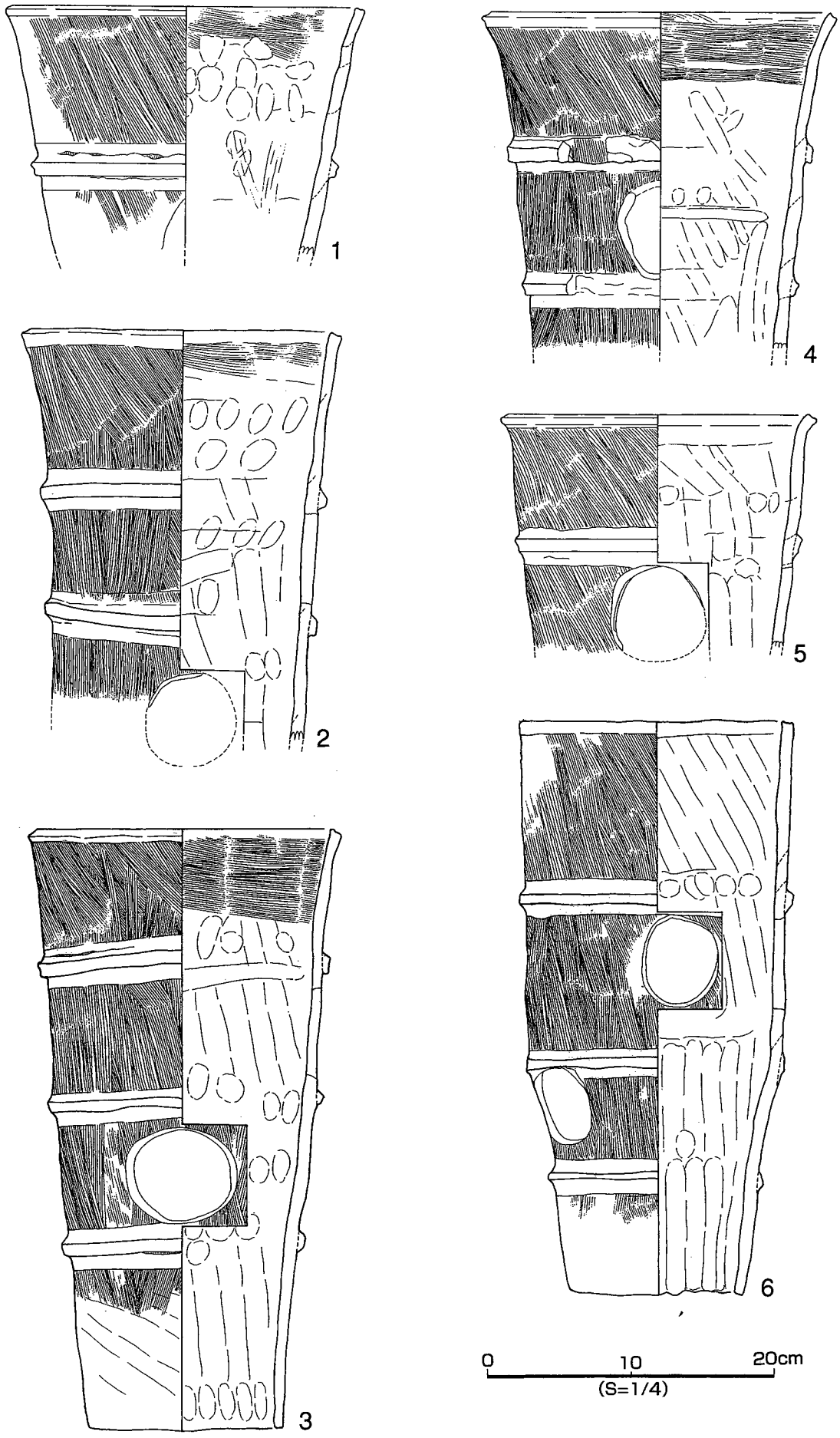


図18　周濠内出土の円筒埴輪（1）

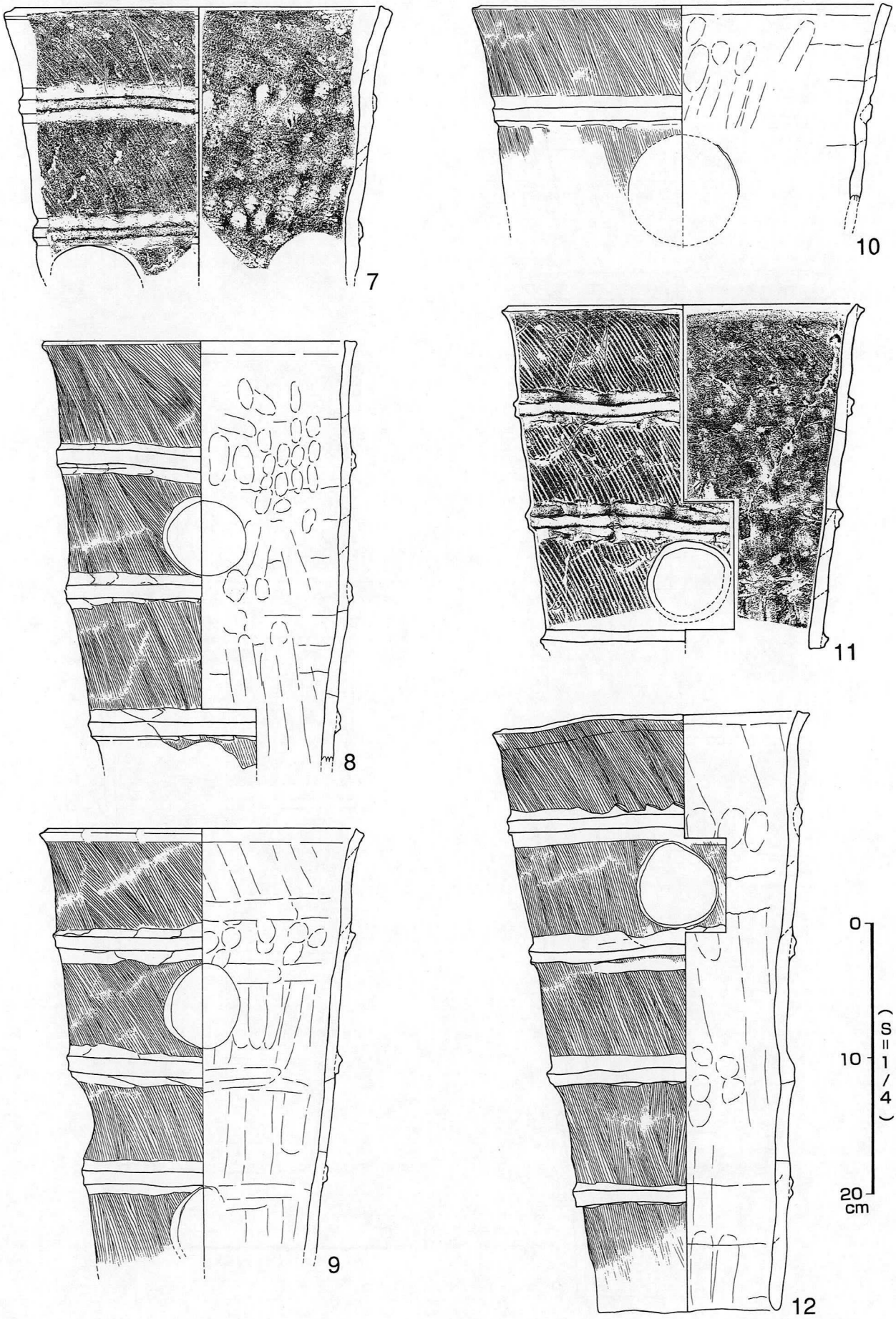


図19　周濠内出土の円筒埴輪（2）

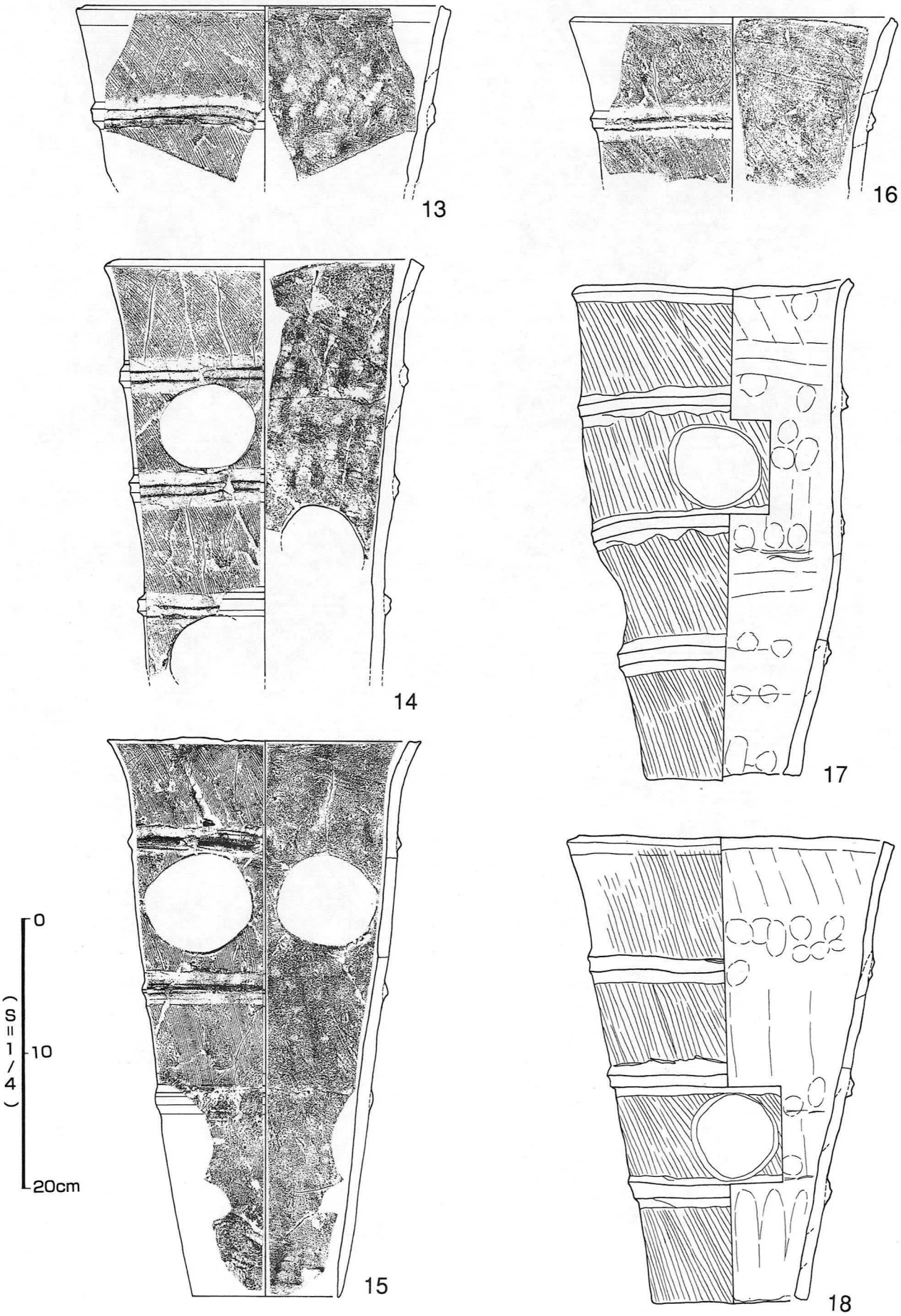


図20　周濠内出土の円筒埴輪（3）

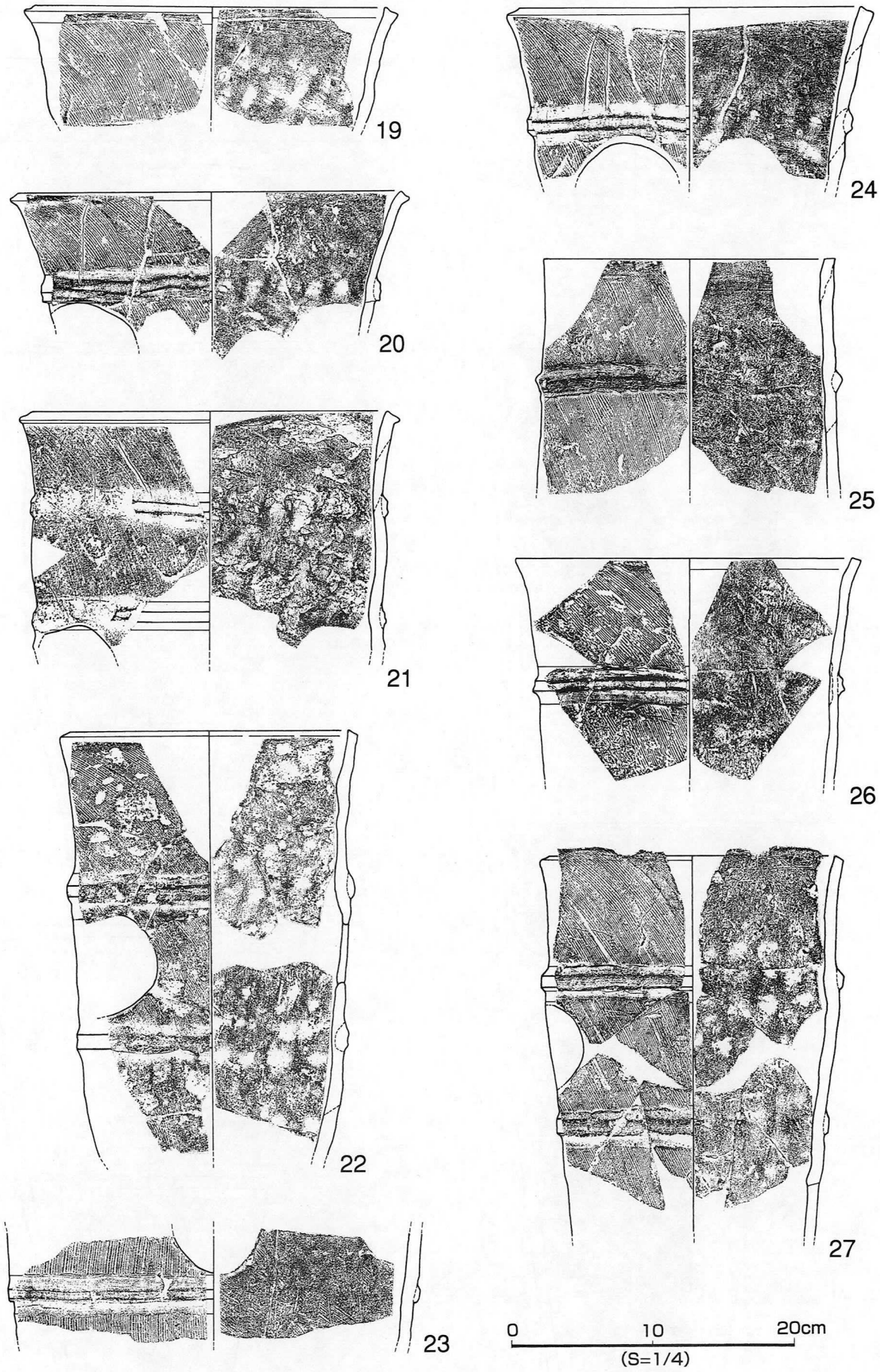


図21　周濠内出土の円筒埴輪（4）

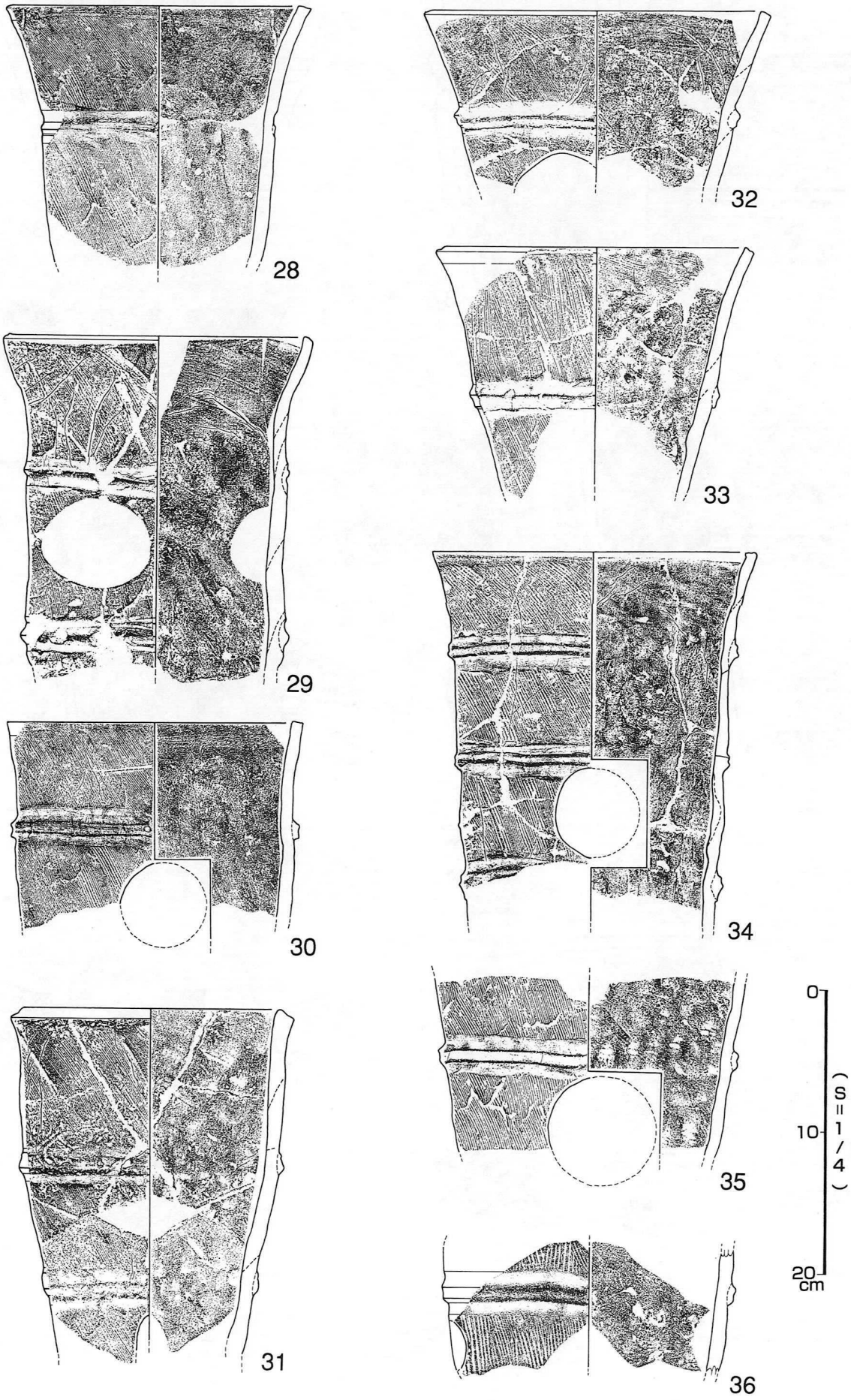


図22　周濠内出土の円筒埴輪（5）

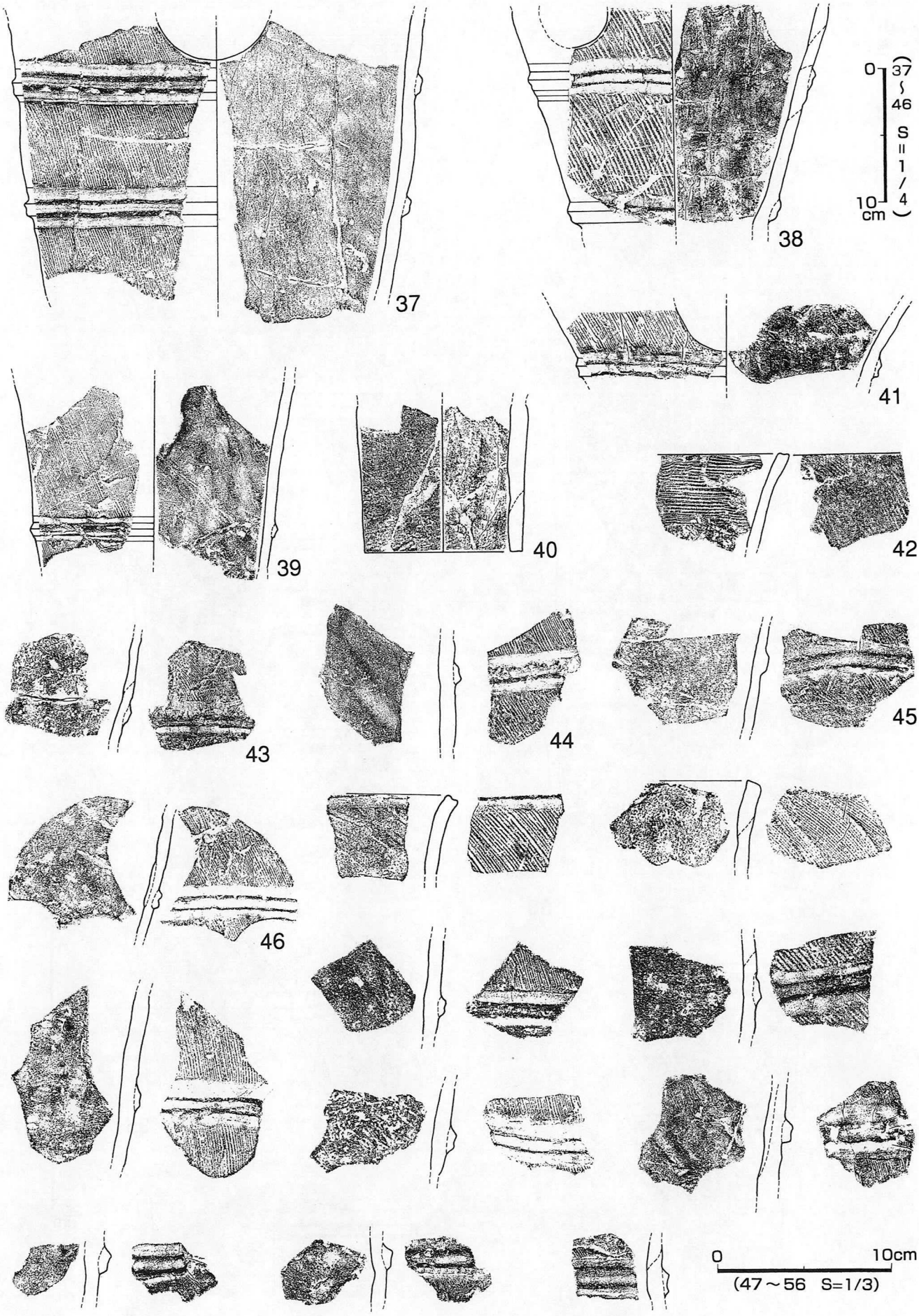


図23 周濠内出土の円筒埴輪（6）

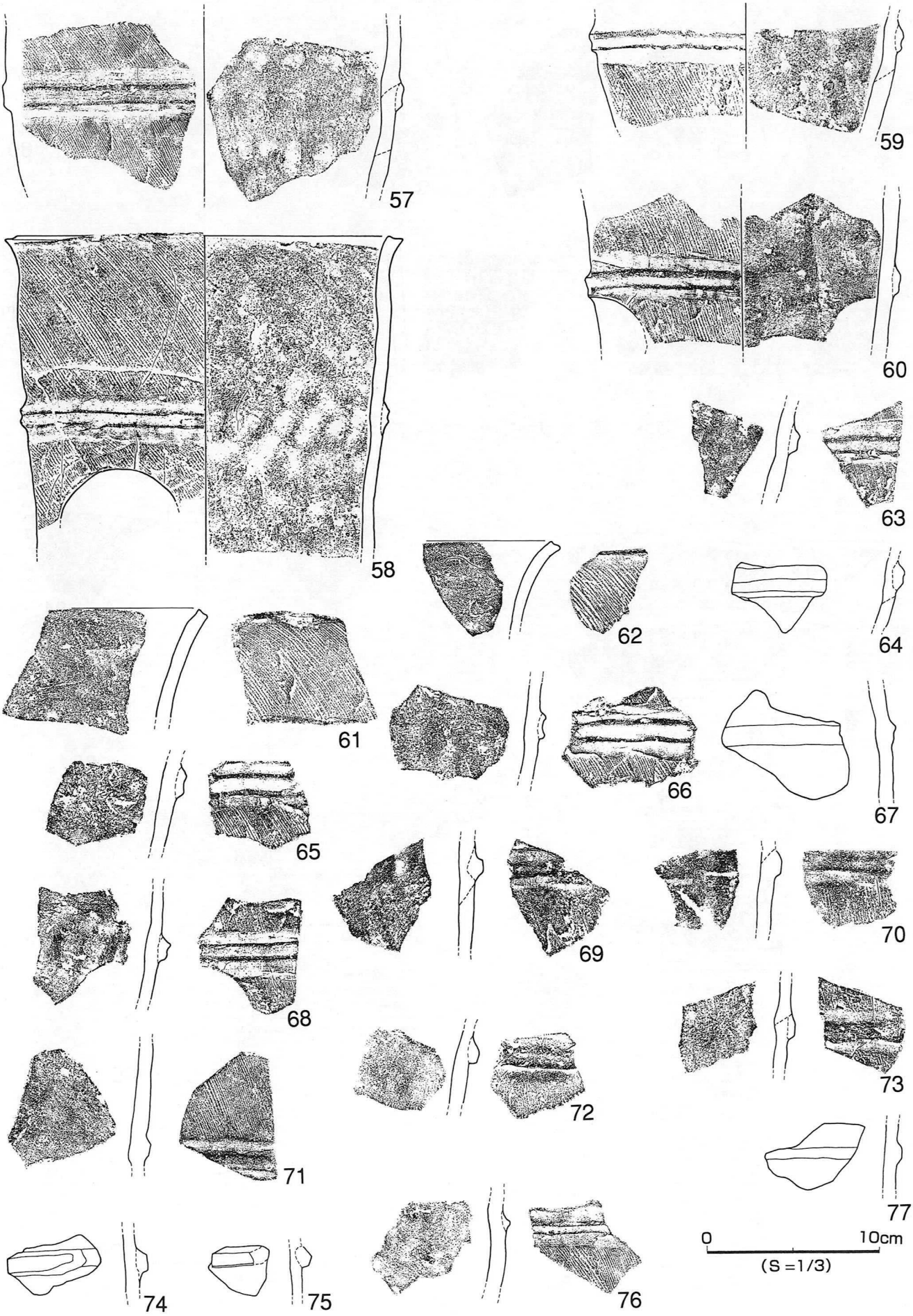


図24　周濠内出土の円筒埴輪（7）

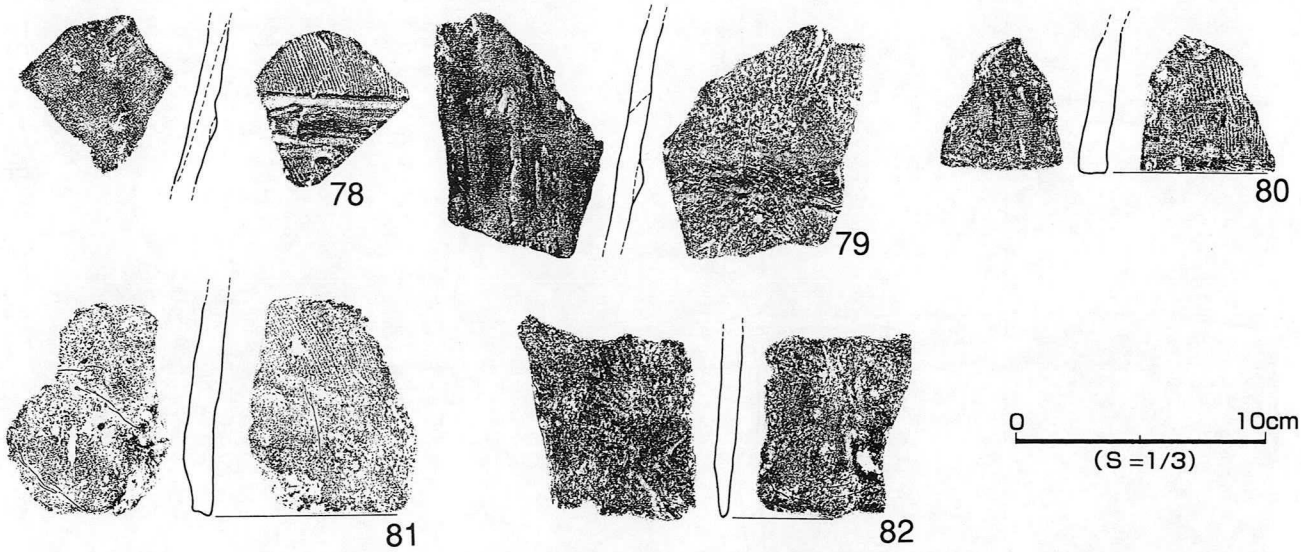


図25　周濠内出土の円筒埴輪（8）

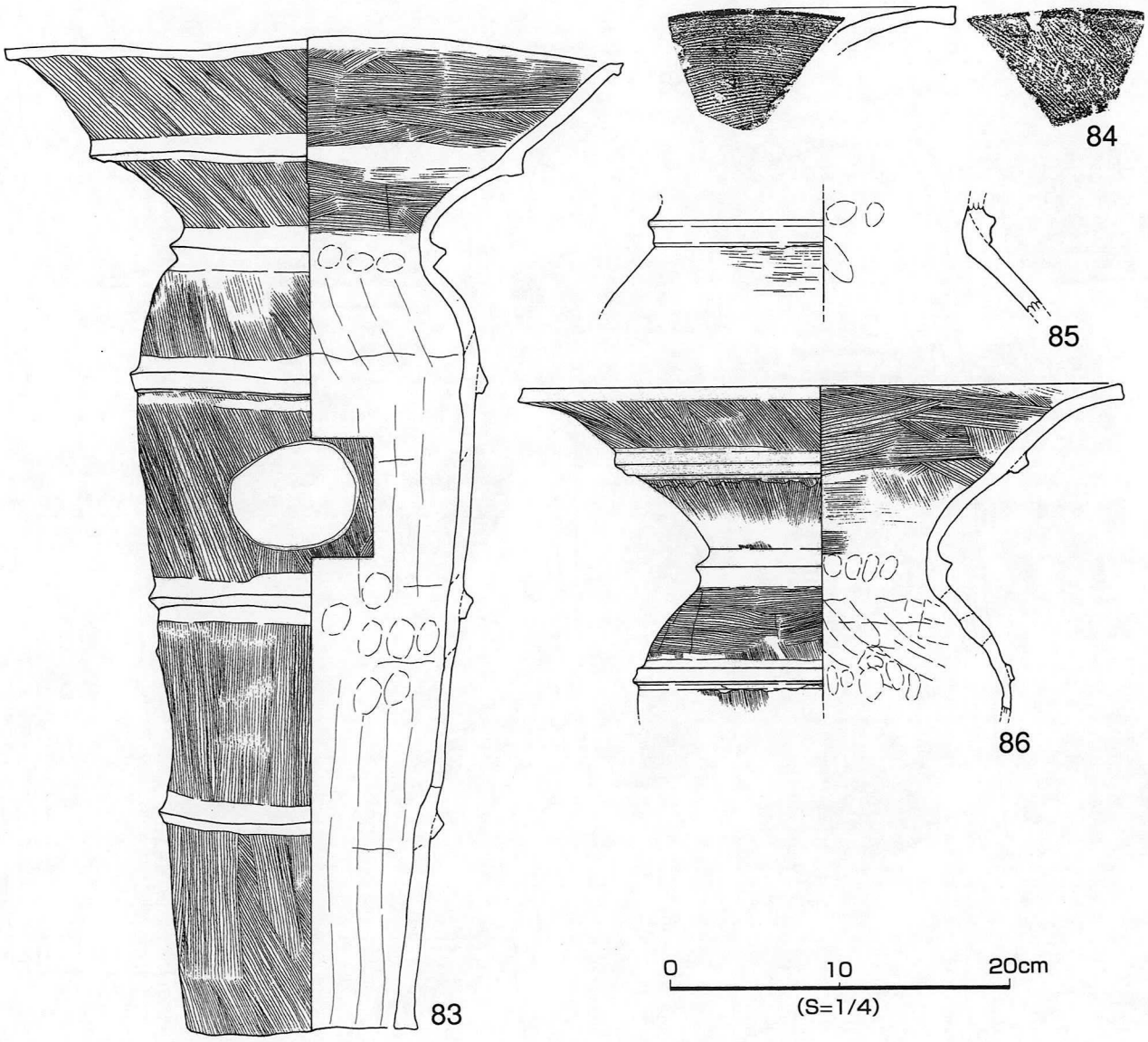


図26　周濠内出土の朝顔形埴輪

(2)朝顔形埴輪

83～86までの4点である。

83は完形である。形態は底部から胴部最上のタガまでわずかに外に開きながら立ち上がり、その上部は頸部に向かって細くなる。頸部の径は14.5cmで底部径13.6cmに対して若干幅が広い。頸部から口縁部は大きく外に広がり、口縁部径は38.3cmを測る。タガは胴部に3帯あり、一番下のタガは断面三角形、上の2帯は断面が扁平な台形である。一方、頸部と口縁の中間には断面三角形のタガがある。調整は胴部外面に斜め・縦ハケ、口縁部外面は斜めハケである。胴部内面はナデ、口縁部外面は横ハケである。

86は口縁部から胴部にかけてのものである。口頸部は周濠内から、頸部から胴部にかけては周濠外から出土している。86との相違点として、頸部から口縁部の中間にあるタガの断面形が台形であること、胴部上段に二次調整として横ハケを施すことがあげられる。

(3)形象埴輪

人物埴輪

人物の頭部が1点出土している。頭部は頭頂部の2/3及び左側面を一部欠損するものの、頸部まで保存状態は良好である。法量は正面において、顎部から額残存部まで19cm、頸部から頭頂部までの残存高27.8cmである。幅は最大が19.2cmで、人間の頭部よりも大きい。

埴輪は頭頂部が筒抜けであり、頭部は横からみると、斜めに切ったように後方に傾斜している。また、頭頂部から約6cm下には三角形の透かしが現状で5ヶ所認められ、後頭部に1つ、側面にそれぞれ2つ配置されている。正面は欠損のため透かしの有無は確認できない。配置構成は、頭部の傾斜に応じて、透かしの位置も前が高く後ろが低くなっている。また、最も低位置にある後頭部の透かしの大きさが幅4.3cm、高さ5.4cmであるのに対して、右側面後頭部寄りの透かしの大きさが幅3.8cm、高さ4.2cm、右側面正面寄りの透かしの大きさが幅4.0cm、高さ4.6cmで、後頭部の透かしとその他の透かしでは大きさが異なっている。

耳の表現は、隅丸方形状に外側に向かって張り出しており、右耳で幅7.5cm、高さ11.2cmである。そして耳の中央部には径4cmの円形の孔が時計回りに施されている。左耳は欠損しているものの、残存状態からは右耳の形態と同じであると考えられる。こうした耳の特徴から、この埴輪は正面性を強く意識したものであろう。

顔面は、目から耳を囲んでヘラ描きによる表現が認められ、鼻上には三角形状のヘラ描きが表現されている。また、顎部は鋸歯状のヘラ描きが表現されており、これらのヘラ描きの表現は、入墨を表しているものと考えられる。また、額中央部には幅3.3cm、縦2.8cm以上の方形状の隆起が認められる。上部が欠損しているため、何を表現したものかは不明である。

顔の表現は左右対称ではない。例えば、目の上の入墨は、右目に比べて、左目の方をわずかに高く上げて表現しており、口は顔の中心から左にずれている。また、顎の輪郭は左と右で異なる。同様のことは透かしの位置にも認められ、右側に比べて、左側では透かしの位置が高くなっている。

整形方法は粘土紐の積み上げであり、内面の所々に接合痕が確認できる。調整方法は外面の正面で横ナデ、後頭部で縦ナデ、頸部で横ナデを施す。内面は横ナデと、指頭圧痕が認められる。また、頭頂部内面には横ハケが認められ、その端部近辺には横ナデが認められる。

色調は正面がにぶい黄橙(Hue10YR7/3)、後頭部が淡黄(Hue2,5YR8/3)であり、胎土は2～3mmの砂粒、石英を含む。

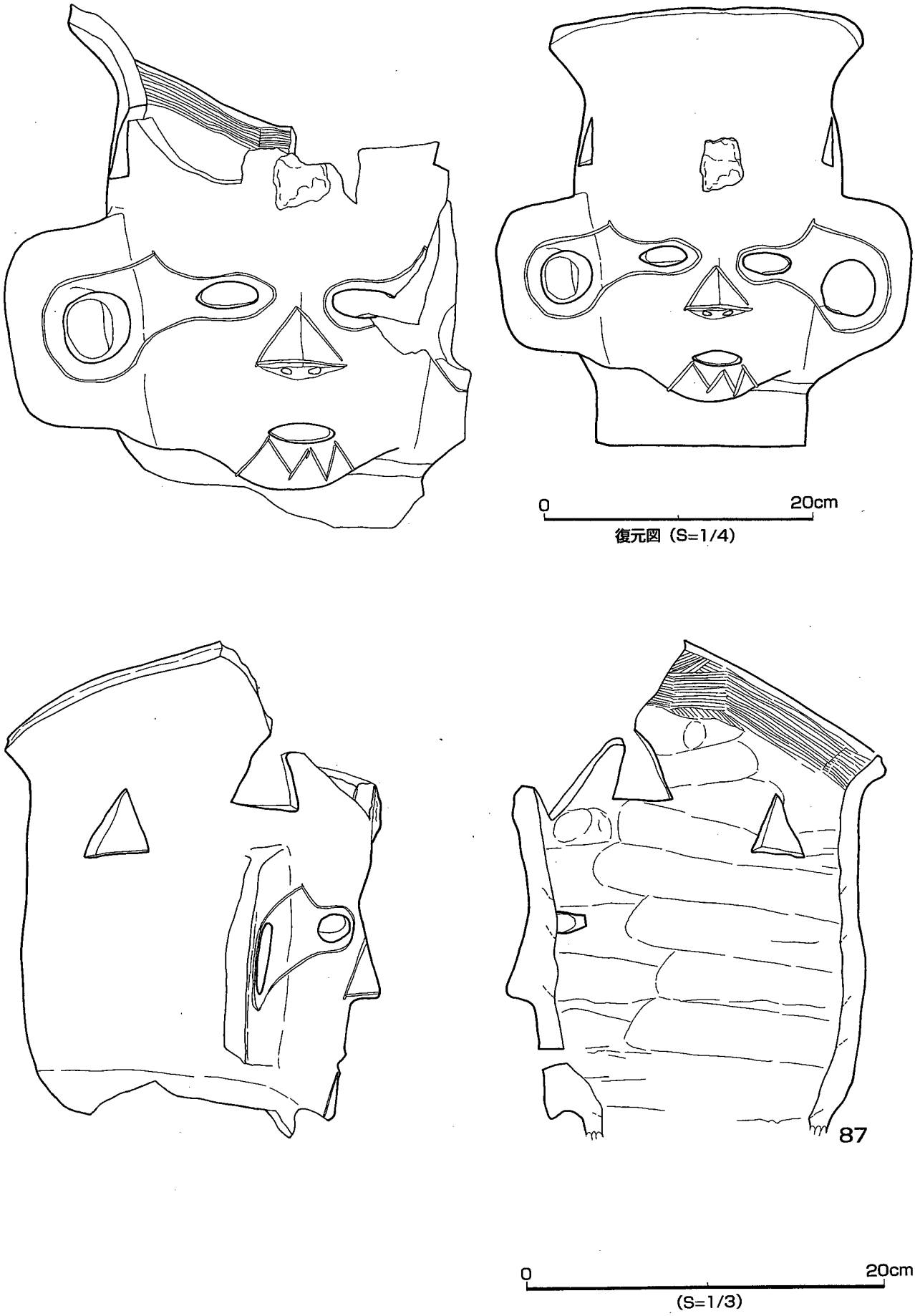


図27　形象埴輪1（人物）

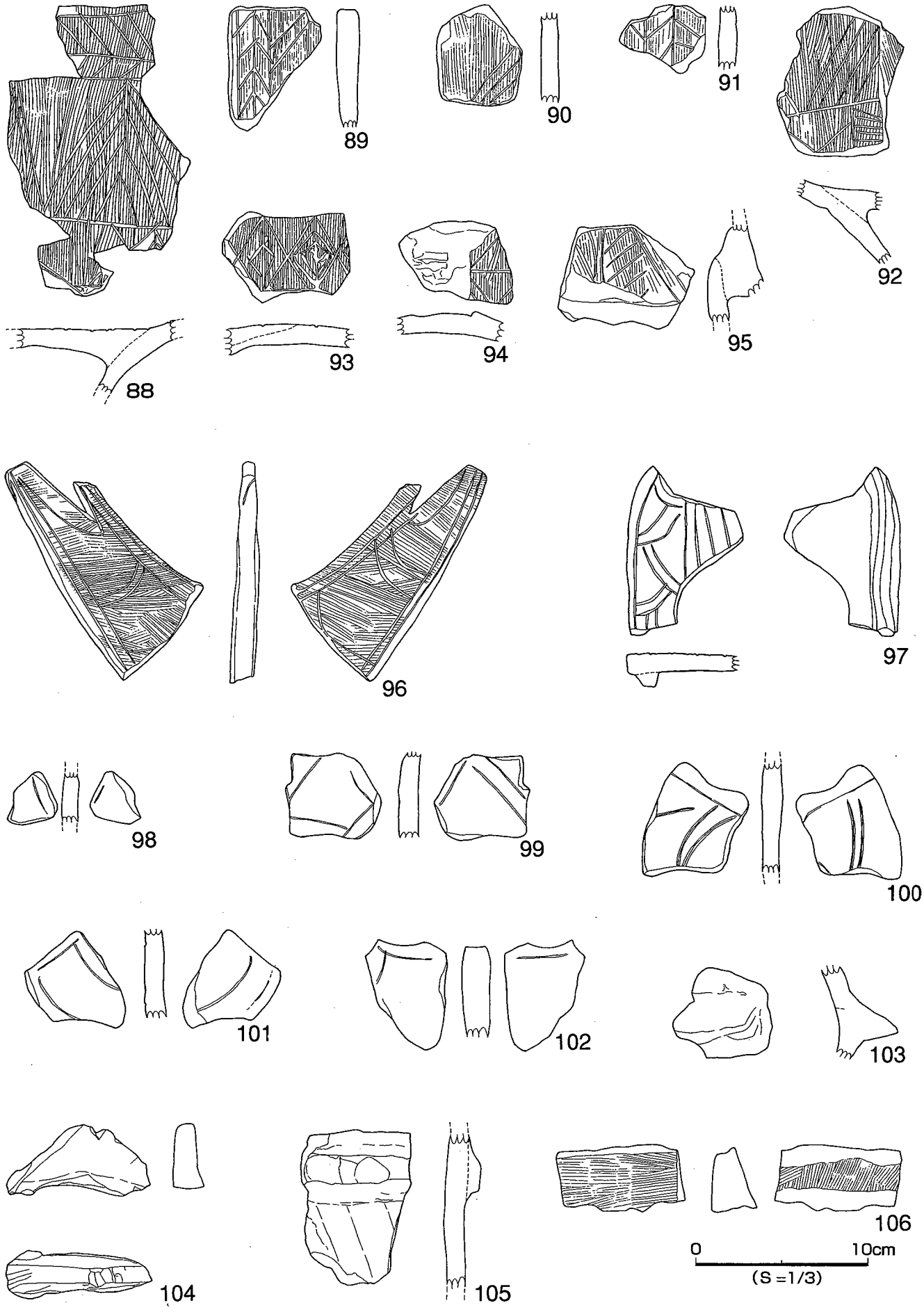

88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
0
10cm
(S=1/3)

図28　形象埴輪2

器財形埴輪

88～95 は盾形埴輪であり、すべて同一個体である。これらの資料は人物埴輪の左目の破片と一緒に出土しており、また、胎土が類似することから、人物埴輪の一部と考えられる。

現状から復元する全体像は、「Ⅱ」字形の区画に分割した盾面で、外側の輪郭は綾杉文を施している。綾杉文の幅は側面で約 2cm、上面で約 4cm である。

文様は内区と外区に分かれ、外区には上部に幅約 9cm、縦約 10cm の鋸歯文、側面に正確な大きさは不明であるが、上部より小さな鋸歯文を施し、内区には斜格子文を施している。断面は盾面の側辺がわずかに内湾している。盾面の調整方法としては、縦ハケが施される。

96～102 は蓋形埴輪である。96、98～102 は立ち飾り部である。96 は調整痕として、横、斜めハケが認められ、胎土には橙色のクサリ礫が認められる。色調は 96 が淡黄(Hue2,5Y8/3)、その他が浅黄橙(Hue10YR8/3)である。97 は他の資料と異なり、片面にのみ文様が認められ、もう片面には幅 1.4cm、高さ 1.5cm の突帯を端部に沿って貼り付けている。色調は外面が灰白(Hue2,5Y8/2)、断面が橙(Hue5YR7/6)である。

103～106 は不明形象埴輪である。103、104 は鳥(鶏)形埴輪の破片であろうか。105 は堅く焼き締まっており、タガの上面には指頭圧痕が認められる。106 は一面に縦ハケ、もう一面に横ハケが施されており、家形埴輪の破風の調整に似ているが断定はできない。

(松田)

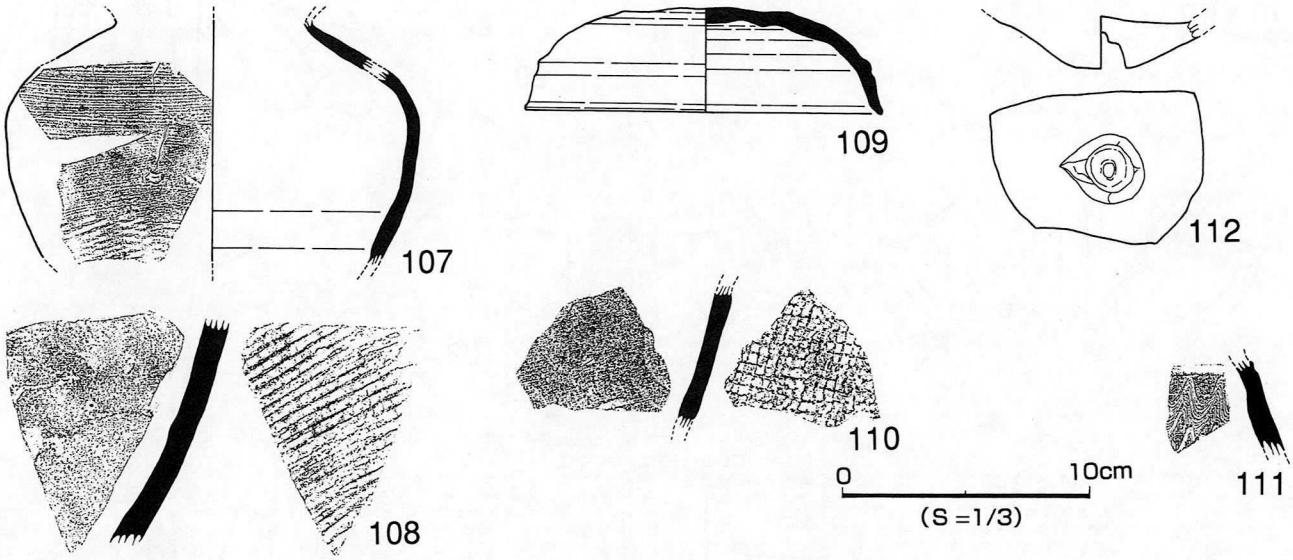


図29 周濠内出土の巣恵器・土師器

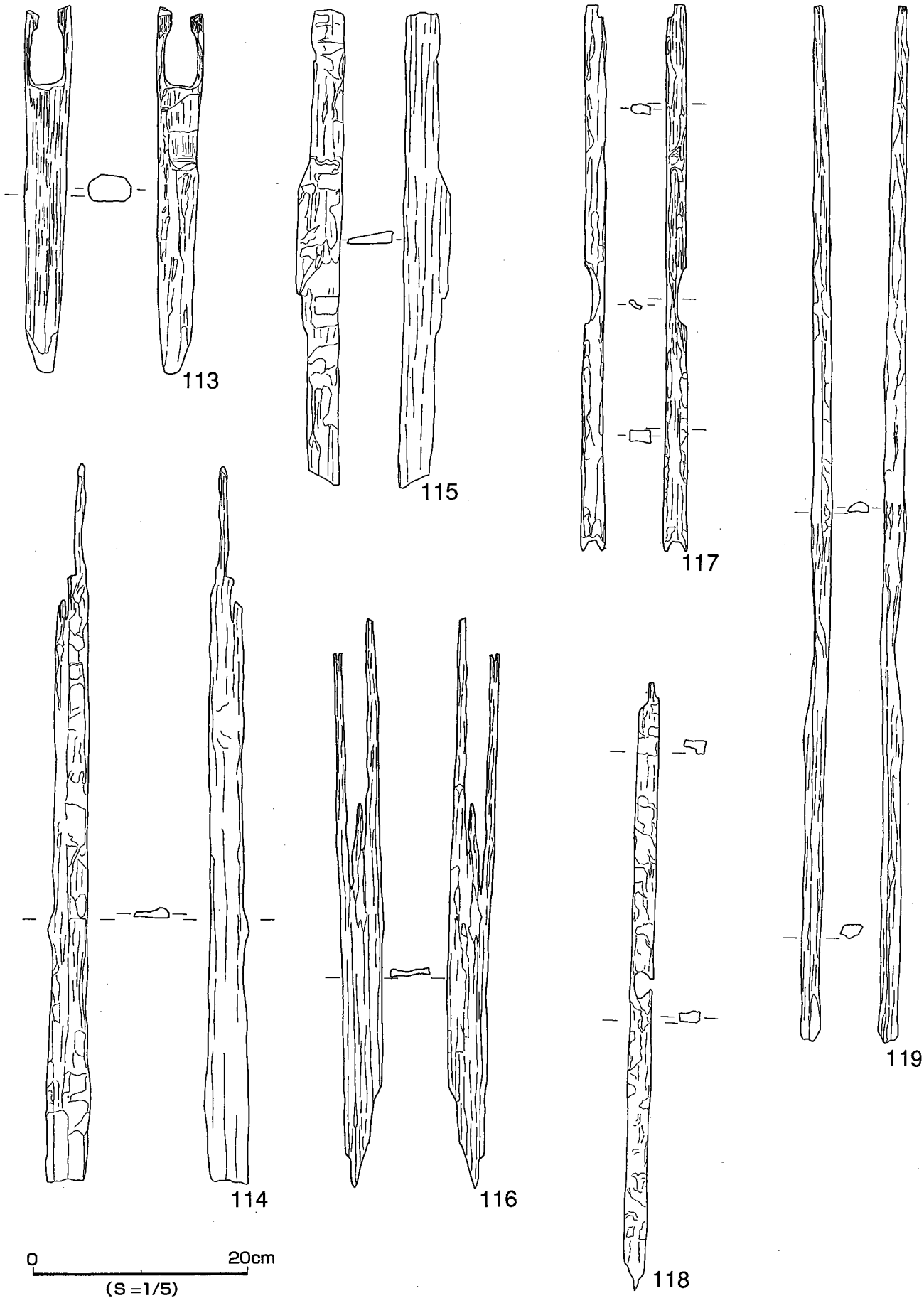


図30　周濠内の樹木・木製品（1）

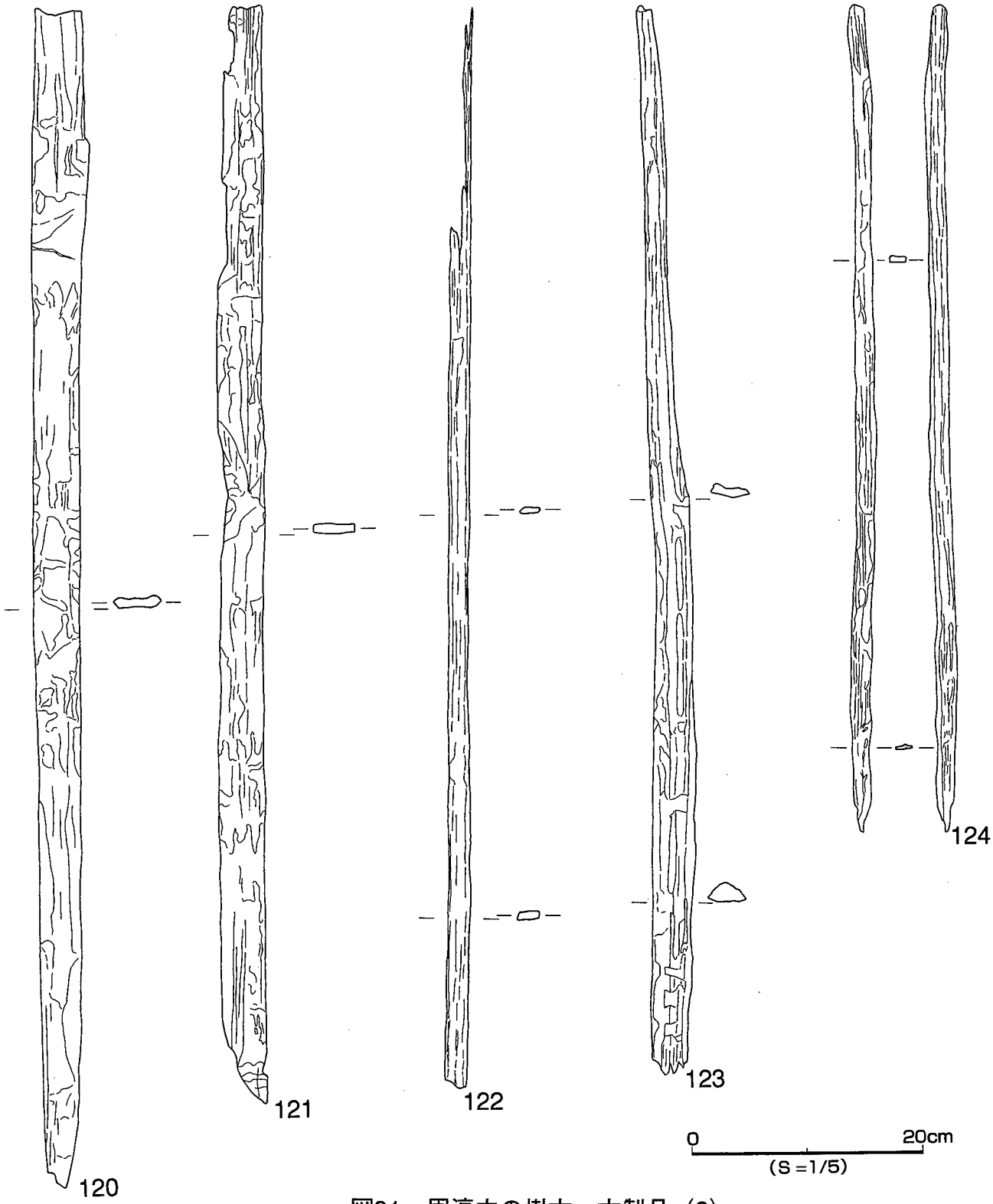


図31　周濠内の樹木・木製品（2）

(4)須恵器・土師器

107～111は須恵器、112は土師器である。

107は最大径16.6cm、残存高10cmである。胴部外面はカキ目調整を施した後、底部に平行タタキを施している。内面は丁寧な横ナデである。器形は壺である。108は甕の破片である。外部には格子風タタキがみられ、内面にはナデが認められる。109は杯蓋である。口縁部はやや外半し、端面に段を有する。天井部

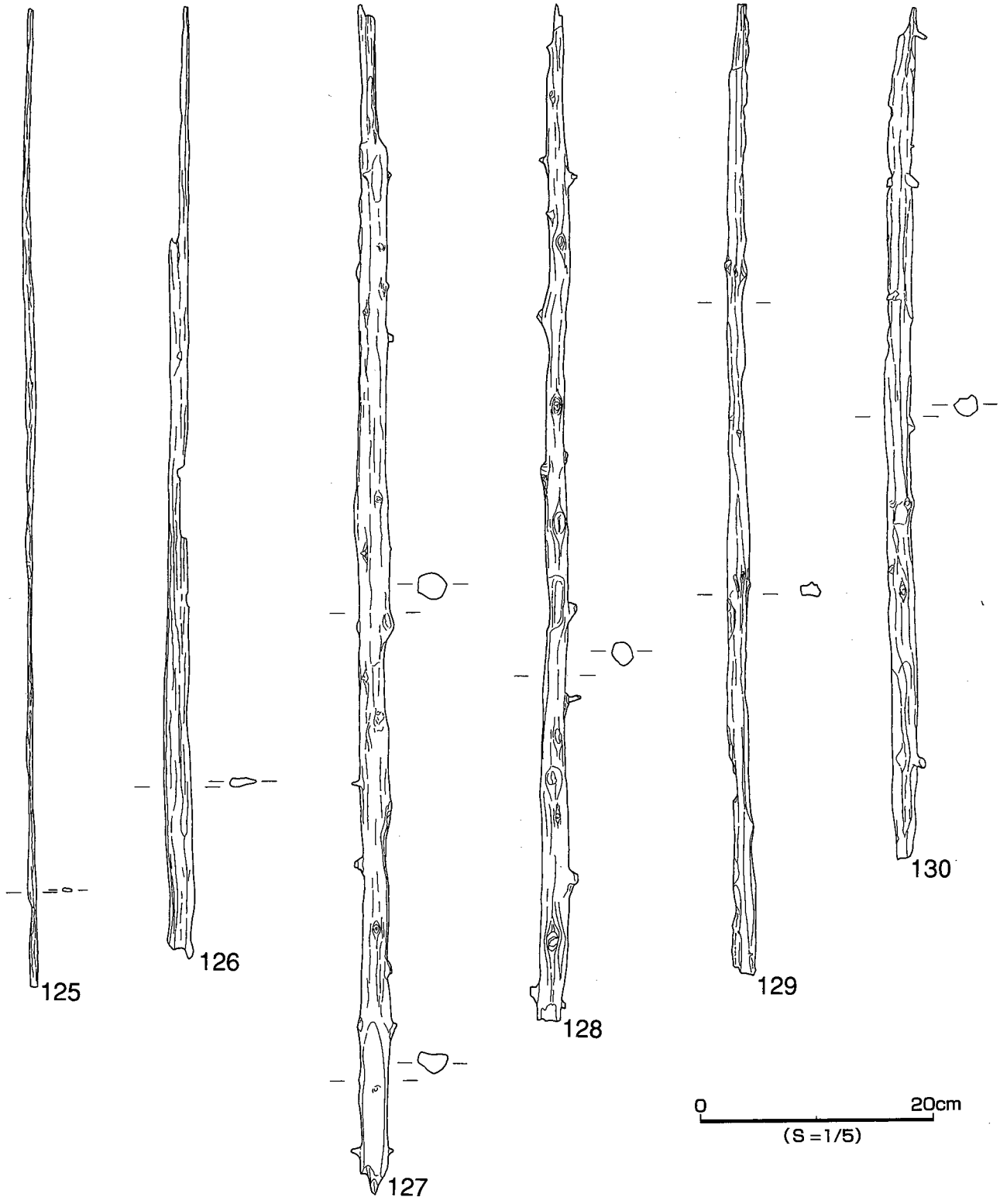


図32　周濠内の樹木・木製品（3）

と口縁部とを分ける稜線は鈍く凹線状になっている。時期は田辺編年のTK10である。110は甕の破片である。外面は格子タタキが認められ、内面には青海波の当具痕がナデ消されている。焼成は軟質である。111は器台の脚部片である。外面には櫛描波状文が認められる。112は高杯の杯部である。体部は欠損しており、底部外面と脚部との接合面には、脚部接合の孔が認められる。

(松田)

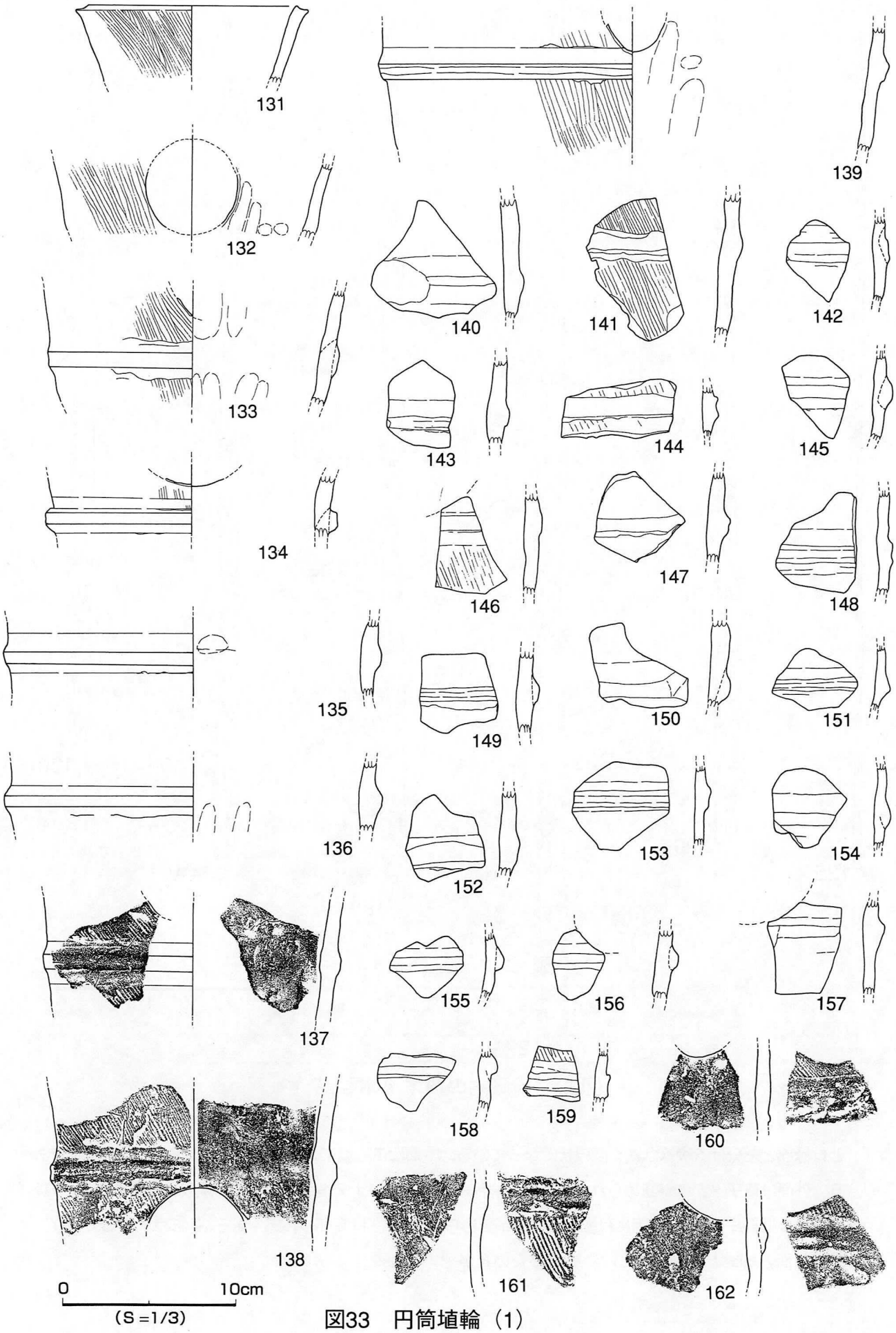

131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
0
10cm
(S＝1/3)

図33　円筒埴輪（1）

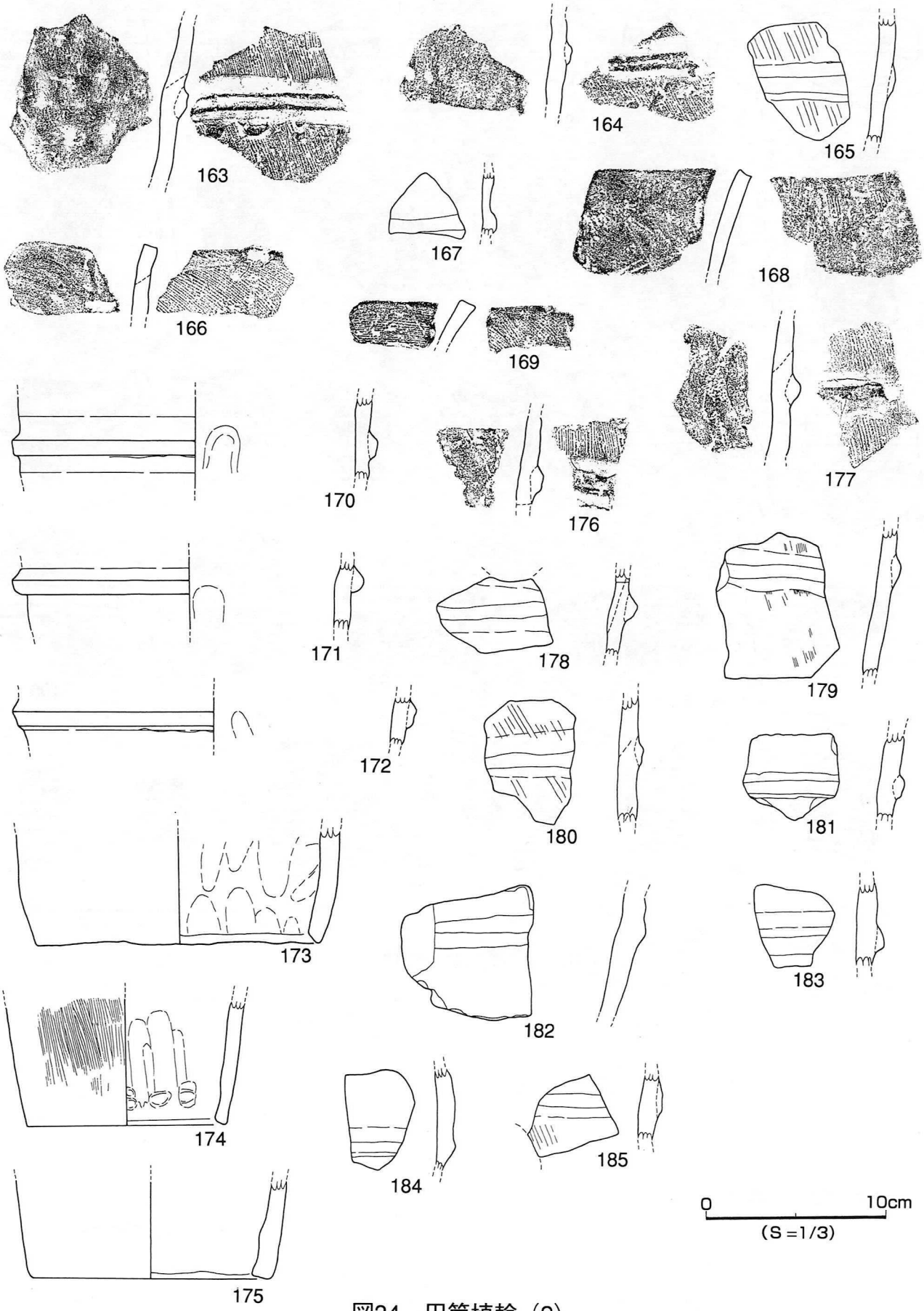

163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
10cm
(S=1/3)

図34　円筒埴輪（2）

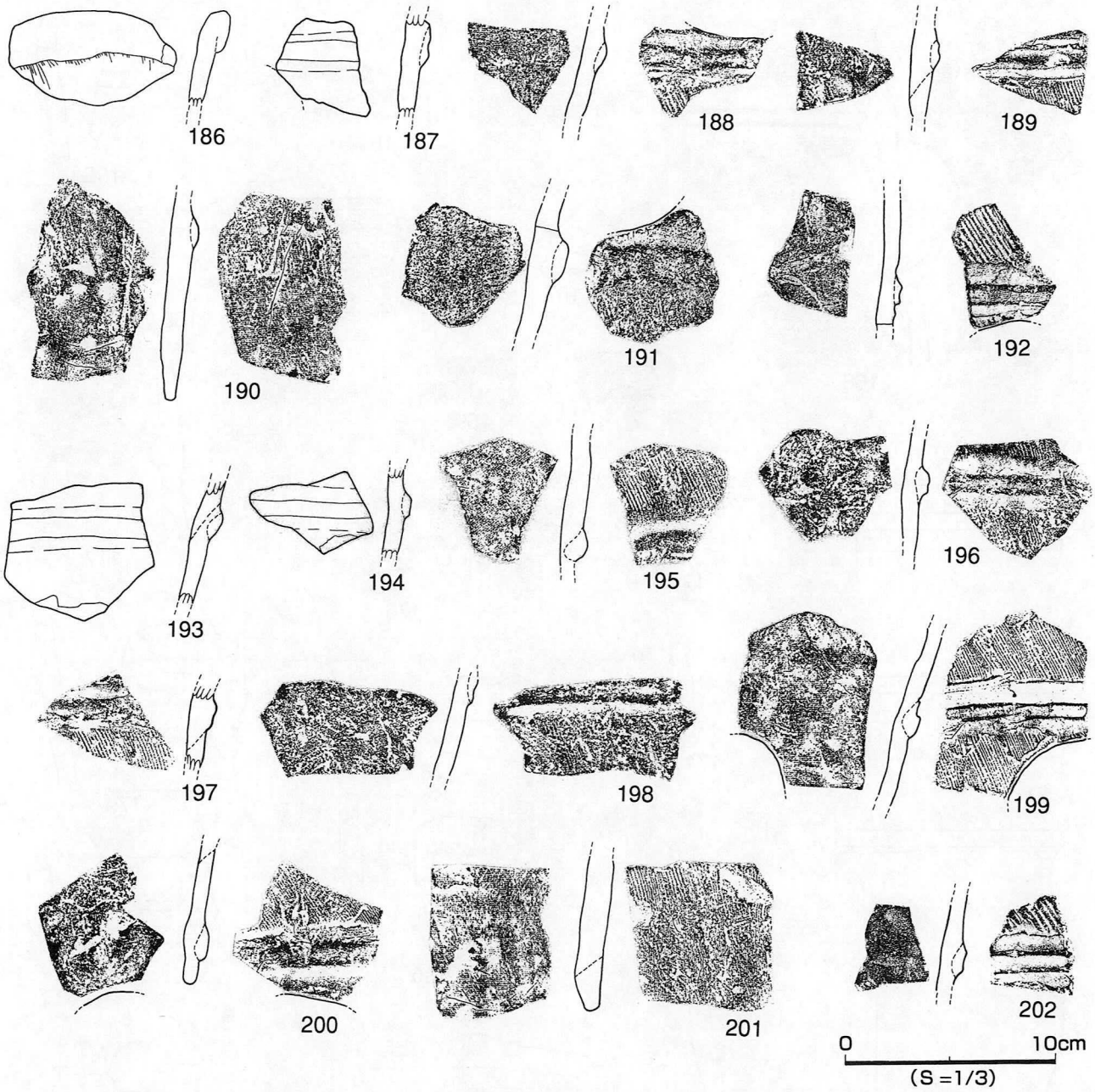


図35　円筒埴輪（3）

（5）樹木・木製品

出土資料はほとんどが自然木、もしくは板状のものであり、明らかに加工が認められる資料は多くない。全長は最も長い例で203cmであり、100cm前後のものと、100cm後半のものがある。

加工の可能性のある資料は、113、117、118である。113は長さ67.8cmであり、出土例の中では一番短い。片方の端部は木材の中心部分が抉り取られており、残された両端によって二股状になっている。117は

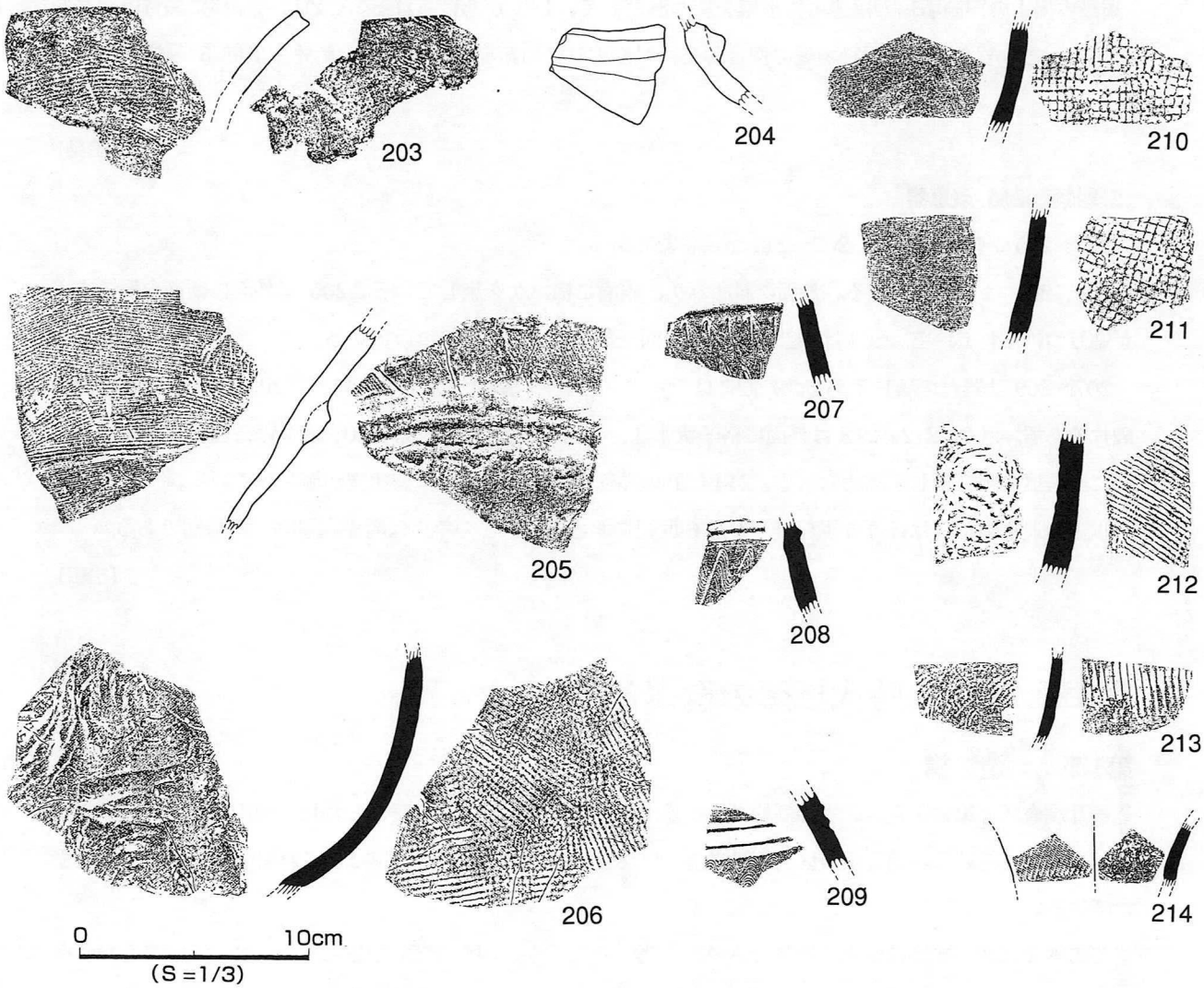


図36　朝顔形埴輪・須恵器

長さ 110cm である。中間には幅約 11cm の抉りが認められる。また、片方の端部には台形状の掘りこみが認められ、端部は小さな二股となっている。118 は 117 と端部同士が接した状態で出土している。長さは 112.8cm で、その中央付近には楕円形状の抉りが認められる。

114～116、120～122 は板状を呈している例である。これらには穿孔、掘り込み等の加工痕は認められない。

127～130 は自然木であり、節が至る箇所に認められる。その内、127 は一部炭化した箇所が認められる。これら樹木・木製品は用途の推測となる形態的特徴がはっきりせず、その性格については不明である。

(松田)

第5節　周濠以外から出土した遺物

(1) 円筒埴輪

周濠外出土の円筒埴輪はそのほとんどが破片であり、磨耗が著しく調整が確認できないものも含まれる。

周濠内出土の円筒埴輪とは違った形態を持つ例として、186 があげられる。これは口縁部に貼付け突帯を有する。こうした形態の円筒埴輪の例として、V期では守口市梶遺跡・豊中氏新免古墳群 3 号墳があげられる。

(船築)

(2)朝顔形埴輪・須恵器

203～205 が朝顔形埴輪、206～214 が須恵器である。

203、205 は口縁部である。外面に斜めハケ、内面に横ハケを施している。205 は外面に断面台形のタガが貼りつけられている。204 は頸部であり、断面三角形のタガを貼りつけている。

207～209 は器台の破片である。外面にはシャープな突帯、波状文が認められる。206、210～213 は甕の破片である。206、212、213 は外面に格子状叩き、内面に当具痕が残る。210、211 は外面に格子叩き、内面に当具痕のナデ消しが認められる。214 は壺の頸部である。外面には波状文が施されている。

以上の遺物の年代はほぼ 5 世紀後半から 6 世紀におさまり、この年代は周濠内遺物と同時期である。

(松田)

第5章　古墳時代以降の遺構と遺物

第1節　遺　構

第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区の霊園側約半分は盛土直下より湿地状の粘土でおおわれ、地山を 3、40cm 掘り下げて堆積している。第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区における古墳の周濠等の遺構は、これにより大きく削平を受けている。

この地山に及ぶ掘削は中世以降になされたと考えられるが、現代まで「下田(しもだ)」として使用され、機能していたことは、地元の古老の話によっても明らかである。この下田は、北東方向から流れてくる水を調査地の南の水路(現在は暗渠になっている)に流していたというのである。

水を流すといっても、このあたりは高低差が少なく、本来水路であるべきところを水田耕作しながら、ゆるやかに時間をかけて排水していたようである。

普賢寺古墳の周濠は、下田にうまく取り込まれており、地山掘削時に周濠は機能していたと考えられる。

(宇治原)

第2節　遺　物

215 は備前焼の擂鉢である。内面には 9 条の擂目が認められる。216～220 は羽釜の鍔部である。216～218 は鍔部から口縁部にかけて大きく内弯する形態である。221 は奈良時代の須恵器杯である。222、224、225、227、228 は瓦器椀である。229 は瓦質土器であり、口縁部とその下部の突帯の間には菱文が認められる。230 は青磁であり、15 世紀のものである。

(松田)

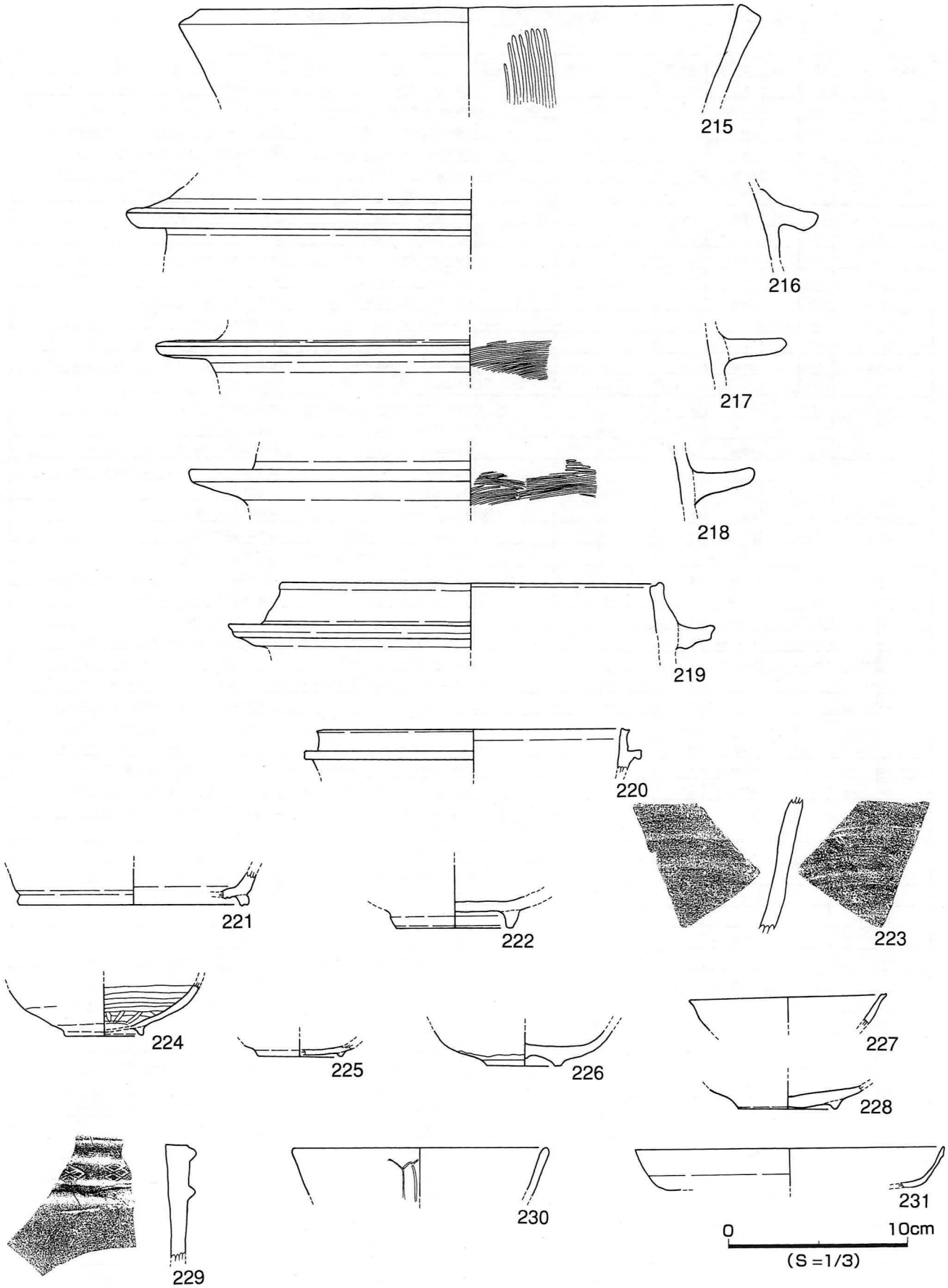


図37　古代以降の出土遺物

表1　周濠内出土　円筒埴輪　観察表1

遺物番号	器高	口縁径	底径	突帯	突帯間	ﾀｶﾞ突出度	ﾀｶﾞ数	ハケ目(／1cm)	調整	色調
1	17＋α	23,6		台形	10,6	42		9	外面＝タテ、斜めハケ　内面＝ハケ、ナデ	灰白(Hue5YR7/2)　断面＝にぶい橙(Hue2,5YR6/4)
2	27,5＋α	22,2		台形	7,4～10,4	31		8	外面＝タテ、斜めハケ　内面＝ハケ、ナデ	灰白(Hue5YR7/2)　断面＝にぶい橙(Hue2,5YR6/4)
3	41,4	21,7	13,5	台形	8,1～11,8	40	3	9	外面＝タテ、斜めハケ　内面＝ハケ、ナデ	灰白(Hue10YR8/2)　断面＝にぶい橙(Hue2,5YR6/4)
4	22,9＋α	23,4		台形	7,7～8,5	31		8	外面＝タテ、斜めハケ　内面＝ハケ、ナデ	灰白(Hue5YR7/1)　断面＝橙(Hue2,5YR7/6)
5	16+α	22,0		M字形	8,1	23		6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5YR8/1)　断面＝淡赤橙(Hue2,5YR7/4)
6	39,7	22,0	12,0	台形	5,9～11,5	27	3	9	外面＝タテ、斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue10YR8/2)　断面＝橙(Hue2,5YR7/6)
7	20+α	29,0		M字形	6,2～7,6	18		12	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue10YR7/1)　断面＝淡赤橙(Hue2,5YR7/4)
8	31,8+α	23,4		M字形	7,7～8,6	20		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
9	32+α	24,0		M字形	6,4～7,2	18	3＋α	6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/3)
10	14,5+α	29,4		M字形	7,3	20		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5YR8/3)
11	25,5+α	27,0		M字形	6～7	26		4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5YR8/3)
12	44,4	23,6	13,3	M字形	6,7～8	21	4	7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)
13	13＋α	28,0		M字形	7,1	20		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	外面＝にぶい黄橙(Hue10YR7/3)　内面＝橙(Hue7,5YR7/6)
14	30+α	24,0		M字形	6～7,4	27	3＋α	8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	外面＝灰黄(Hue2,5YR7/2)　内面＝灰黄(Hue2,5YR6/2)
15	41,3	23,4	11,0	三角、丸形	5,1～13,6	29	3	9	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	橙(Hue5YR7/6)
16	12+α	23,6		M字形	6,9	36		8	外面＝不定方向の斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5YR8/2)
17	37,7	21,0	11,6	M字形	7, 5～8,3	20	3	4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	明褐灰(Hue7,5YR7/1)
18	34,9	21,0	11,5	M字形	6,2～7,8	23	3	4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5YR7/2)　断面＝橙(Hue2,5YR6/6)
19	9+α	21,0						7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/2)　断面＝にぶい赤褐(Hue5YR5/3)
20	9,2+α	28,0		M字形	5,2	23		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/3)
21	16,8+α	26,8		M字形	5,8	21		13	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
22	30+α	27,4		低い台形	8,5～9,5	20		6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
23				台形		25		9	外面＝タテハケ　内面＝斜めハケ・ナデ	にぶい橙(Hue5YR7/3)
24	12+α	26,8		M字形	6,6	20		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	外面＝浅黄(Hue2,5Y7/3)　内面＝灰白(Hue5Y7/2)
25	21,2+α	20,5		三角形	7,7	47		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/1)　断面＝橙(Hue7,5YR7/6)
26	15,4+α	24,3		M字形	7,6	31		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄(Hue2,5Y6/3)
27	26,5+α	21,4		低い台形	7,5～8,4	19		6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)　断面＝橙(Hue5YR7/6)
28	18+α	21,6		低い三角形	7,8			7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)　断面＝にぶい橙(Hue5YR7/3)
29	23,3+α	22,0		丸形	8,7	20		6	外面＝不定方向の斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)　断面＝橙(Hue5YR6/6)
30	14,6+α	20,8		台形	6,8	25		9	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄橙(Hue10YR6/2)　断面＝橙(Hue7,5YR6/6)
31	23,8+α	20,0		M字形	6,9～9,3	17		9	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y7/2)　断面＝にぶい橙(Hue7,5YR6/4)
32	12,2＋α	24,4		M字形	7,0	28		8	外面＝不定方向の斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y8/2)　断面＝にぶい橙(Hue5YR7/4)
33	17,7＋α	21,2		不定形	9,8	31		8	外面＝不定方向のハケ　内面＝ハケ、ナデ	にぶい橙(Hue7,5YR7/3)　断面＝明褐灰(Hue5YR7/1)
34	26,2+α	23,0		M字形	5,5～6,8	33	3+α	8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)　断面＝淡橙(Hue5YR8/3)
35				M字形		33		6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/1)　断面＝橙(Hue2,5YR6/6)
36				台形		38		4	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/1)
37				M字形		26		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄(Hue2,5Y7/3)
38				M字形	8,3	18		3	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰(Hue5Y7/2)　断面＝にぶい橙(Hue5YR6/4)
39				三角形		46		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
40			12,0					7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰(Hue5Y6/1)　断面＝橙(Hue7,5YR7/6)
41				M字形		25		6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y7/2)
42								7	外面＝斜めハケ　内面＝ハケ、ナデ	灰白(Hue5Y7/2)　断面＝にぶい赤褐(Hue10YR6/4)
43				M字形		20		9	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	明褐灰(Hue7,5YR7/1)
44				台形		28		4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/2)　断面＝にぶい橙(Hue7,5YR6/4)
45				低い台形		24		9	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/2)
46				M字形		27		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
47								7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)　断面＝灰黄(Hue2,5Y7/2)
48								6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	黄灰(Hue2,5Y6/1)
49				台形		20		7	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/2)　断面＝にぶい橙(Hue7,5Y7/4)
50				台形		38		7	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
51				M字形		21		4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/2)
52				M字形		23		7	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	明褐灰(Hue7,5YR7/2)
53				台形		34		8	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y8/2)
54				台形		38		15	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y7/2)
55				M字形		31			外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y8/2)
56				M字形		20		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)
57				M字形		16		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y8/2) 断面＝明赤褐(Hue2,5YR5/6)
58				M字形		22		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	明赤灰(Hue2,5YR7/3) 断面＝橙(Hue2,5YR6/6)
59				M字形		25		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
60				M字形		25		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y6/2)
61								6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	明褐灰(Hue7,5YR7/1)
62								5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)　断面＝にぶい橙(Hue2,5YR6/3)

表2　周濠内出土　円筒埴輪　観察表2

遺物番号	器高	口縁径	底径	突帯	突帯間	タガ突帯度	タガ数	ハケ目(/1cm)	調整	色調
63				M字形		30		14	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y8/2)　断面＝橙(Hue2,5YR6/6)
64				M字形		22			内面＝ナデ	浅黄(Hue2,5Y7/3)
65				M字形		33		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)
66				M字形		28		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)　断面＝にぶい橙(Hue2,5YR6/3)
67				M字形		20				灰黄(Hue2,5Y7/2)
68				台形		34		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y8/2)　断面＝にぶい橙(Hue5YR7/3)
69				台形		39			外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)　断面＝にぶい橙(Hue5YR7/3)
70				台形		28			外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y7/2)　断面＝にぶい橙(Hue5YR6/4)
71				低い台形		25		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄褐(Hue10YR5/3)
72				台形		36		7	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
73				台形		26			外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/3)
74				台形		33		8	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
75				台形		41		8	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue10YR8/2)　断面＝橙(Hue5YR7/6)
76				三角形		24		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y8/2)　断面＝橙(Hue5YR6/6)
77				台形		21		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/3)
78				丸形		17		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)
79				丸形		18		7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄褐(Hue10YR5/4)
80								7	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue2,5Y7/1)
81								7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y6/2)
82									外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)

表3　周濠内出土　朝顔形埴輪　観察表

遺物番号	残存箇所	口縁形	底部径	頸部径	突帯間	タガ突出度	タガ数	ハケ目(／cm)	調整	色調
83	完形	36,3	13,6	14,5	6,2～11,5	41	肩＝3　頸＝1　口縁＝1	8	外部＝タテ・斜めハケ　内部＝ナデ・ハケ	灰白(Hue5Y7/2)
84	口縁部							7	外部＝斜めハケ　内部＝ハケ	にぶい黄橙(Hue10YR6/4)
85	頸部			14,8				5	外部＝横ハケ　内部＝ナデ	黄灰(Hue2,5Y6/1)
86	口縁部～肩部上半	35,2		14,5		27	頸＝1　口縁＝1	8	外部＝横・斜めハケ　内部＝ナデ・ハケ	

表4　周濠内出土　須恵器・土師器　観察表

遺物番号	種類	器種	口径	高さ	最大幅	調整	色調	備考
107	須恵器	直口壺？		10+α	16,6	外面＝カキ目、叩き　内面＝ナデ	灰白(HueN7/)	
108	須恵器	甕				外面＝叩き　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/1)	
109	須恵器	杯蓋	14,4	4,2		外面＝ケズリ　内面＝ナデ	褐灰(Hue10YR6／1)　断面＝明赤褐(Hue7,5R7／1)	TK10
110	須恵器	甕				外面＝叩き　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5Y7／2)	軟質
111	須恵器	器台				内面＝ナデ	灰(HueN5/)	波状文
112	土師器	高杯					浅黄橙(Hue10YR8／3)	

表5　周濠内出土　樹木・木製品　観察表

遺物番号	長さ	幅	厚さ	備考	遺物番号	長さ	幅	厚さ	備考	遺物番号	長さ	幅	厚さ	備考
113	67,8	8,2	5,0	加工痕有り	119	192,8	4,0	2,6		125	166,0	1,8	0,8	
114	133,2	8,0	2,0		120	208,0	4,8	8,8		126	161,8	6,6	1,2	
115	87,8	8,6	2,4		121	188,6	7,8	1,6		127	200,8	7,0	4,4	部分的に炭化
116	105,8	8,0	4,6		122	186,0	4,0	1,4		128	173,2	6,0	4,0	
117	110,0	36,0	2,4	加工痕有り	123	191,0	7,4	2,4		129	166,0	4,0	2,9	
118	112,8	4,4	2,2	加工痕有り	124	144,0	4,0	1,2		130	145,2	3,0	5,0	

表6　周濠以外から出土した円筒埴輪　観察表1

遺物番号	器　種	出土地点	口縁径	突　帯	ｸﾋﾞ突出度	ハケ目(/cm)	調　整	色　調
131	円筒埴輪	Ⅰ区	12			8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
132	円筒埴輪	Ⅰ区				4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい橙(Hue7,5YR7/4)
133	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	14	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)　断面＝灰白(Hue5Y7/1)
134	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	35	8	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/1)
135	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	26		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
136	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	18		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
137	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	12	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
138	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	18	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/3)　断面＝灰白(Hue5Y7/1)
139	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	22	4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)　断面＝灰白(Hue10Y7/1)
140	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	18		内面＝ナデ	橙(Hue5YR7/6)
141	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	13	6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)　断面＝灰白(Hue10Y7/1)
142	円筒埴輪	Ⅰ区		低いM字形	13		内面＝ナデ	にぶい橙(Hue7,5YR7/4)
143	円筒埴輪	Ⅰ区		低いM字形	16		内面＝ナデ	淡黄(Hue7,5YR8/6)　断面＝浅黄橙(Hue7,5YR8/6)
144	円筒埴輪	Ⅰ区		低いM字形	14	4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/3)　断面＝褐灰(Hue10YR6/1)
145	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	20		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
146	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	13	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)　断面＝灰白(Hue5Y7/1)
147	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	29		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)
148	円筒埴輪	Ⅰ区		低いM字形	16		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue2,5YR6いち/4)
149	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	21		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
150	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	31		内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5YR8/4)
151	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	24		内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5YR8/4)
152	円筒埴輪	Ⅰ区		低い台形	11		内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5YR8/4)
153	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	18		内面＝ナデ	黄(Hue2,5Y8/6)
154	円筒埴輪	Ⅰ区		丸形	20		内面＝ナデ	にぶい赤褐(Hue2,5YR5/4)
155	円筒埴輪	Ⅰ区		丸形	35		内面＝ナデ	明黄褐(Hue10YR7/6)
156	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	26		内面＝ナデ	橙(Hue2,5YR7/6)
157	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	27		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
158	円筒埴輪	Ⅰ区		丸形	33		内面＝ナデ	淡黄(Hue5YR8/3)
159	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	23	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/2)　断面＝灰白(HueN7/)
160	円筒埴輪	Ⅰ区				6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)　断面＝灰白(Hue5Y7/1)
161	円筒埴輪	Ⅰ区		低いM字形	13	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄(Hue2,5YR6/2)
162	円筒埴輪	Ⅰ区		低いM字形	28	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)
163	円筒埴輪	Ⅲ区		M字形	24	7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)
164	円筒埴輪	Ⅲ区		M字形	29	6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/3)
165	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	15	4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)　断面＝灰白(Hue10Y7/1)
166	円筒埴輪	Ⅲ区				6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue10YR8/2)
167	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	16		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR6/4)
168	円筒埴輪	Ⅰ区				5	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	橙(Hue5YR7/6)　断面＝灰白(Hue7,5YR7/6)
169	円筒埴輪	Ⅰ区				6	外面＝タテハケ　内面＝ハケ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)　断面＝灰白(Hue2,5Y7/1)
170	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	35			淡黄(Hue5Y8/3)
171	円筒埴輪	Ⅰ区		丸形			内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/4)
172	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	31		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR6/4)
173	円筒埴輪	Ⅰ区					内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/3)　断面＝灰黄(Hue2,5Y6/2)
174	円筒埴輪	Ⅰ区				8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/2)　断面＝灰白(Hue10Y7/1)
175	円筒埴輪	Ⅰ区					内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR6/4)
176	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	24	7	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue10Y7/1)
177	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	28	6	外面＝タテハケ　内面＝ナデ	灰白(Hue10Y7/1)
178	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	42		内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/4)
179	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	22		外面＝ハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/3)
180	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	30	3	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)　断面＝灰白(Hue10Y7/1)
181	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	28		内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/3)
182	円筒埴輪	Ⅰ区		三角形	19		内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)
183	円筒埴輪	Ⅰ区		台形	33		内面＝ナデ	淡黄(Hue5Y8/3)
184	円筒埴輪	Ⅰ区		丸形	11		内面＝ナデ	浅黄(Hue2,5Y7/3)
185	円筒埴輪	Ⅰ区		M字形	14	5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)

表7　周濠以外から出土した円筒埴輪　観察表2

遺物番号	器　種	出土地点	口縁径	突　帯	タガ突出度	ハケ目(/cm)	調　整	色　調
186	円筒埴輪	Ⅲ区				5	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/3)
187	円筒埴輪	Ⅲ区		M字形	16		内面＝ナデ	灰白(Hue5Y7/2)　内面＝浅黄(Hue2,5Y7/3)
188	円筒埴輪	Ⅲ区		低い台形	19	7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい橙(Hue5YR7/4)　断面＝灰(Hue7,5Y6/1)
189	円筒埴輪	Ⅲ区		M字形	14		外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/4)
190	円筒埴輪	SD02		低い丸形	20	6	外面＝板ハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue10YR6/3)
191	円筒埴輪	SD03		台形	32		内面＝ナデ	外＝浅黄橙(Hue10YR6/3)　内＝にぶい黄橙(Hue10YR7/3)
192	円筒埴輪	SD03		M字形	29	4	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰(Hue5Y6/1)
193	円筒埴輪	SD03		丸形	33		内面＝ナデ	淡黄(Hue2,5Y8/3)
194	円筒埴輪	SD03		M字形	35		内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/3)
195	円筒埴輪	Ⅱ・Ⅲ区		低い台形	25	6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR8/4)
196	円筒埴輪	Ⅱ・Ⅲ区		M字形	20	6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR7/3)
197	円筒埴輪	Ⅲ区		M字形	21	6	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい橙(Hue7,5YR7/4)
198	円筒埴輪	Ⅲ区		M字形		8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい橙(Hue5YR7/4)
199	円筒埴輪	Ⅱ・Ⅲ区		M字形	24	7	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	浅黄橙(Hue7,5YR7/4)
200	円筒埴輪	Ⅱ・Ⅲ区		M字形	21	8	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	灰黄褐(Hue10YR6/2)
201	円筒埴輪	Ⅱ・Ⅲ区				6	外面＝斜めハケ・板ナデ　内面＝ナデ	にぶい橙(Hue10YR7/3)
202	円筒埴輪			M字形	35	3	外面＝斜めハケ　内面＝ナデ	にぶい橙(Hue5YR7/3)

第6章　調査のまとめ

(1)普賢寺古墳の墳丘規模と墳形

今回検出された周濠の一部は、現代の墓地の北側にそれを取り巻くようにして位置しており、この墓地が古墳の墳丘であることが判明した。そこで、墳丘の現状の把握、復元を目的として墓地の地形実測を行った。本節ではその成果として、墳丘並びにその周囲の現状を記し周濠の復元を試みたい。

まず、墳丘の現状であるが、強い削平を受けており、ほぼ平坦になっている。現地表面の標高は約3mであり、墓地内での比高差はわずかに0.4mである。現状の高さは西から東にかけて高くなっていき、御堂の位置する所が最高所となっている。

墳丘の規模は、検出された周濠の状況からは墓地よりも若干広くなるようで、墓地の西側の公園に一部及んでいる。そして、周濠を含めた全容は、古墳を円墳として復元すると、公園の東1/3になると考えられ

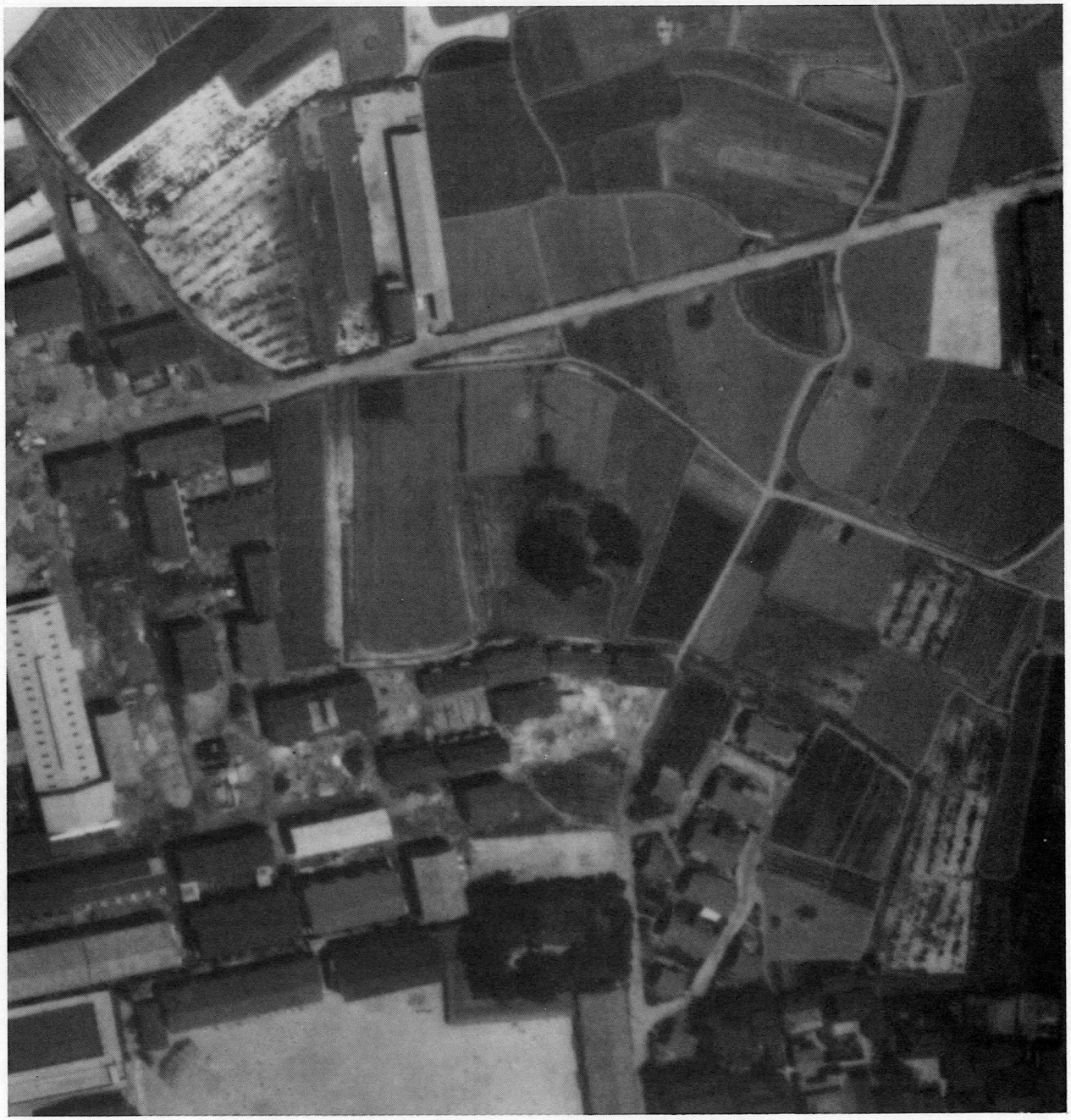


図38　昭和36年　撮影　航空写真

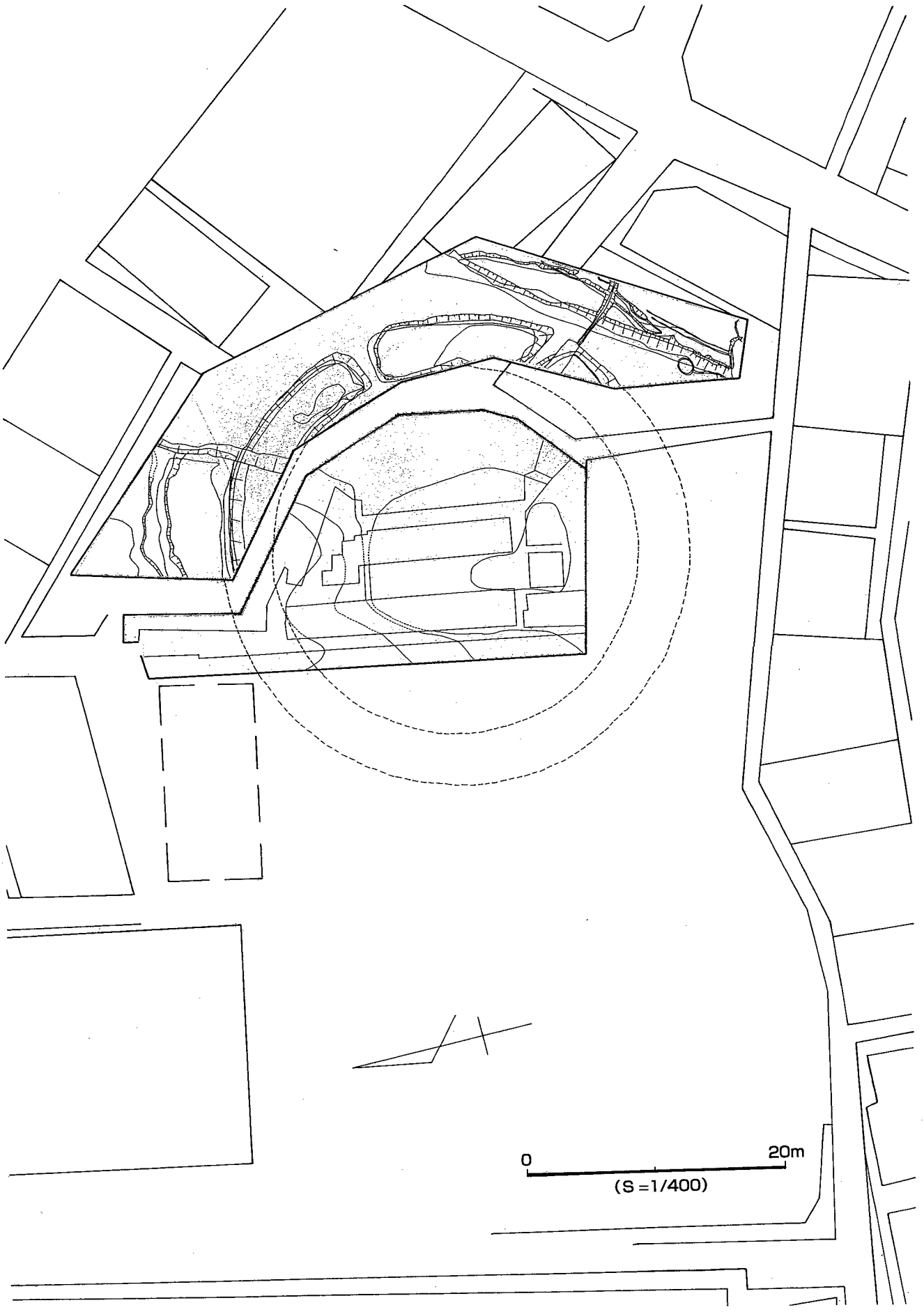


図39　普賢寺古墳　復元平面図

る。また、現状の地形との関連をみると、最高所である御堂付近が、復元図の中では墳丘の中心には位置しておらず大きく南側にずれている。このことから、墳丘は現状で著しく改変されている可能性が高く、立体的に元来の古墳を推測することは不可能である。ただ、興味深いことは、なぜ御堂の位置が最高所にあるのかということである。その可能性として、埋葬施設の存在が考えられないだろうか。この場所に埋葬施設があったため、周囲と比べてやや高く残され、かつ御堂がその上に建てられることになった可能性を推測したい。仮にそうであるとするならば、この古墳の埋葬施設は、1.墳丘の中心からずれている 2.墳丘の低い地点に位置していることなどから横穴式石室の可能性がある。

次に以上に挙げた発掘調査、現状地形による復元に加え、さらに昭和 36 年に撮影された航空写真からの検討を試みる。図 38 がその写真である。写真を見ると、現在はほとんど平坦地の墳丘には樹木が茂り、こんもりとした高まりになっている。この高まりの範囲は墓地よりも若干広く、昭和 36 年当時は古墳の形状を今よりはとどめていたようである。ただ、それでもなお、復元した古墳の規模に比較すると、墳丘形態はいびつになっており、墳丘の崩壊を看取することができる。

(2)周濠に付設する陸橋について

本節では周濠に付設していた陸橋について性格を検討する。

今回の調査では 2 箇所、地山を削り出した陸橋を確認した。その想定される機能として、周濠の①土提(間仕切)、②通路が考えられる。

①に関しては、前期古墳においてしばしば指摘されており、古墳の立地地形との関係で論じられている。つまり、この時期の墳丘が丘陵斜面を利用しているため、周濠内の水を留めるために土提を設けたとする解釈である(註 1)。しかし、近年の調査により、平地に立地し、上記の問題がないにも関わらず間仕切の行なわれている例も認められ、問題点も指摘されている。

一方、②はA：墳丘内に至るための墓道、B：古墳造営時の作業道が可能性として指摘できる。A に関しては、四隅の切れた方形周溝墓等について都出比呂志氏等の指摘があり、四隅の掘り残しを周溝墓の中央の埋葬部に至る「道」としている(註 2)。B については群馬県中二子古墳の例で指摘されている。

さて、当例が上記の可能性のいずれに当たるかであるが、上記の可能性に対して、それを分ける明確な区分の根拠はなく、また、それぞれが重複して機能している可能性も十分に考えられる。従って、陸橋の諸例を分類し、当例の位置付けを行なうことはせず、当例そのものの観察から、上であげた機能の可能性について考えたい。

まず、①であるが、当古墳の立地する地山はほとんど高低差が認められないことから、水平面の維持を意図した土提(間仕切り)の可能性はない。次に②であるが、確実に B のみの可能性を指摘するには、墳丘完成後の墓道としての可能性を否定しなければならない。それには陸橋上面のレベルと周濠の両岸のレベルに差を認めることが必要である。つまり、墳丘造営途中の一時期のみに機能した道(周濠の掘り残し)であれば、最終的な古墳完成後には機能を失い、高まりとして周濠内にわずかに残される可能性がある。当例では 2 ヶ所の陸橋は両者ともに上面は後の時代の改変が想定でき、陸橋上面のレベルと周濠両岸とのレベル差の有無は判断できない。従って、レベル差のあった可能性は否定されるものではないが B の断定はできない。一方、A の断定はその論理的な根拠が指摘できない。よって、当例は A、B の両方が可能性として残されており、大きな意味(A、B を含めた意味)での通路としての性格を想定する。

(註1)一瀬和夫 1992「1周濠」『古墳時代の研究』7

(註2)都出比呂氏 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3

(3)遺物出土状況からみた円筒埴輪列残存の可能性について

口縁部を含む円筒埴輪上部が多く出土していることが周濠内における円筒埴輪の出土状況の大きな特徴であり(出土状況を記録した円筒埴輪46点中31点)、同時に底部が認められる例の少ないことも(7点、その内完形品6点)特徴の1つとして指摘できる。また、底部の少なさは、周濠以外から出土した円筒埴輪においても指摘できる。

こうした状況から、調査対象外であった墳丘裾において、円筒埴輪列が良好な状態で残されている可能性を指摘したい。 (松田)

(4)人物埴輪について

本節では第1に、出土した人物埴輪がどのような性格の人物を表現したものであるか、表現、形態を取りあげることによって検討し、第2に、他の一般的な人物埴輪にはあまり認められない、当例の特徴的なありかたに焦点を当て、この人物埴輪の特異性を指摘することを目的とする。

まず、第1点目であるが、盾を持った人をかたどったもの(以下では盾持人と記す)である可能性を考え、以下でその根拠をあげる。

① 耳の形態が外側に向かって張り出した扁平な隅丸方形状をなし、その中央部には耳孔が刳り抜きによって表現されている。若松良一氏はこのような横に張り出す扁平な耳(若松氏のいうAタイプ)をもつタイプを、正面性を強調した盾持人の特徴として紹介しており(註1)、当例もこのタイプの1例に位置付けることが可能である。またより焦点を絞り、このタイプの内、耳孔を正面から穿孔している例も含めれば、伝大阪府出土盾持人、東大阪市神並遺跡出土盾持人2体、埼玉県稲荷山古墳出土盾持人、埼玉県前の山古墳出土盾持人、千葉県殿塚古墳出土人物埴輪等があり、大阪府には類例の多いことが認められ、この地域において盾持人の耳の表現に共通した規範があったことが指摘できる。

② 顔面の表現として、目の周り、鼻の上、顎に沈線による入墨の表現が認められる(註2)。このように人物の顔面に入墨と思われるヘラ描きを施すのは、盾持人に限定できないものの、盾持人にしばしば認められる特徴である。

③ 頭は頂部を筒抜けにし、側面から見ると頭頂部は斜めに切り取った様に傾斜している。こうした例として奈良県天理市小墓古墳出土盾持人、千葉県竜角寺古墳出土盾持人等が認められる。

④ 人物埴輪の左目部分はSD03上層から盾形埴輪に伴なって出土した。この盾形埴輪は人物埴輪と胎土が同じであり、同一個体である可能性が高い。

以上、①②③の盾持人の特徴、④の出土状況から盾持人の可能性を指摘した。以下では視点を変え、盾持人その他の人物埴輪に多く認められる共通性、規範に対するものとして、当例がもつ個性に注目したい。

まず第1として、入墨の表現方法がある。当例において入墨は、目の周りから耳孔を包み込むように施されているが、特異性は目の周りのみならず、耳孔も包み込むようにして表現されている点にある。目の周りのみに入墨を施す例は東北・関東地方?出土品、京都府稲荷山古墳、埼玉県塚の越1号墳、三重県常光坊谷4号墳等の人物埴輪に認められ、また文献資料では、『古事記』の「神武記」に「其の大久米命の黥ける利目を見て、奇しと思ひて…」とあり目の周りに入墨を施していた者の存在が伝えられている(註2)。一方、目の周

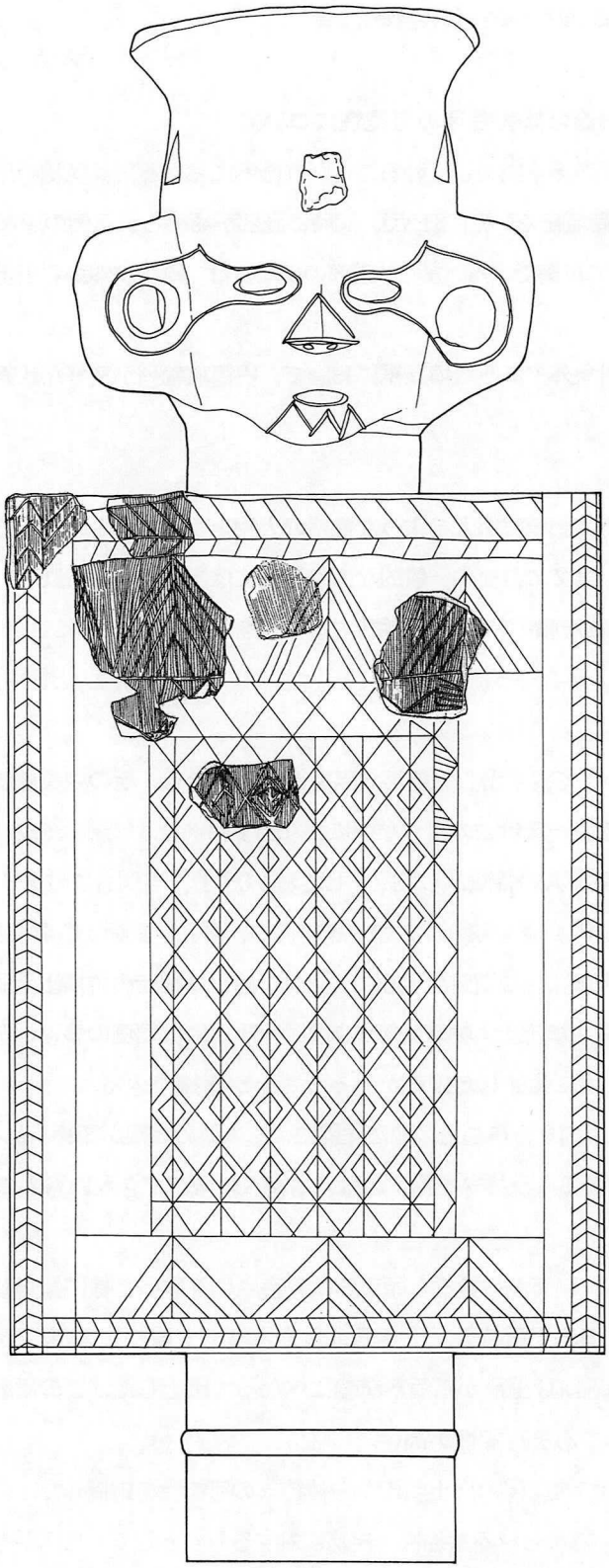


図40　盾持人埴輪　復元図

りのみならず、さらに広い範囲に入墨が続いている例として、大阪府大園遺跡出土の人物埴輪があり、目の周りから顎にかけて入墨が施されている。しかし、当例のように目の周りから耳にかけて施されている例は現状では見当たらない。

第2点目としては、鼻の上に施している入墨の形状が正三角形であることが特異性として指摘できる。鼻の上に入墨を施している例としては鼻上翼形が知られているが、市毛勲氏による分類のC類「二等辺三角形」が当例に最も近い(註3)。しかしながら、C型が三角形の底辺を除く二辺を内弯させ、あくまでも鼻上翼形の一類型として考えられるのに対して、当例は各辺が直線的な正三角形であることから、鼻上翼形ではくくれないものと理解したい。つまり、当例を翼形の変形として捉えるのではなく、三角形の形状を積極的に評価したい。翼形と三角形の意味合いが明確でない現状で両者を違った意味をもつ表現として区別することは問題もあろうが、そのように考えるのには他に意図するところがあるからである。以下では視点を変えてその問題に触れたいと思う。

第3点目の特異性として、頭部に施されている三角形の透かしがある。透かしの総数は額から上部の欠損のため断定はできないものの、現状では5ヶ所、頭の周りに認められる。このような例は他に認められないが、注目される点は前述した鼻にある三角形状の入墨との関係である。つまり、この両者が刳り抜きかヘラ描きの差はあっても形態、大きさで類似する点である。このことは両者に表現内容の違いはあるとして、一方で同じ意味をもつ記号としての可能性を指摘でき、そこに悪霊を防禦する意味を推測したい。例えば、九州の壁画古墳で認められる連続三角形文は外界からの守護に意味があることが指摘されており、また、埼玉県酒巻14号墳、千葉県山倉1号墳出土人物埴輪では頭部に三角形の前立てが認められ、それに忌み、魔除けの意味のあることが指摘されている(註4)。このようなことから、外界からの守護を役目とした盾持人において、上記の意味を持つ三角形の透かし及び入墨を施すことは十分に意味のあることと理解し、鼻上の入墨に関しては、翼形としての変形ではなく、三角形の意味を積極的に評価した次第である。

第4点目に形態的な特異性として、顔面が正面からみて左右対称ではなく、顔面の中心が正面に向かって右側にやや片寄っている点が指摘できる。同様に、透かしの高さも左右で異なっており、右側の方がやや高い。こうした特徴は東大阪市神並遺跡出土の盾持人においても認められ、顔面の中心は、正面に向かって右側に片寄っている。

以上、当例の特異性を示した。こうした特異性は現状で類例が少なく、他との比較からその意味、傾向を検討するには十分でない。また、こうした特異な表現が誰によって、どのような意図をもって要求されたのかは今後考えていかなければならない問題であろう。とにかく、現状では当例が珍しい属性を多く持つ興味深い埴輪であることを主張し、今後の比較資料の増加に期待したいと思う。

(松田)

(註1)若松良一 1992「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9

(註2)顎の部分に関しては顔面造作としての髭の表現である可能性がある。

(註3)吉岡郁夫 1996 『いれずみ(文身)の人類学』

(註4)市毛勲 1992「人物埴輪顔面のヘラガキについて」『考古学雑誌』77-4

例えば、大阪府大賀世3号墳出土の人物埴輪がある。

(5)円筒埴輪について

普賢寺古墳から出土した円筒埴輪は、製作技法、形態等でいくつかのタイプを見出すことができる。ここではそのタイプの内、類型化のできるものについて具体的な特徴を示すことを目的とする。

まず、第1の類型資料(以下ではA類と呼称する。)として1(数字は図版番号)～4、5、33等がある。特徴としては、①タガの断面形が台形をなす。また、タガの貼り付け方法としては、粘土紐を横ナデによって密着させている。②内面の口縁下部に横ハケが認められ、その上端は横ナデ、下端はナデ、指押さえによってハケは一部消されている。③第2段から下の段は縦ハケを施し、第1段のみ斜めハケを施している。ハケの条数は1cmあたり8から9である。

第2の類型資料(以下ではB類と呼称する)としては8～10、11等があり、当古墳から出土した円筒埴輪の主流をなしている。特徴としては、①タガの断面形がM字形をなし、その貼り付け方法としては、タガ上部に左上がりの圧痕、擦痕が一定間隔で認められることから、断続的なナデによって粘土紐を密着させていると思われる。②内面調整にハケの痕は認められず、ナデ、指押さえで調整されている。③最下段から最上段まで、すべて斜めハケ目を施している。ハケ目は成形の後、一気に施すのではなく、各小工程ごとに施している。

第3の類型資料(以下ではC類と呼称する)は17、18である。特徴としてはB型とほぼ同じであるが、相違点として、①全長が30cm代と小型である点が指摘できる。そして、成形は小工程に分けず②底部から口縁部まで一気に仕上げている。そして、③ハケ調整は、全ての成形が終了し底部調整を行なった後、一気に左斜め方向に施している。従ってA･B類が外面最下段のハケが低部調整によって一部消えているのに対し、C類は最下段までハケ調整は消えずに明瞭である。また、ハケの施す方向は左斜め上に向かってすべて同方向に施されている。

以上、A型からC型の3類型に分類した。次にそれぞれの類型に認められる個々の製作技法の特徴について比較を行い、類型間の関わりについて触れたい。

まず、タガの貼り付け方法はB型とC型が同じでA型と相違する。両者の違いはA型が粘土紐を横ナデによって貼りつけているのに対して、B型、C型が断続的なナデによって貼り付けている点にある。後者に関して中島和彦氏はタガの剥落防止のために採用された技法と考えており、第Ⅳ期以前の技法からの変革として捉えている(註1)。一方、A類に認められる貼り付け技法は第Ⅳ期以前からの伝統的な方法であり、タガの貼り付きの状態はあまり良くなく、例えば、4は所々に剥落が認められる。また、このタイプの多くはタガの接合痕が直線として認められ、密着度の悪さをそこに見ることができる。

次に外面ハケの施し方について検討する。まず、製作工程の違いとしてA類、B類とC類に分かれ、A類、B類は数回の小工程の存在が認められるのに対して、C類は一気に成形をしている。そして、こうした違いが外面ハケの方向の違いとして認められる。例えば、A類は最上段のみが斜めハケでその下部が全て縦ハケであり、ハケの方向に変化が認められるが、これが粘土紐の輪積み⇒外面ハケ⇒タガ貼り付けの小工程が数回行なわれた結果であると考えられる。一方、B類、C類は全ての段が斜めハケで一定方向であるが、B類はタガの接合時に施されたナデの後に斜めハケを施しており小工程を確認できる。C類は前述したように、一気に成形が行なわれており、B類のような特徴は認められない。このような小工程について中島和彦氏は、先に取り上げたタガの貼り付けの変革同様、タガの剥落防止を意図したものであるとしている(註2)。ただ、タガの貼り付け技法において伝統的な手法を用いているAタイプにおいてもこのような小工程が認め

られることから、むしろ、こうした小工程の存在に対して、伝統的な製作方法として捉えた方が良いと思われる。そう考えると、一気に製作を行う C 類を新しい変革として捉えることが可能である。ただ、法量の差による技法の選択(例えば小さな円筒埴輪のみ一気に製作する方法が採られていたとする解釈)があった可能性はあり、実際、C 類である 2 例はともに小型である。

最後にまとめとして、以上の形態、製作技法の類型化の意味を検討する。ここで想定することは時期差と工人差である。まず、時期差を検討する。前では類型間の検討において変革と伝統という言葉を使用してきた。この変革と伝統に対して A 類から C 類への時間的な流れの中で捉えることは仮説としては成り立つ。しかしながら、同時期の異なる埴輪工人集団による生産で、各埴輪工人が採用した製作技法の伝統性の違いが表現された可能性、円筒埴輪の法量の差による技法の相違である可能性(特に C 類とその他の類型との関係はその可能性が高い)があり単純に時期差として捉えることはできない。次に工人差を検討する。工人差として考えられる可能性としては、工人集団の差、工人集団内の工人差が想定される。工人集団内の工人差としては複数の工人集団が一つに統合された際に認められるものであろう。普賢寺古墳の場合は両者が可能性として想定され、断定はできない。

上記の問題をさらに追求するためには、今後、広範囲の地域を対象として技法の類似性と差異を求め、また、時期的な流れに基づき工人の編成の問題にまで踏み込んで検討していく必要がある。そして、埴輪生産遺跡の検出、把握を今後の調査に期待する。

(松田)

(註 1)鐘方正樹・中島和彦・安井宣也 1992「菅原東埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』

(註 2) 同註 1

(6)普賢寺古墳の位置付け

普賢古墳の築造年代は、円筒埴輪、須恵器から、5 世紀後半から 6 世紀前半に想定できる。この時期、当古墳との関係において注目されるのが、守口市佐太東町所在の梶遺跡である(註 1)。

梶遺跡は当古墳の北 1 ㎞に位置し、当古墳と同時期である 5 世紀末から 6 世紀前半にかけての古墳が 3 基見つかっている(註 2)。その内、墳形、墳丘規模の判明しているのが梶 2 号墳であり、墳形は帆立貝式の前方後円墳で墳丘規模は全長 29.7m(推定)、後円部径 21.6m(推定)、前方部長さ 7.6m、周溝幅約 4.4m を測る。普賢寺古墳と比較すると、直径は普賢寺古墳が約 29m(推定)であり、梶 2 号墳の後円部径より規模が大きい。一方、周濠幅は普賢寺古墳が約 4m であり、ほぼ同じである。墳形は、普賢寺古墳の全景がわからないため比較できないが、両古墳が帆立貝式の前方後円墳として共通する可能性があることを指摘する。

以上のように、墳形こそ不明なものの、墳丘規模においては普賢寺古墳の方が大きいことが指摘できる。次に出土遺物から比較を行う。

梶 2 号墳では普賢寺古墳と同様、埴輪、須恵器の出土が認められる。まず、埴輪は人物埴輪 2 点、馬形埴輪 1 点、猪形埴輪 2 点、牛形埴輪 1 点、犬形埴輪 1 点、鳥形埴輪 1 点、家形埴輪 1 点、蓋形埴輪 1 点、大刀形埴輪 1 点、そして円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。普賢寺古墳、梶 2 号墳とも全面発掘をしていないため単純に比較はできないが、両古墳に共通する埴輪として人物埴輪(人物の性格は異なる)、蓋形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪がある。一方、相違点としては梶 2 号墳で多く認められる動物形埴輪が普賢寺古墳においては未確認であることが指摘できる。

円筒埴輪は梶 2 号において須恵質、土師質が認められ、また、その割合としては土師質が圧倒的に多い点で普賢寺古墳と類似する。ただ、梶 2 号墳ではほとんど黄橙色に酸化焔焼成されているのに対して、普賢寺古墳においては灰白色に還元焔焼成されているものも多く、焼成方法にばらつきが認められる。一方、調整技法として、ハケ調整は梶 2 号墳においてすべての円筒埴輪に同じ原体の工具が使用されているのに対して普賢寺古墳においては 1cm 当たり 3 条のものから 14 条のものまでいくつかの種類に分かれている。また、タガの貼り付け方は、梶 2 号墳において統一性が認められるのに対して普賢寺古墳ではばらつきが認められる。以上のことから、すべての円筒埴輪に焼成、調整において統一性のある梶 2 号墳に対して、ばらつきのある普賢寺古墳の特徴が指摘できる。このような傾向は円筒埴輪と形象埴輪の関係においても指摘でき、梶 2 号墳が円筒埴輪、形象埴輪において胎土、焼成が共通しているのに対して、普賢寺古墳においては相違点が認められ、円筒埴輪と形象埴輪で製作場所が異なっていた可能性が考えられるのである。

次に、両古墳に認められる以上の違いに関して、その要因を検討する。想定されることとしては時期差がある。しかしながら、形態において梶 2 号墳が口縁部外面に突帯を貼り付けている例があるのに対して普賢寺古墳ではそれがほとんど認められないこと、器厚は梶 2 号墳の方が厚くしっかりと製作されている点等、先に指摘した焼成、調整技法と合わせても、両古墳の埴輪から系譜を追うことはできない。そこで、それを時期差とするよりはむしろ、埴輪供給システムの差として捉えたいと思う。つまり、両古墳では異なった埴輪工人によって製作が行なわれており、梶 2 号墳では形象埴輪、円筒埴輪が一括して一つの埴輪製作工人によって製作がなされているのに対して、普賢寺古墳においては形象埴輪と円筒埴輪のみならず、円筒埴輪そのものにおいても異なった複数の埴輪製作工人の手になっており、古墳へはその複数の埴輪製作地から供給されたものと考えたい。

それでは、築造時期の類似する両者で以上のような埴輪供給システムの差は何に起因するものであろうか。そこで、再び、円筒埴輪を取り上げ、タガの数、円筒埴輪の全長に注目する。まず、タガの数は梶 2 号墳が 4 段を中心として一部 5 段が認められるのに対して、普賢寺古墳は 3 段を中心とし、4 段が少量認められるものの、5 段は検出されていない。次に、全長は梶 2 号墳が 50cm 以上のものがあるのに対して、普賢寺古墳では最大のものでも 40cm 台であり、小規模なものでは 30cm 台のものが認められる。以上からは、タガの多さ、全長に関して梶 2 号墳の円筒埴輪の方が普賢寺古墳のより大きいことが指摘できる。こうした、タガの数、全長に対しては、古墳の規模に対応する可能性も指摘されている(註 3)が、この場合は、墳丘規模の差を階層差として考えるならば、円筒埴輪の大きさをそのまま階層差として示すことはできないのではなかろうか。

今回比較した両古墳は墳丘規模に差が認められ、階層差を指摘することができるものの、円筒埴輪の法量においては逆の結果を示していた。それが両古墳の埴輪供給システムの差となっているならば、当時の埴輪生産の内実を知る上で興味深いことである。

最後に梶遺跡、普賢寺古墳を含む地域についての位置付けを行いたい。梶遺跡の調査においては 3 基の古墳が密集して検出されており、笠原氏は周辺にも古墳が多数存在している可能性を推測している。また、梶遺跡の北東 400m には 6 世紀後半の古墳が発掘されている大庭北遺跡があり、大型の古墳群となる可能性が指摘されている(註 4)。そして、今回の調査では梶遺跡と墳丘規模、出土品において類似性の高い普賢寺古墳が検出された。以上から、これら 3 遺跡を含んだ広い範囲に古墳群が存在していた可能性があるとしたい。そして、この地域が淀川に関係した墓域であり、何かしらの政治的な役割があった可能性を考える

と共に、埴輪の供給に対して、川を利用した運行が行われていたことも同時に想定したい。

(松田)

(註 1)笠原勝彦 1991 『梶遺跡』守口市埋蔵文化財調査報告書　守口市教育委員会

(註 2)須恵器から判断する限り、梶遺跡よりも普賢寺古墳の方が年代的に古い資料が認められ、築造時期の上限では普賢寺古墳の方が古く位置付けられる。

(註 3)坂靖は古墳の墳形・規模に相応して埴輪の凸帯数・法量が決定されていることを指摘している。

坂靖 1988「埴輪の規格性」『考古学と技術』

(註 4)瀬川芳則他 1986『大庭北遺跡』大庭北遺跡発掘調査団

第7章　結　　語

平成 11 年 4 月と 8 月の 2 回、計 4 カ所の試掘調査をやりながら発掘調査を決定するに足る資料が満足に得られないまま、発掘調査に踏み切った。このまま発掘調査に入って十分な成果が得られるのか、正直なところ、不安でいっぱいであった。しかし、平成 12 年 2 月 7 日に発掘調査が始まって間もなく、埴輪が出土し始め、溝を古墳の周濠と確認した時、不安は瞬時に解消し、今度は門真市で初めて古墳を発見し、それを発掘できる感動に浸っていた。

普賢寺古墳は、標高 1.5m の低地に立地する 6 世紀初めに築造された古墳である。あいにく墳丘の大部分と周濠の約半分は、調査対象から外れたため、墳形、主体部、副葬品、埴輪の樹立状況等不明な部分が多いが、墳形は円墳としても、直径は約 30m で、北河内の低地部では相当な規模の古墳となった。

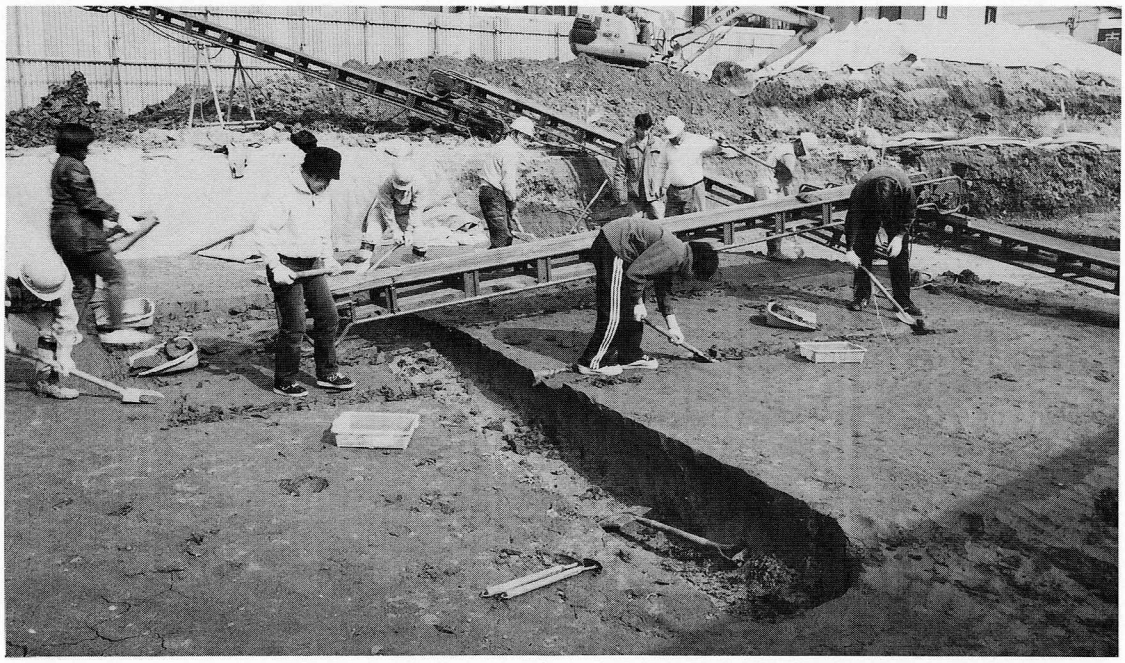
また、普賢寺古墳は、埴輪を伴う古墳としても注目され、円筒埴輪ばかりでなく、大阪府下では類例の少い盾持人埴輪の頭部が、良好な状態で出土している。しかし盾の部分の出土は少く、盾持人埴輪が実際に古墳のどの位置にあったのか不明であり、今後の課題である。また、他の形象埴輪についても出土が少く、今後の調査が待たれる。

普賢寺古墳の北約 1km のところに梶古墳群があり、普賢寺古墳も同じ古墳群とみてよい位置関係にある。しかし、梶 2 号墳は、普賢寺古墳とほぼ同時期の埴輪を伴う古墳であるが、埴輪の形態、胎土、焼成等が明らかに異なっており、埴輪の供給元は別と考えられる。そのため埴輪に限って言えば、普賢寺古墳は梶古墳群とは系譜の異なる古墳とみることができる。

今後は、普賢寺古墳の全容を明らかにするばかりではなく、本遺跡の他の調査でも埴輪等の出土をみているので、普賢寺古墳が古墳群を形成している可能性を含め、慎重に調査を進めていかなければならない。

(宇治原)

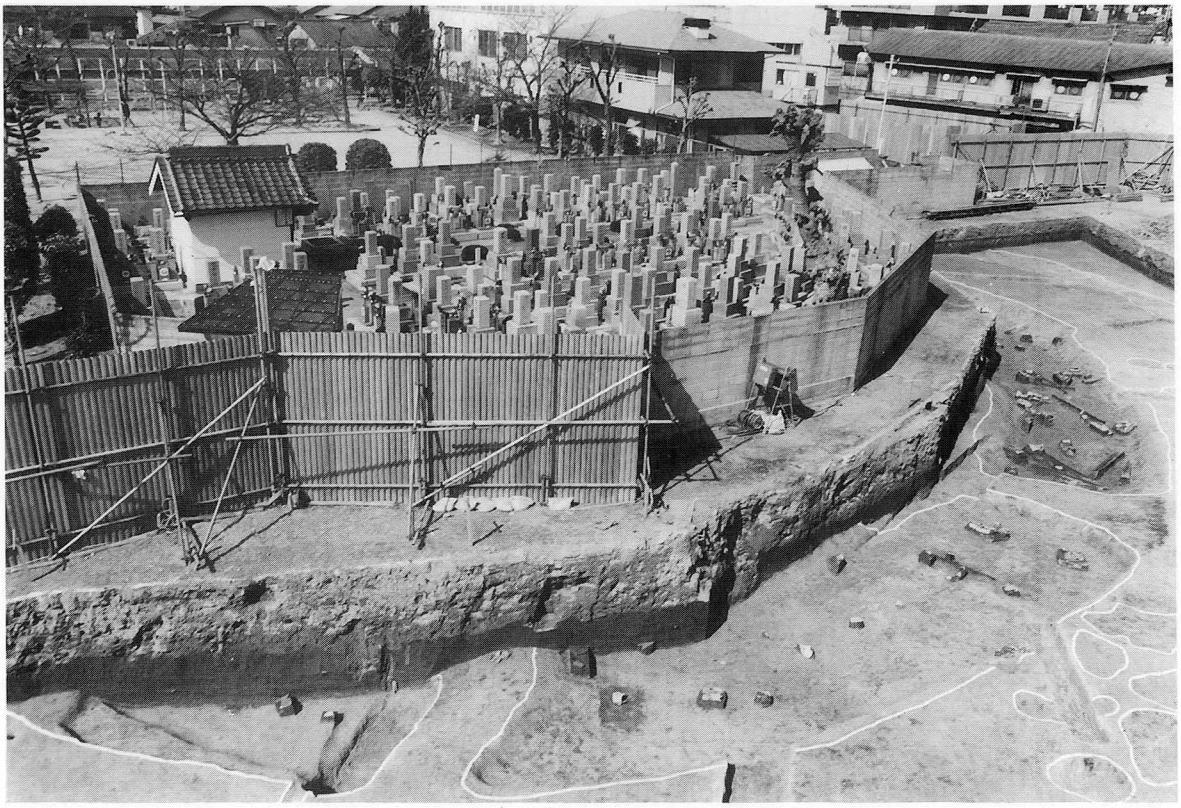
図　　版



図版1　周濠検出状況

普賢寺古墳　周濠検出状況（北東から）

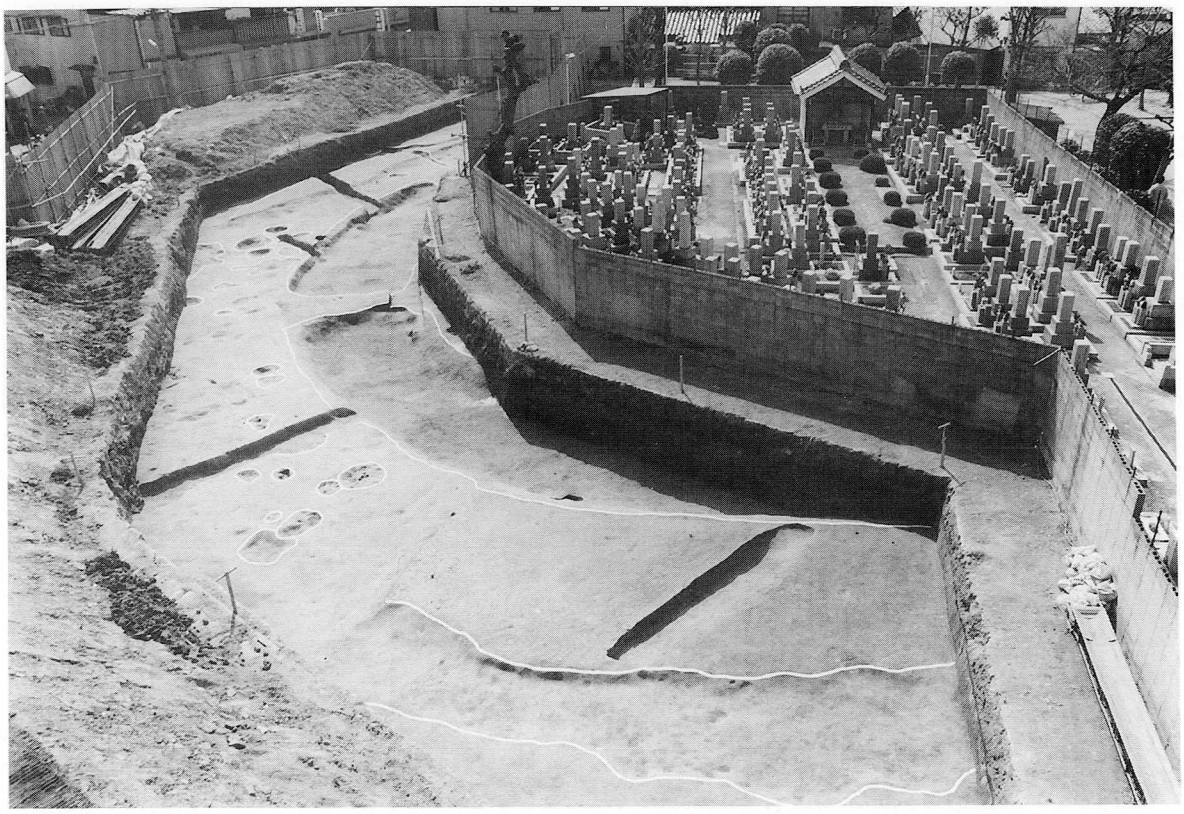
普賢寺古墳　周濠検出状況（南東から）



普賢寺古墳　全景遺物出土状況（南東から）

普賢寺古墳　全景遺物出土状況（北東から）

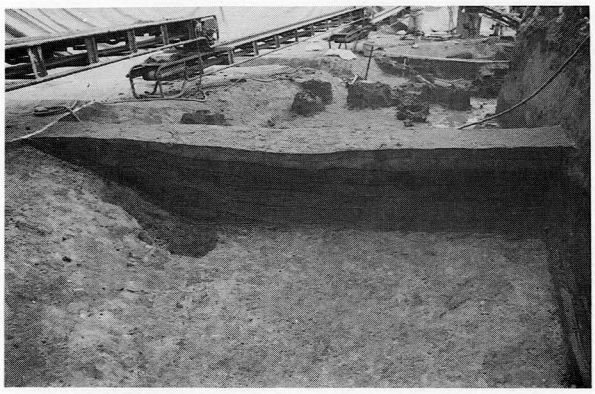
図版3　完掘状況・墳丘現状



普賢寺古墳　完掘状況（北から）

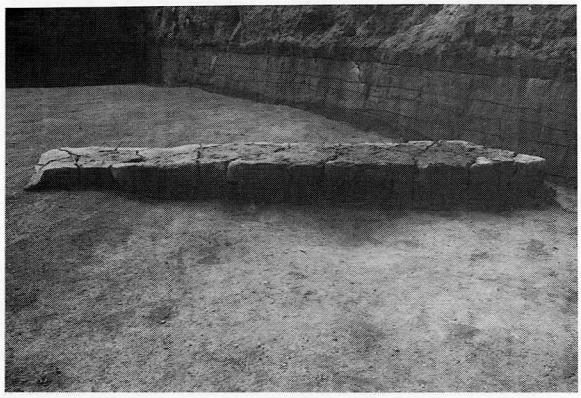
普賢寺古墳　（北から）

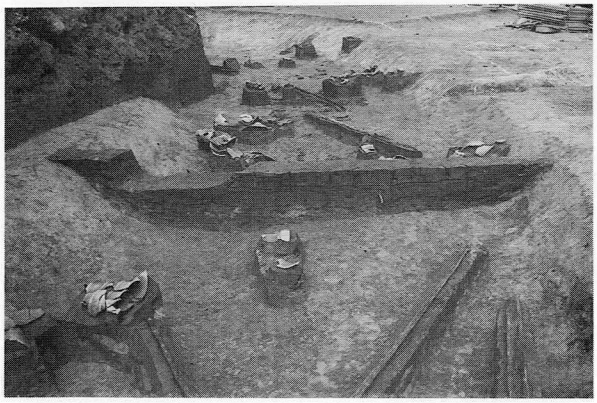
図版4 土層断面



◄ SDO 1
セクションベルト
1
(西から)

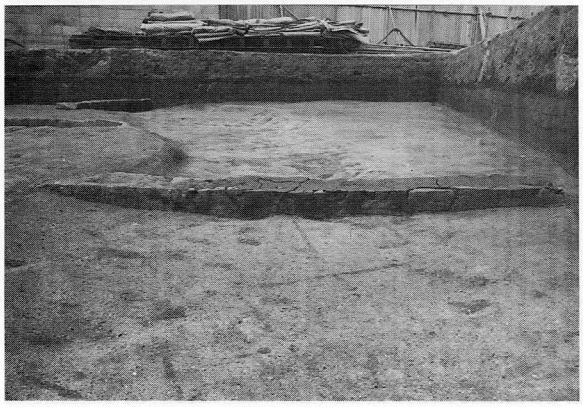
SDO 2 ►
セクションベルト
1
(北から)





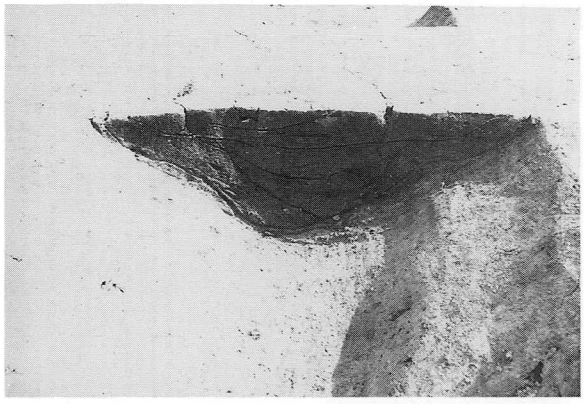
◄ SDO 1
セクションベルト
2
(東から)

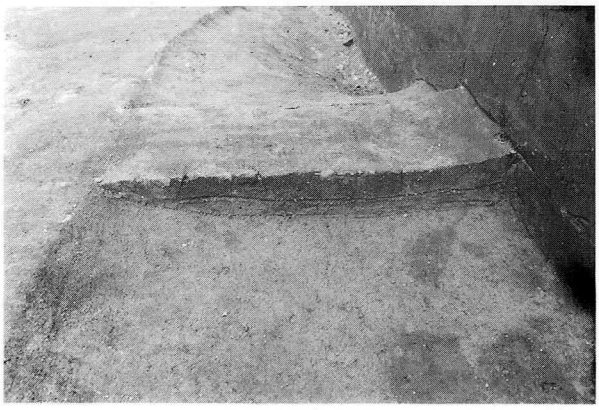
SDO 2 ►
セクションベルト
2
(東北から)



◄ SDO 1
セクションベルト
3
(北から)

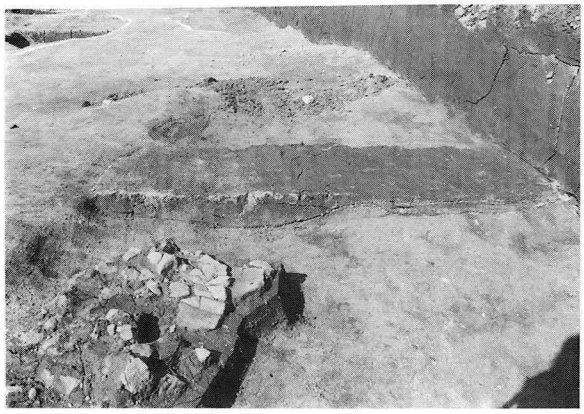
SDO 2 ►
セクションベルト
1
(西から)

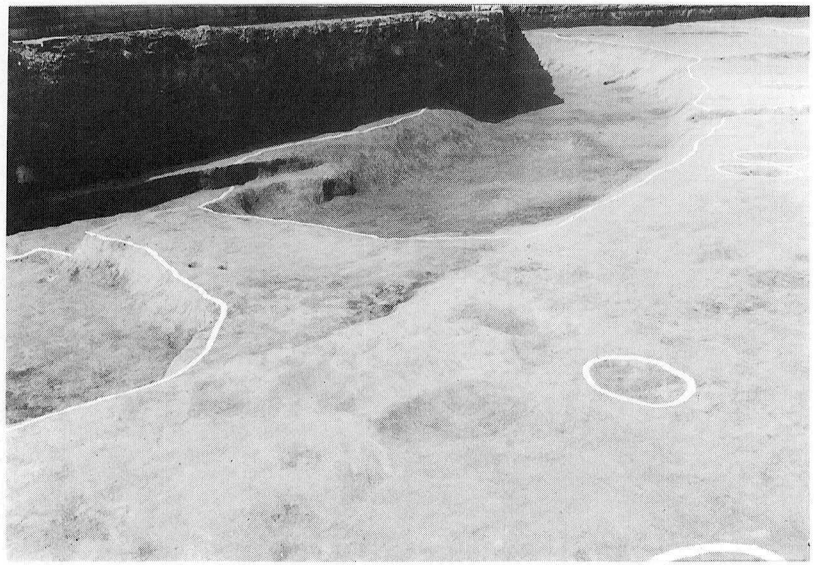




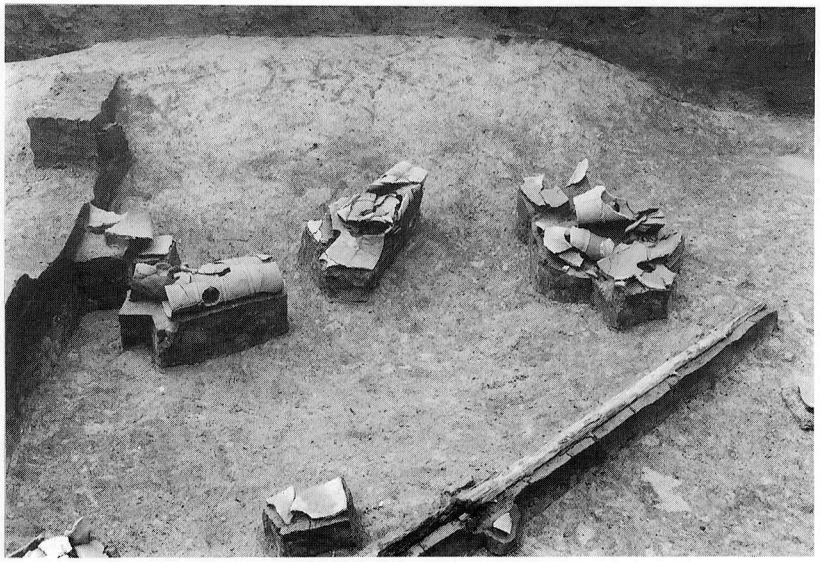
◄ SDO 1
セクションベルト
2
(西から)

SDO 2 ►
セクションベルト
4
(南から)

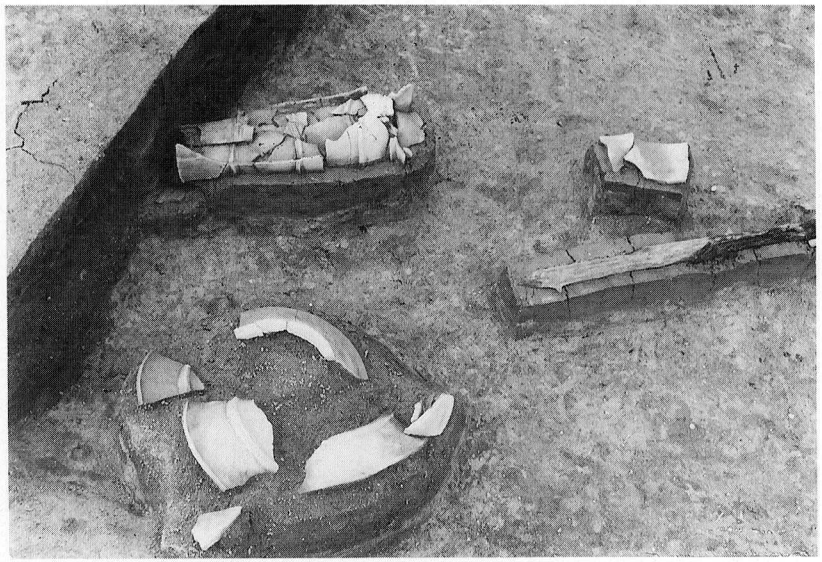




陸橋１　（南東から）

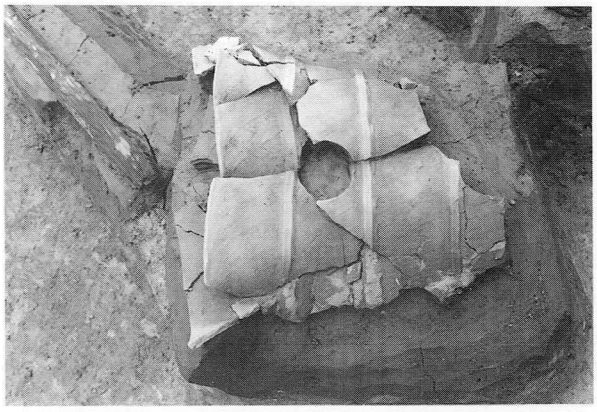


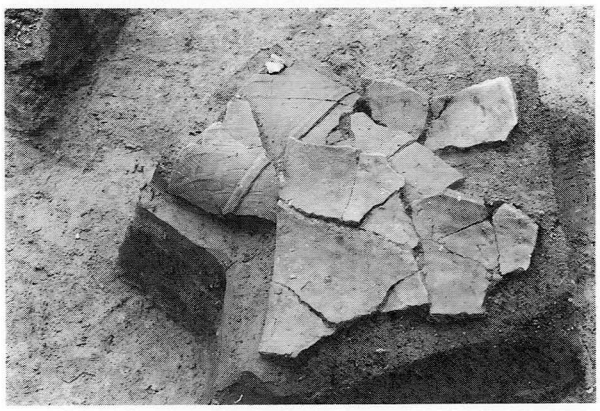
周濠内遺物出土状況（東から）

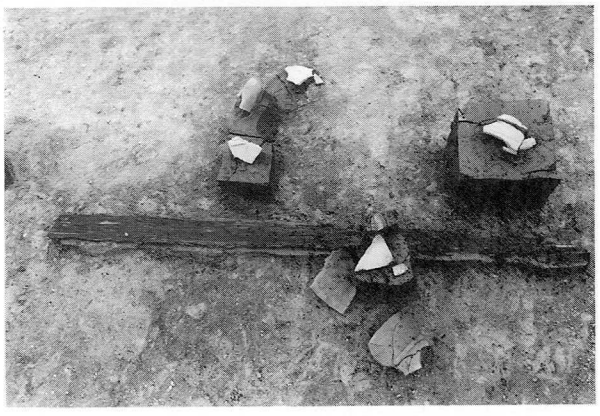


周濠内遺物出土状況（東から）

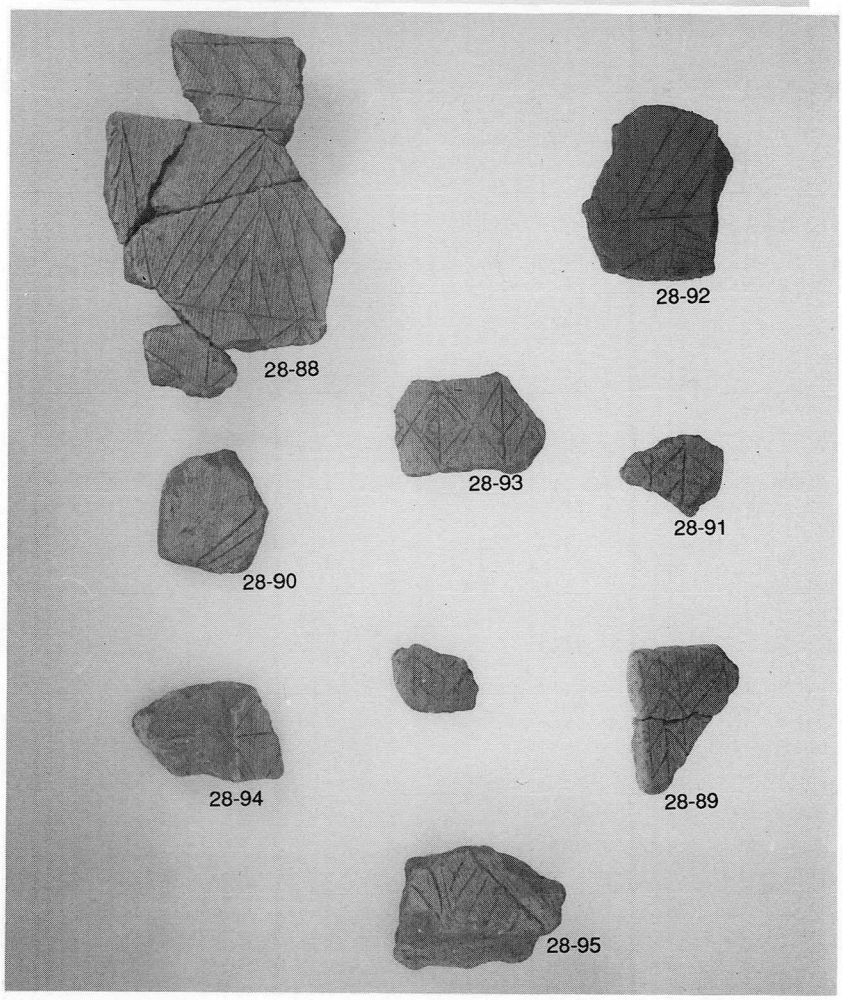
図版6 遺物出土状況（2）



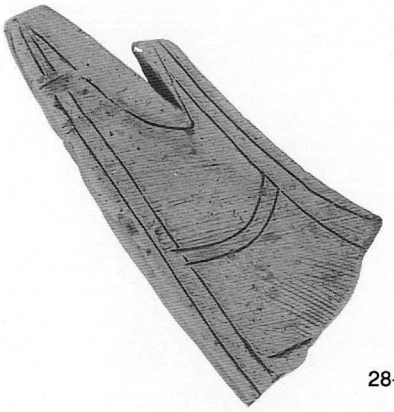




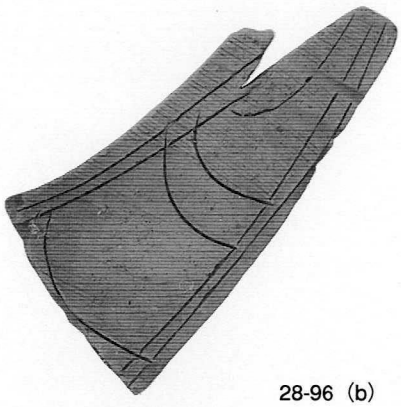
遺物出土状況



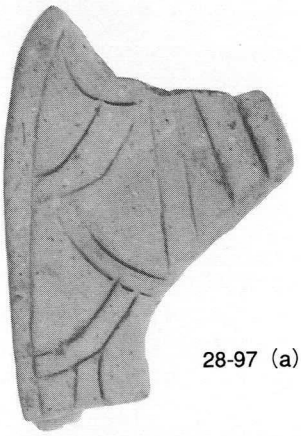
人物埴輪（盾持人と盾）



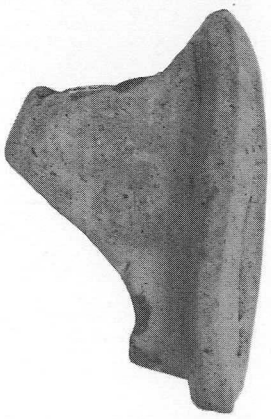
28-96（a）



28-96（b）

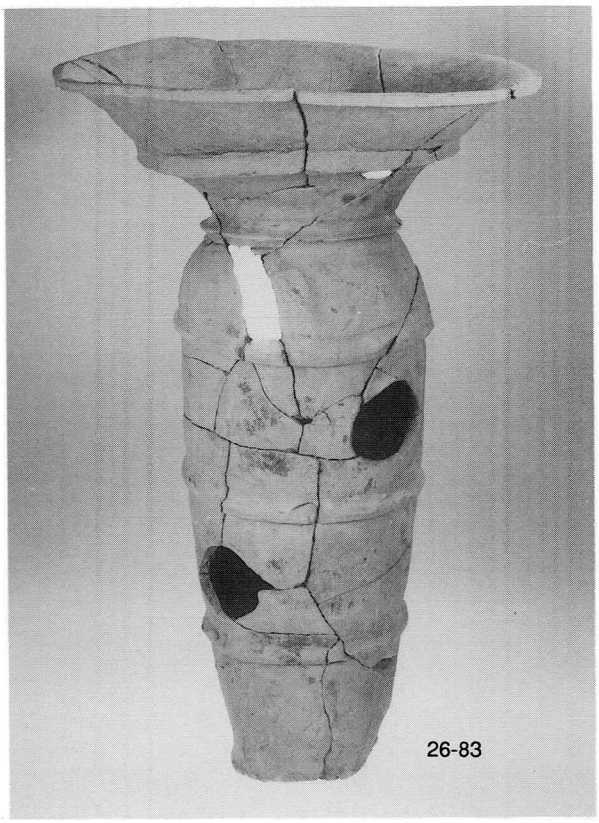


28-97（a）

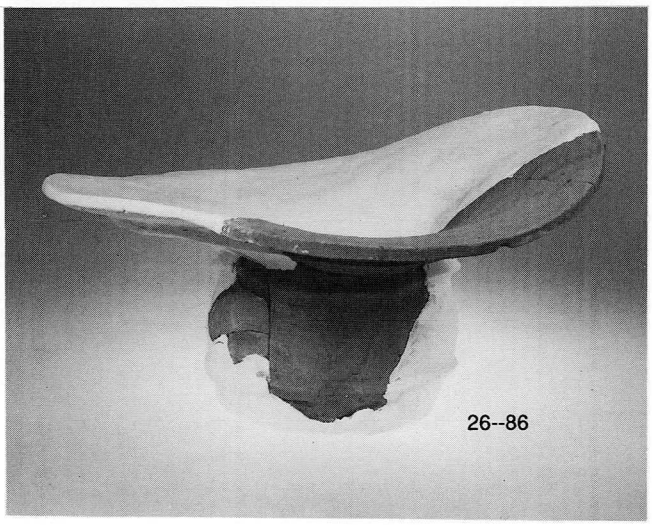


28-97（b）

蓋形埴輪



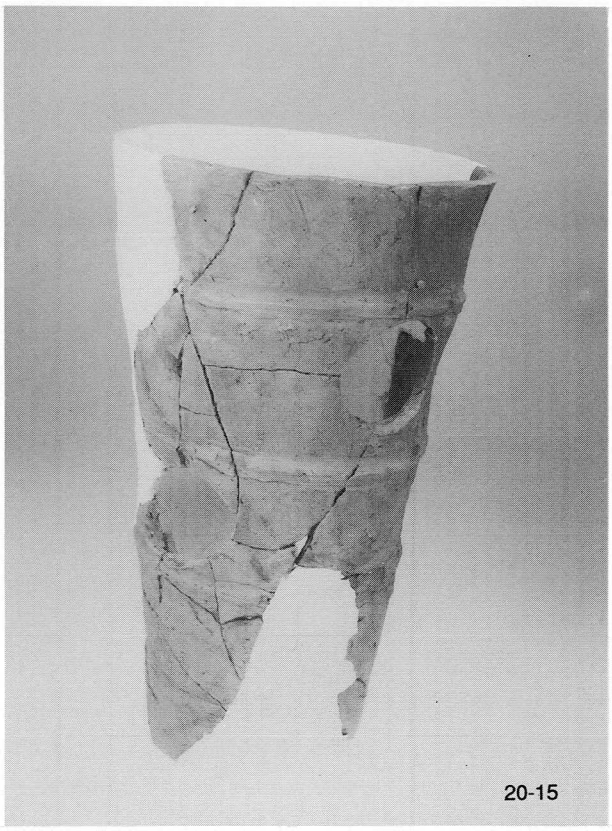
26-83

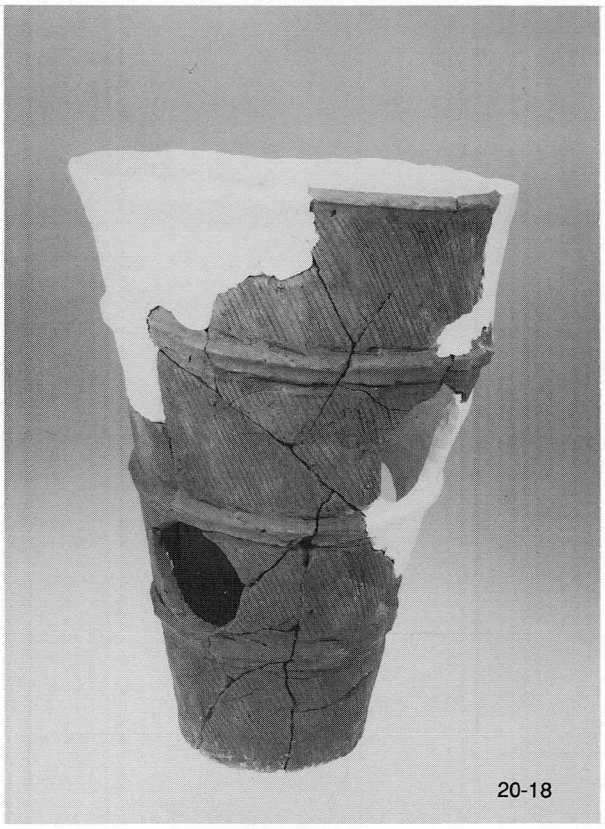


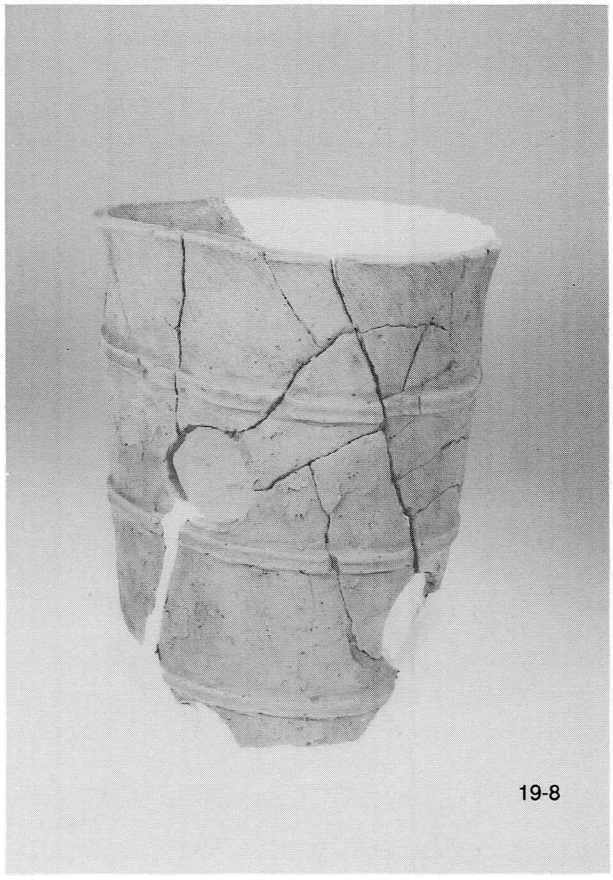
26--86

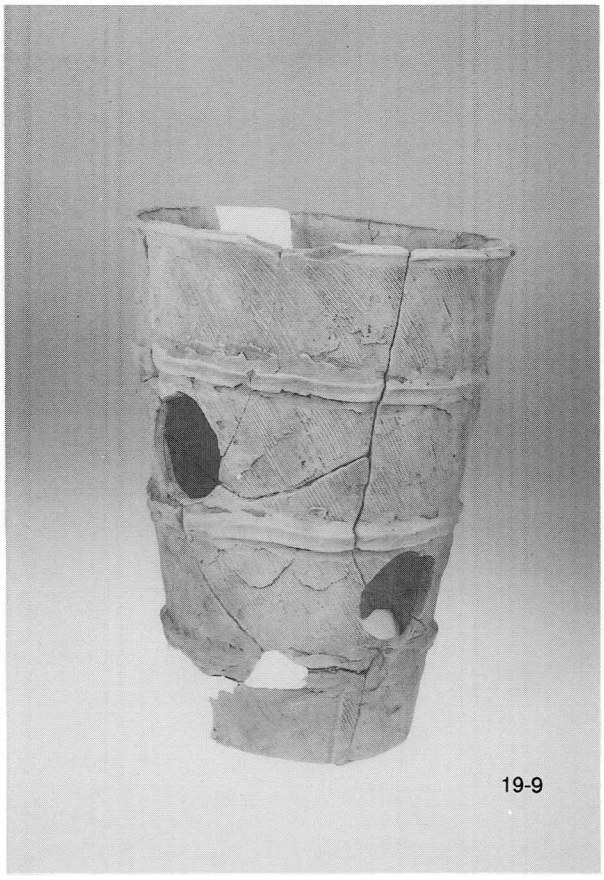
朝顔形埴輪

円筒埴輪（1）

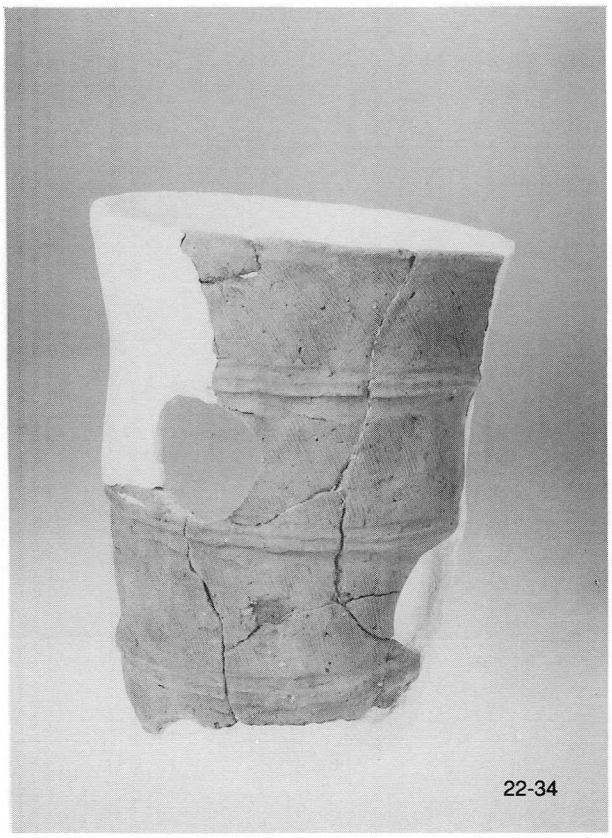


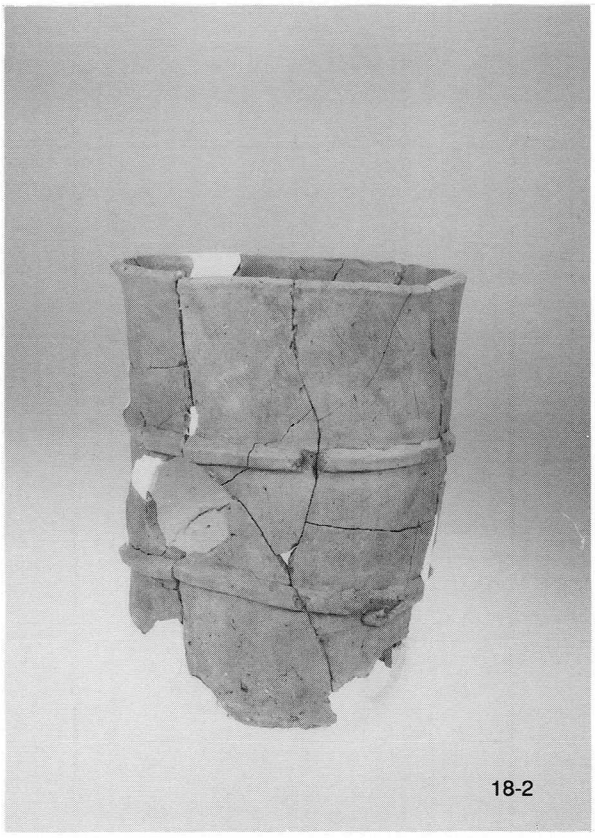


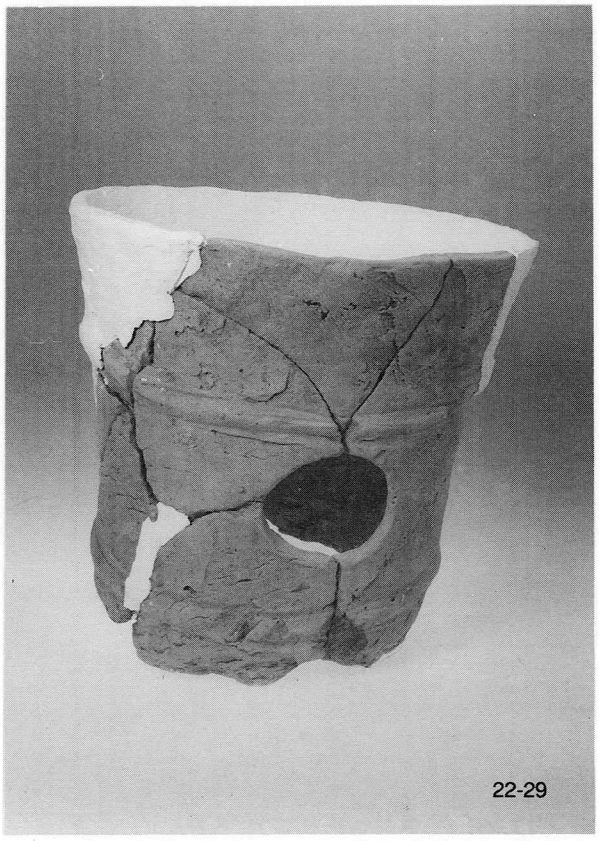




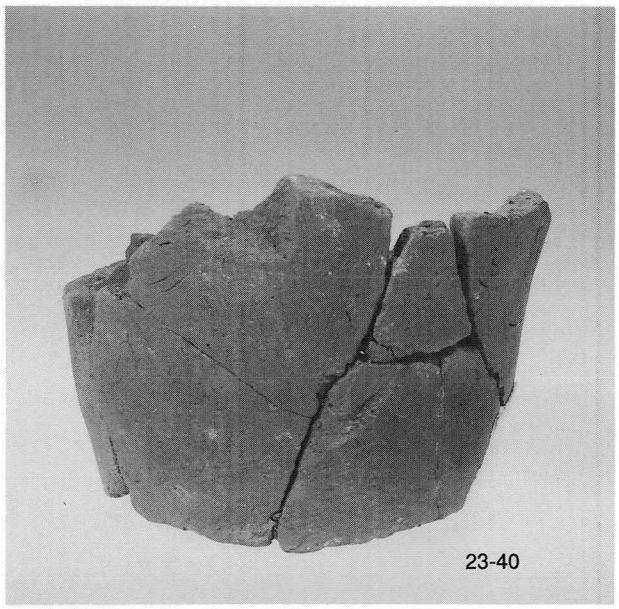
円筒埴輪（2）



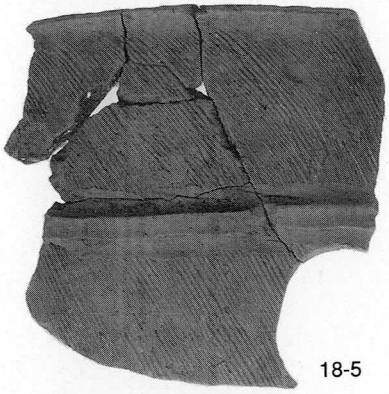


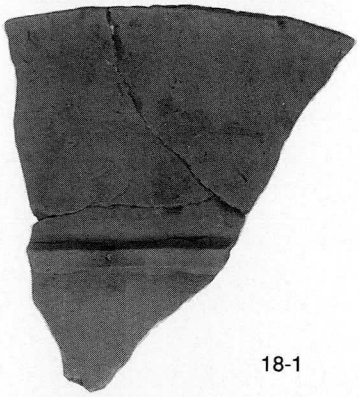


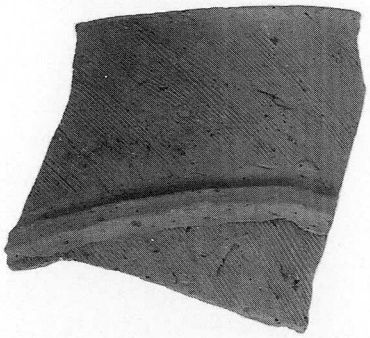
円筒埴輪（3）

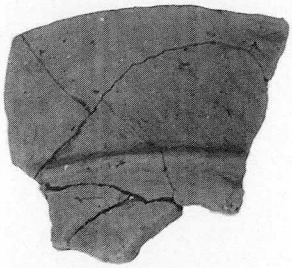


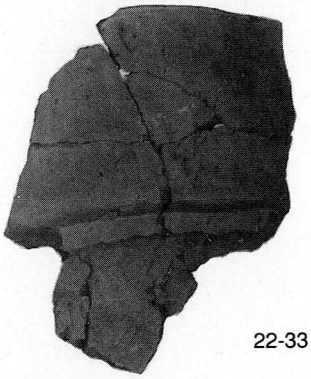
円筒埴輪（4）

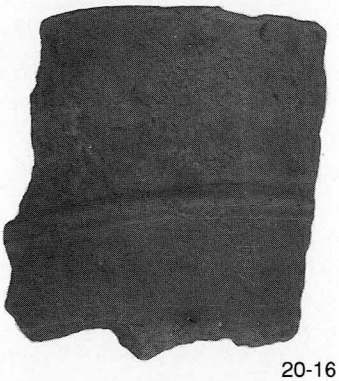

18-5


18-1

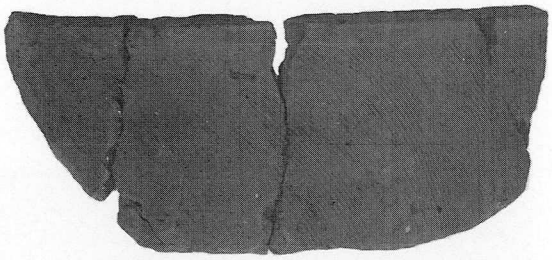

20-13

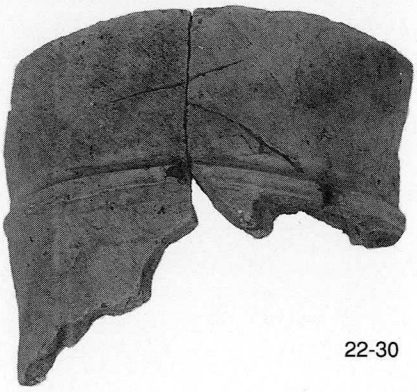

22-32

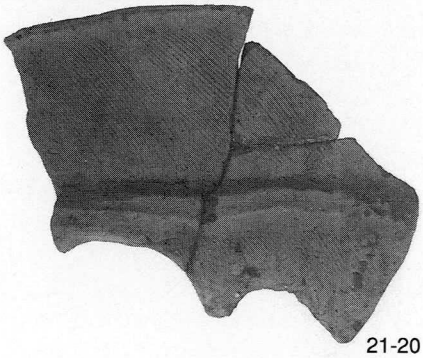

22-33


20-16

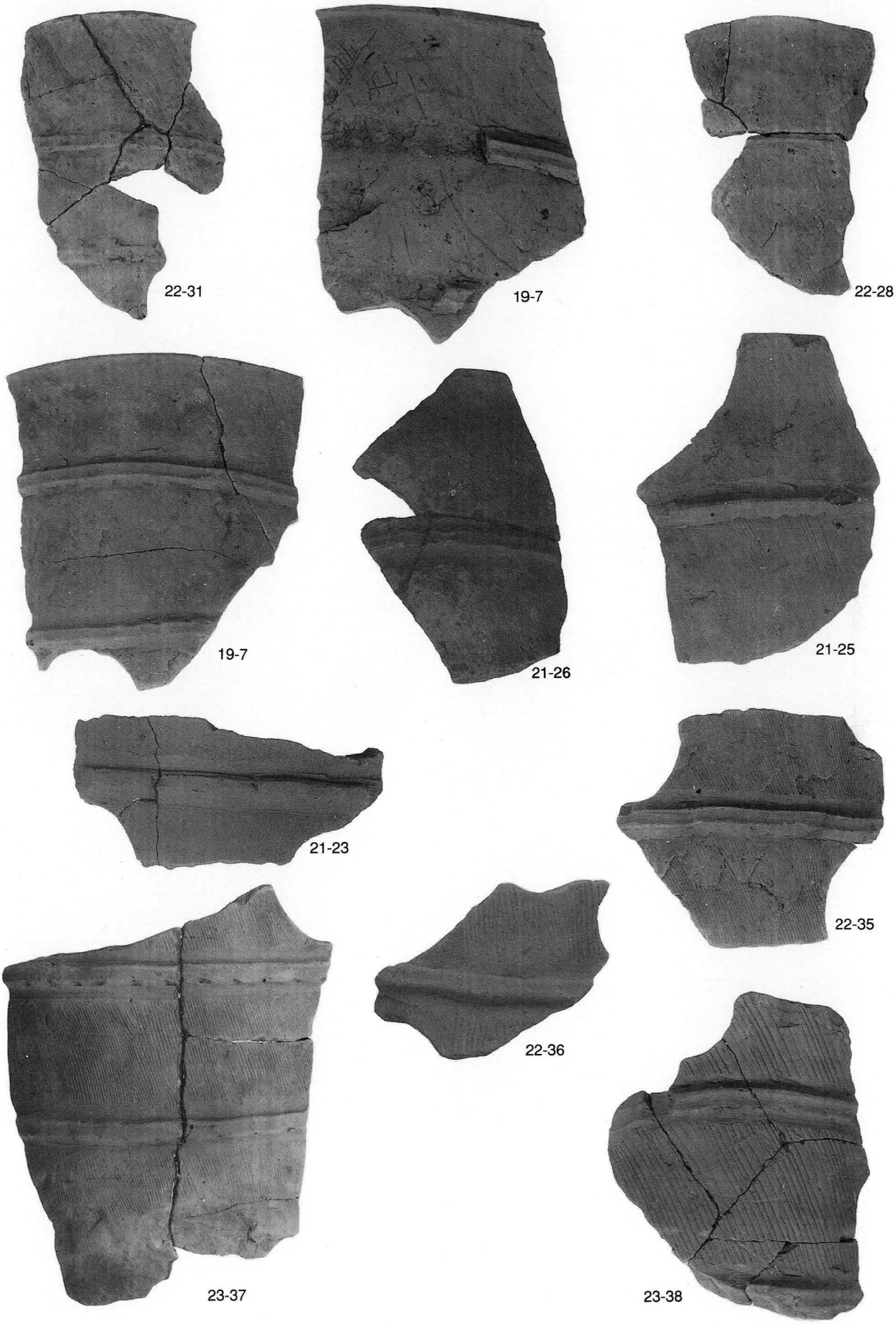
21-24


21-19


22-30

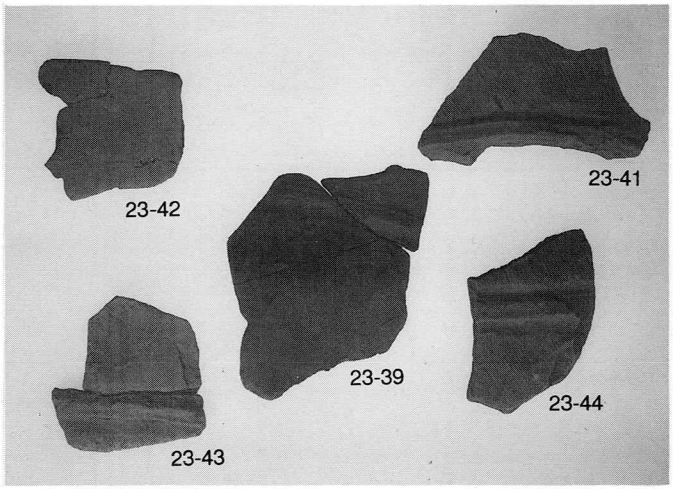

21-20

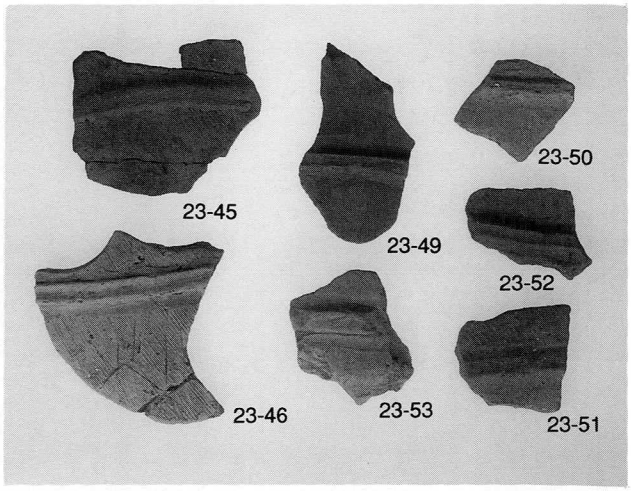
円筒埴輪（5）

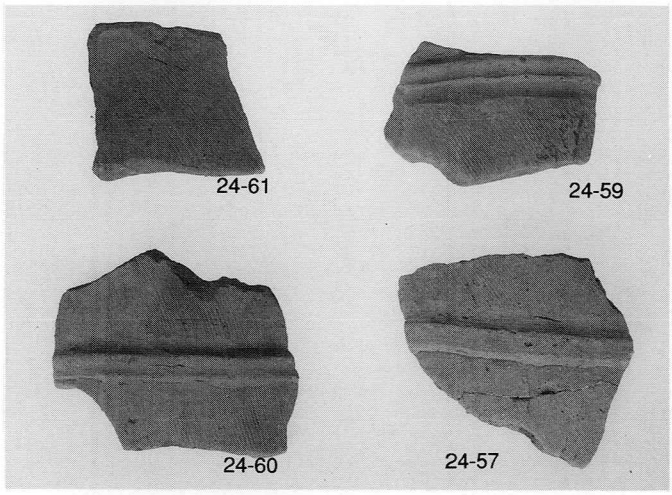


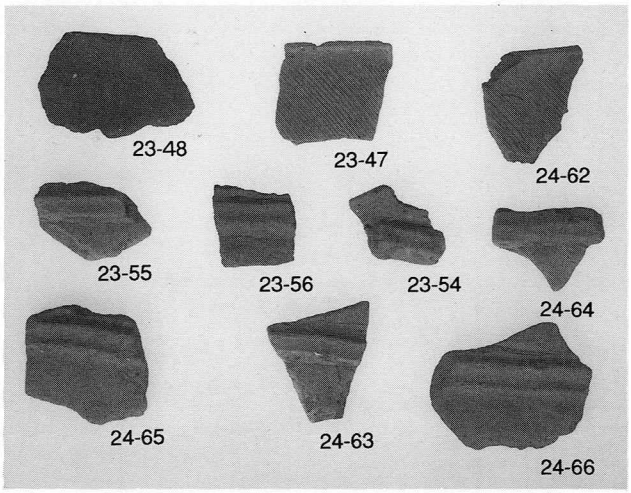
円筒埴輪（6）

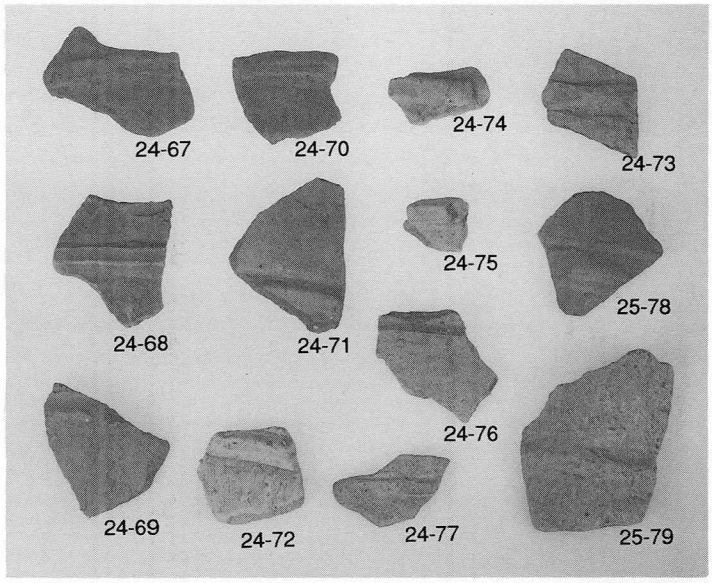
図版15 円筒埴輪（7）

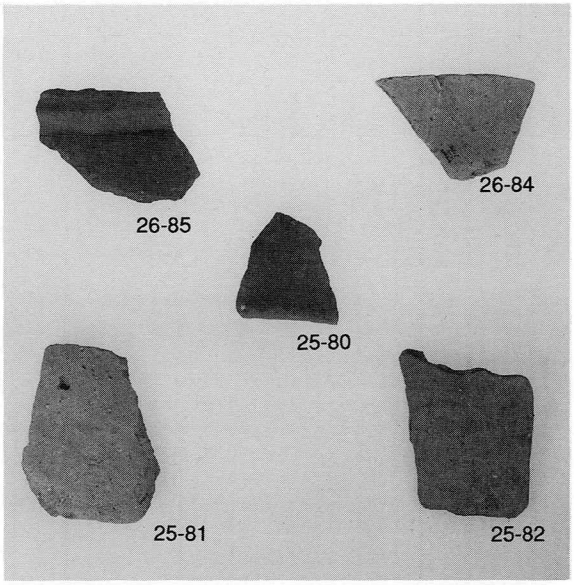




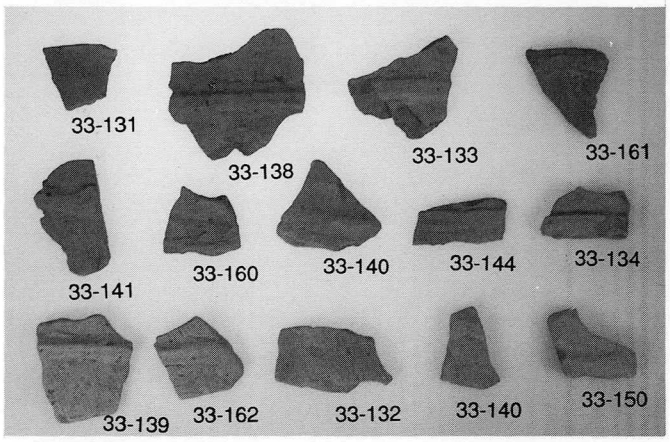


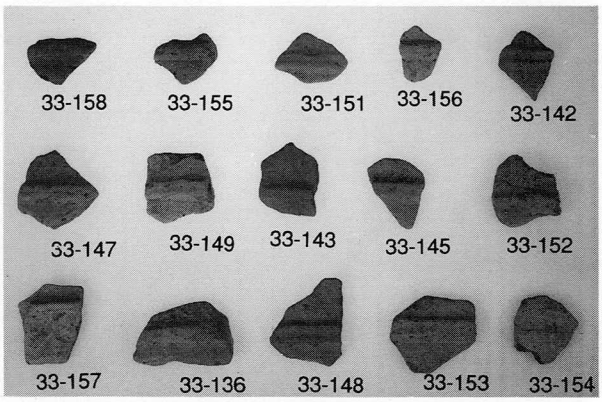


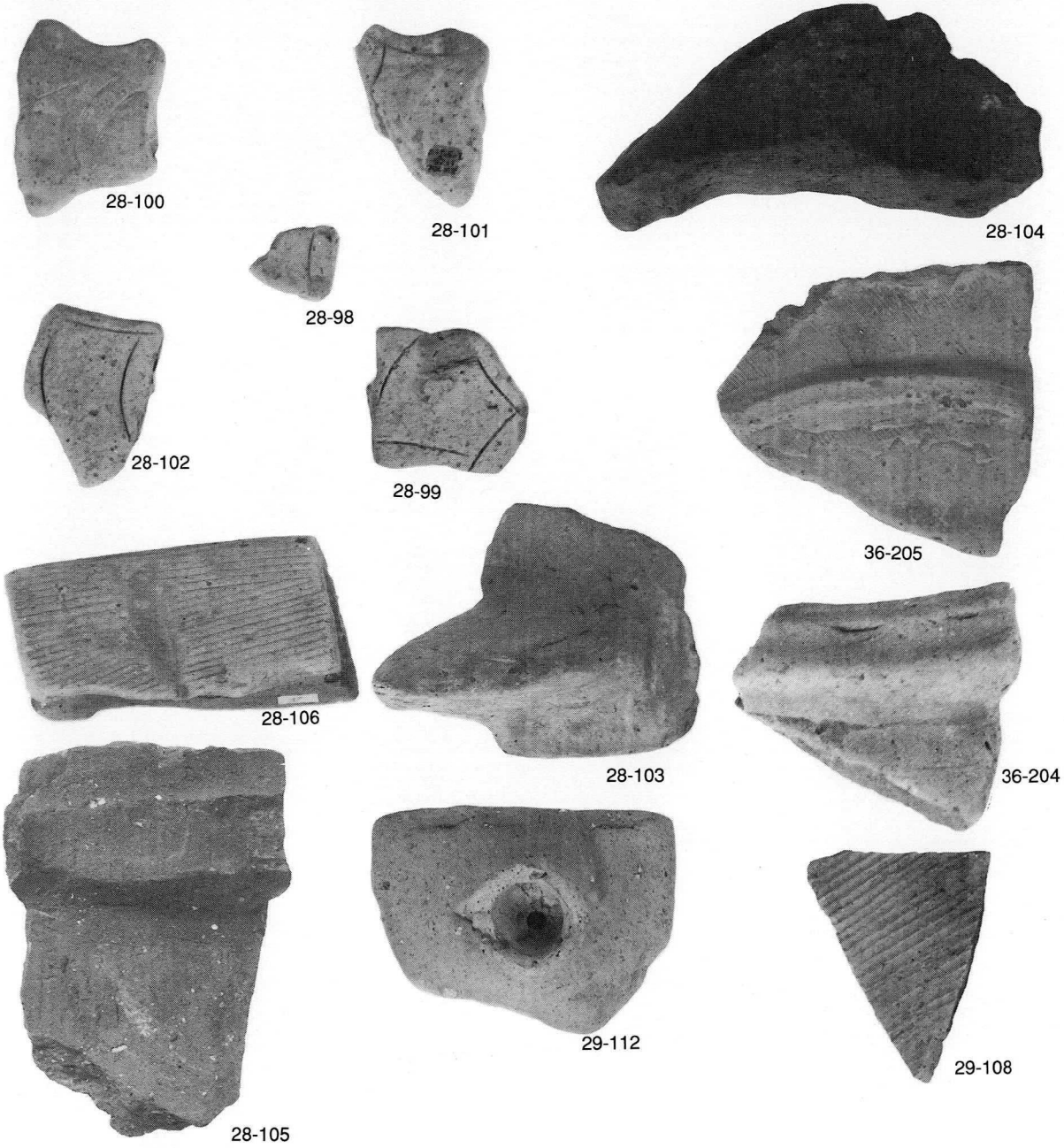




円筒埴輪（7）

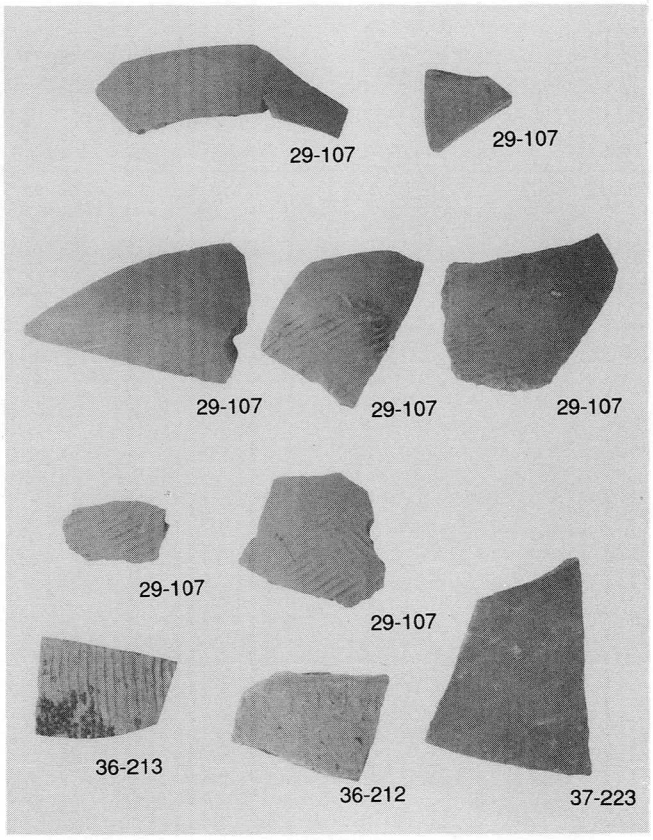


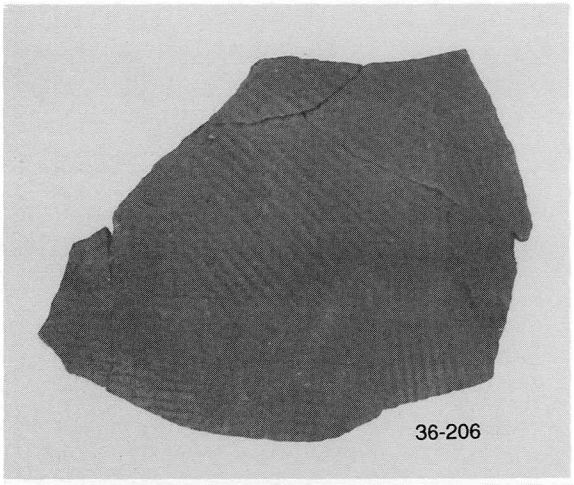


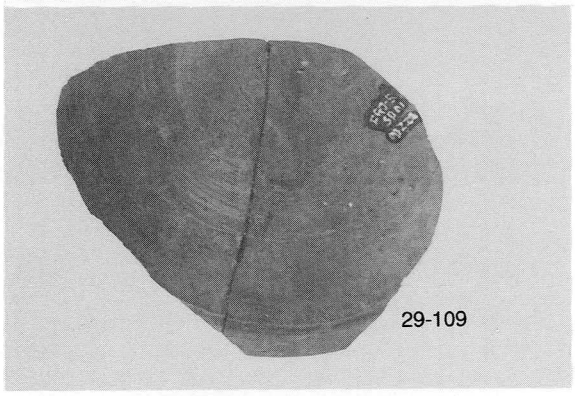


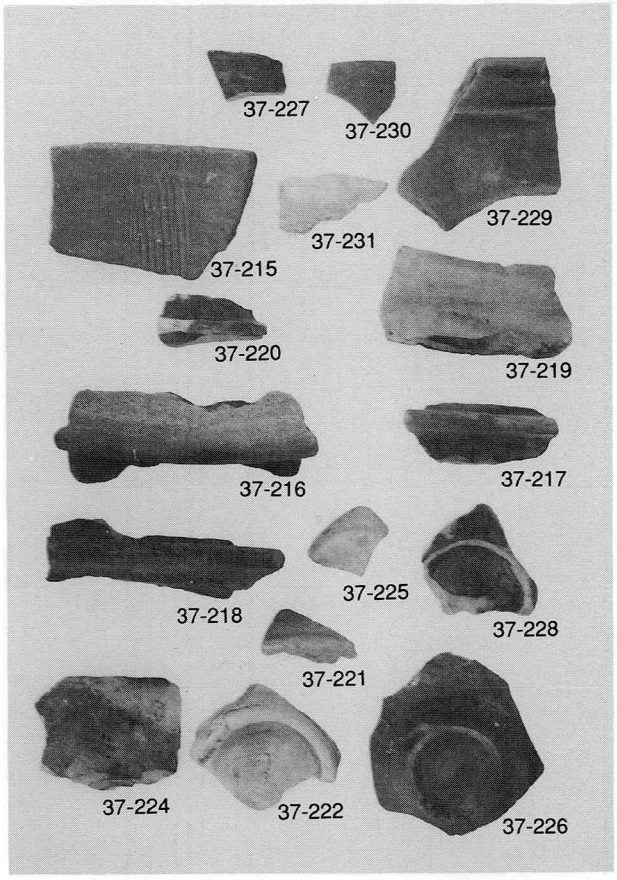
円筒埴輪（8）・形象埴輪　ほか

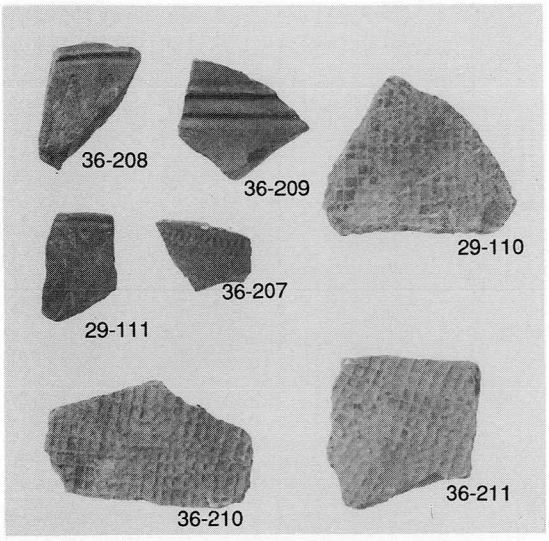
図版17 その他の遺物（2）

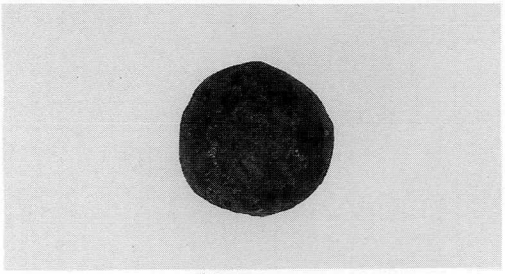






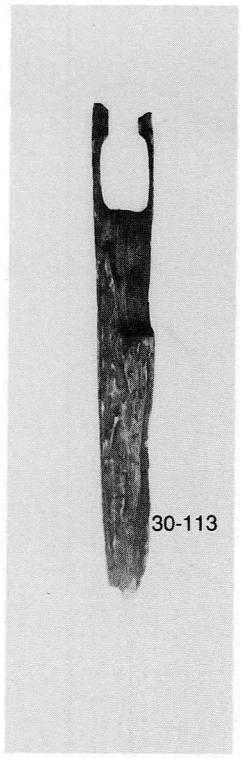


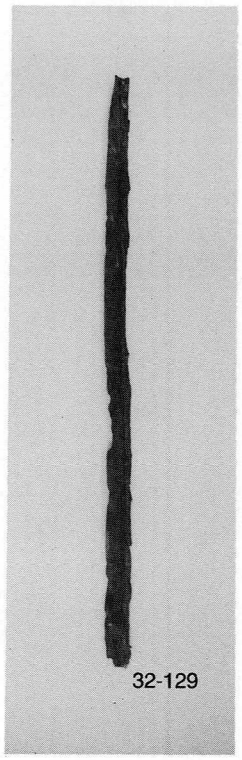


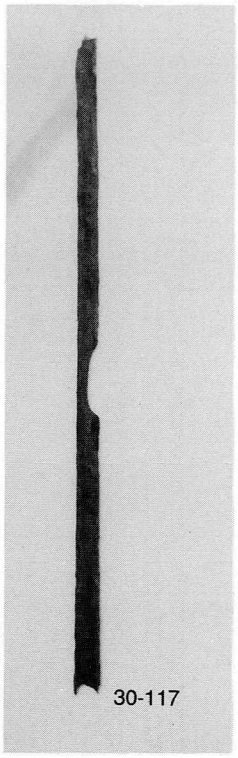


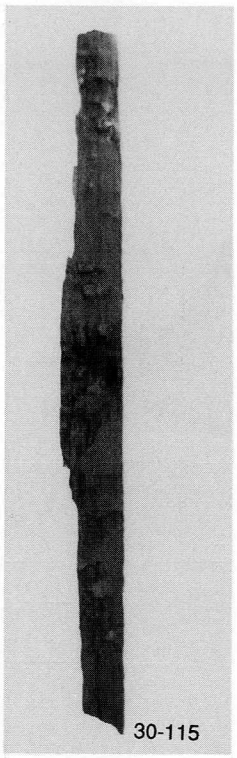
鉄砲の玉

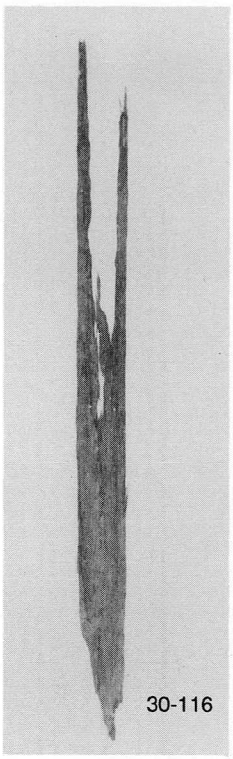
須恵器・古代以降の出土遺物

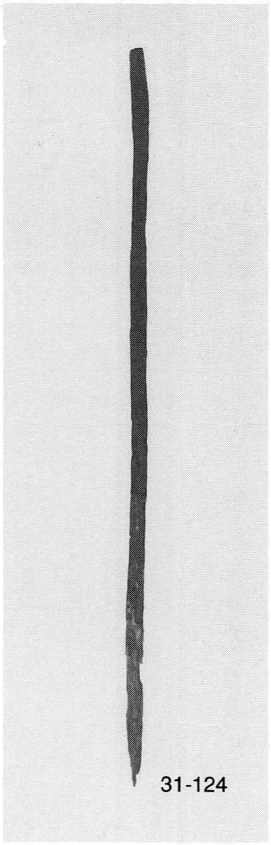

30-113

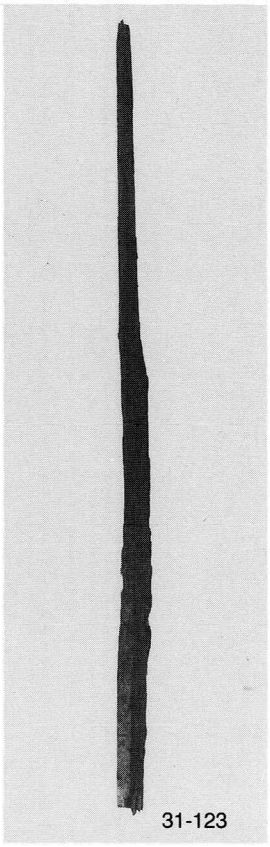

32-129

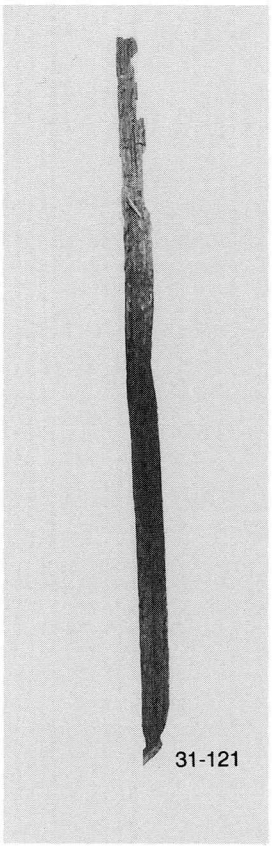

30-117

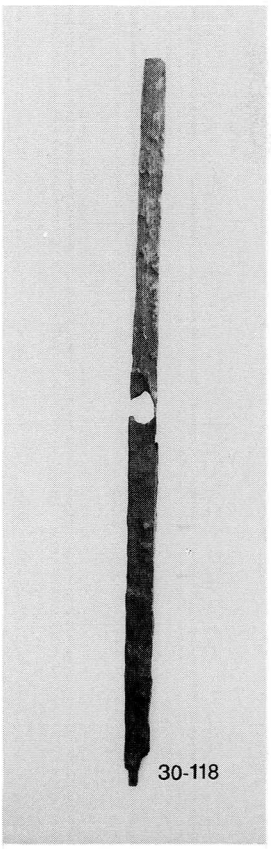

30-115


30-116


31-124

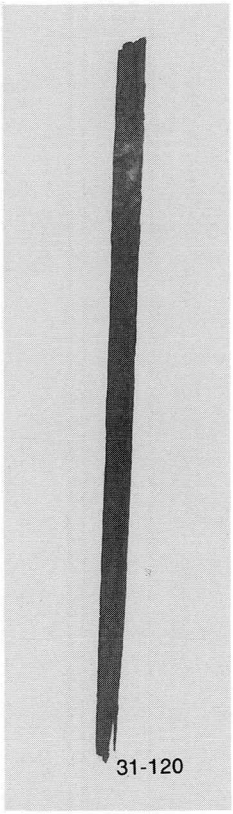

31-123

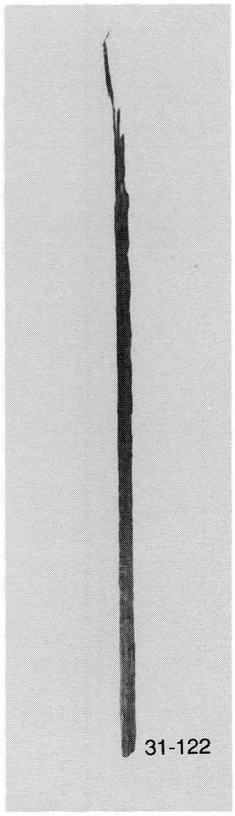

31-121

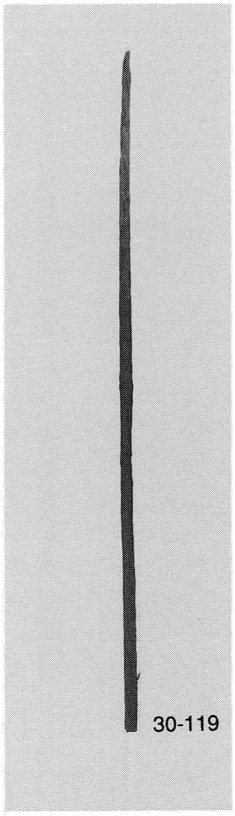

30-118

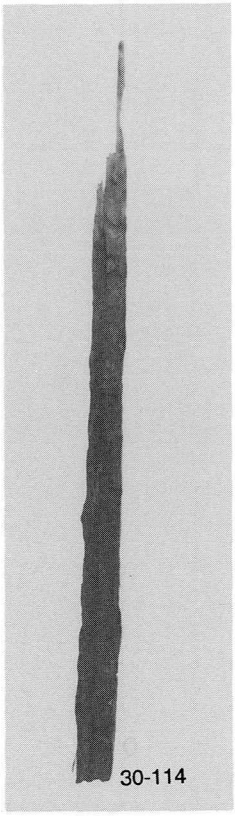
周濠内の樹木・木製品（1）

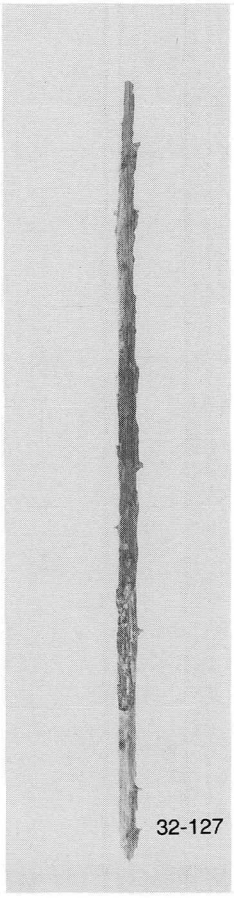
図版19 周濠内の樹木・木製品（2）

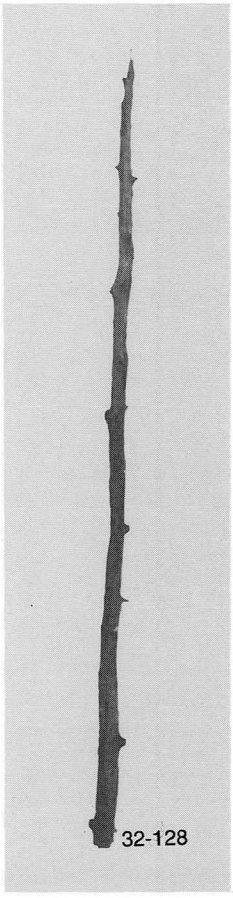

31-120

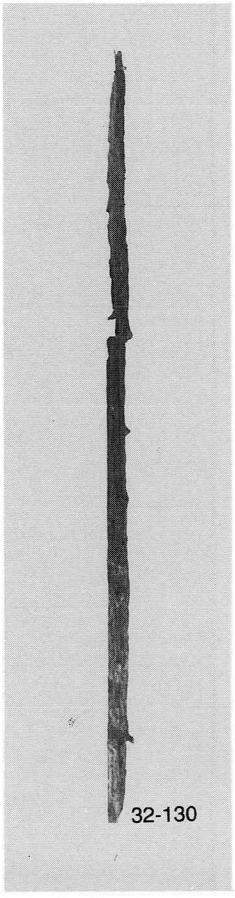

31-122

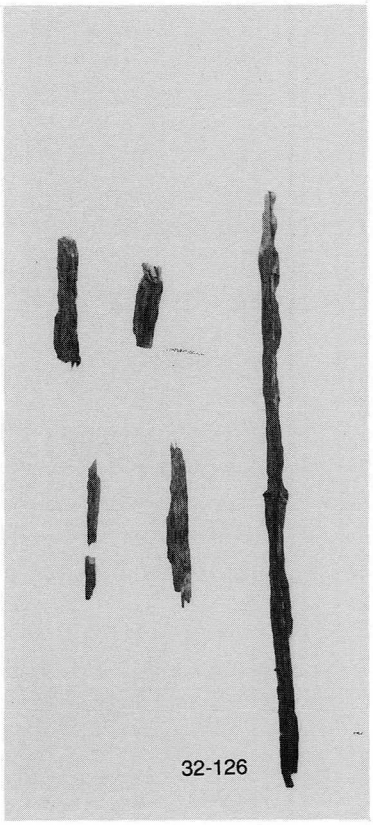

30-119


30-114


32-127


32-128


32-130


32-126

周濠内の樹木・木製品（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふげんじこふん
書名	普賢寺古墳
副書名	門真市石原東・幸福北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	門真市埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宇治原靖泰・松田朝由・船築紀子
編集機関	大阪府門真市教育委員会
所在地	〒571-0048　大阪府門真市新橋町34-21　☎０６-６９００-１８１８
発行年月日	２０００年6月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ふげんじいせき 普賢寺遺跡 第5次	おおさかふかどまし 大阪府門真市 こうふくちょうばんち 幸福町432-1番地	２７２２３		34°44′23″	135°35′39″	2000.2.7 ～ 2000.3.10	４８９	土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
普賢寺遺跡	墓	古墳時代	古墳周濠	形象埴輪(盾持人・蓋) 円筒埴輪、朝顔形埴輪 須恵器、鉄砲玉	門真市で初めて発見された古墳 古墳周濠より盾持人形埴輪を始め、多くの埴輪等が出土。

普賢寺古墳 門真市石原東・幸福北土地区画整理事業

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年6月30日　発行

編集発行 / 門真市教育委員会

〒571－0048　大阪府門真市新橋町34－21

(TEL) 06－6900－1818

印刷 / 松下商業印刷株式会社

〒 571－0068 門真市大倉町 16－14